

補增

道中

膝栗毛

増補

道中

膝栗毛

089559-000-8

特10-676

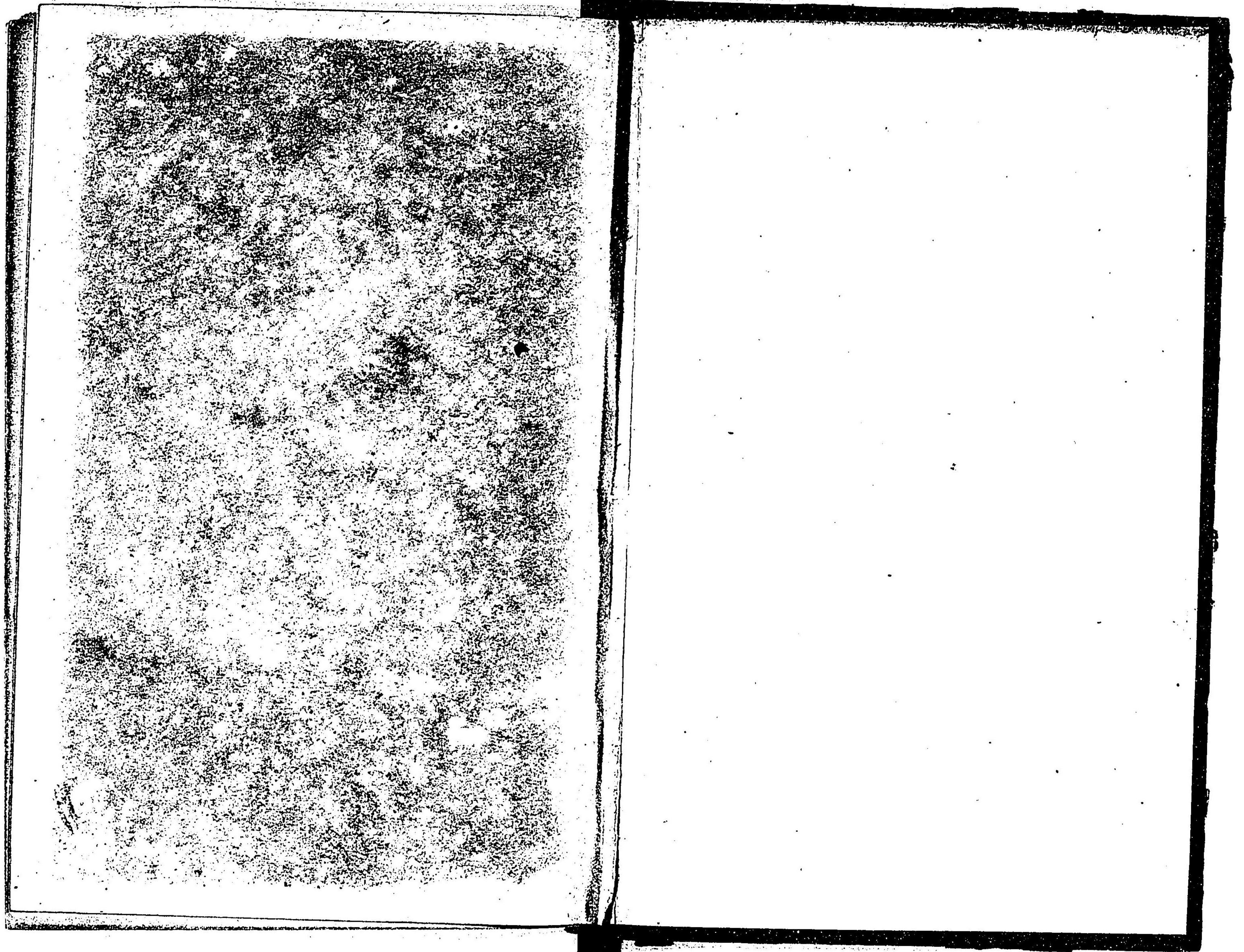
道中膝栗毛(増補訂正)

十返舎 一九/著

M16

DBM-1483





東海道  
鐵道  
中  
明治十年十月  
好吉道全

補<sup>レ</sup>失評道中藤原毛序



藤原毛<sup>ハ</sup>越白<sup>ク</sup>深<sup>ク</sup>長<sup>ク</sup>遠<sup>ク</sup>也<sup>ナリ</sup>誰<sup>レ</sup>評<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>

於<sup>テ</sup>京<sup>ニ</sup>山<sup>ノ</sup>寺<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>皆<sup>ク</sup>僻<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>也<sup>ナリ</sup>海<sup>ノ</sup>邊<sup>ニ</sup>

陸<sup>上</sup>者<sup>ハ</sup>有<sup>レ</sup>道<sup>ノ</sup>化<sup>レ</sup>祝<sup>ヒ</sup>性<sup>者</sup>購<sup>ヒ</sup>求<sup>メ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>氣<sup>ヲ</sup>

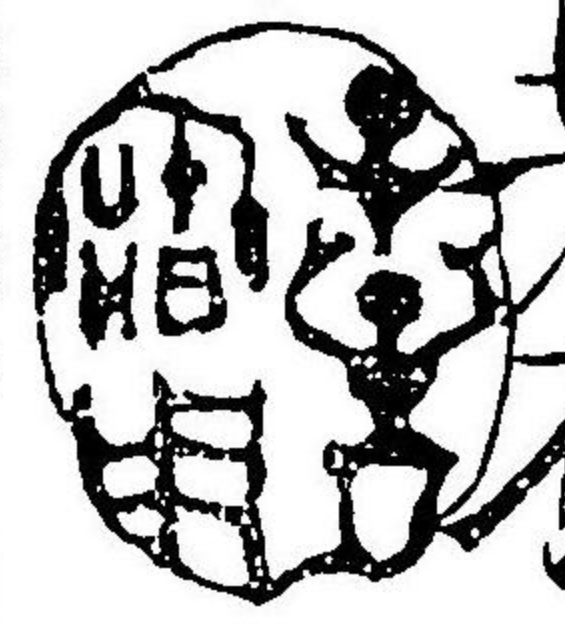
賞<sup>シ</sup>上<sup>ノ</sup>料<sup>ト</sup>可<sup>シ</sup>謂<sup>フ</sup>中<sup>ニ</sup>古<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>來<sup>ニ</sup>滑<sup>ル</sup>移<sup>ル</sup>也<sup>ナリ</sup>

之本<sup>ノ</sup>家<sup>多</sup>矣<sup>ナリ</sup>余<sup>ハ</sup>自<sup>レ</sup>三<sup>本</sup>持<sup>リ</sup>均<sup>ク</sup>水<sup>ヲ</sup>讀<sup>ム</sup>之<sup>ヲ</sup>

昼<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>闕<sup>カ</sup>其<sup>ノ</sup>語<sup>ヲ</sup>羽<sup>ノ</sup>羽<sup>ノ</sup>性<sup>ヲ</sup>遂<sup>ニ</sup>受<sup>ケ</sup>其<sup>ノ</sup>正<sup>ニ</sup>

根性<sup>ラ</sup>或<sup>シ</sup>素<sup>シ</sup>多<sup>ハ</sup>ハ<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>惚<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>の<sup>ル</sup>所<sup>ニ</sup>膽<sup>ク</sup>  
疎<sup>ト</sup>男<sup>ト</sup>多<sup>ク</sup>頃<sup>ニ</sup>夫<sup>レ</sup>昔<sup>ニ</sup>肆<sup>ク</sup>潛<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>齒<sup>ニ</sup>翻<sup>ル</sup>刻<sup>シ</sup>本<sup>ニ</sup>  
編<sup>ラ</sup>ハ<sup>ニ</sup>欲<sup>シ</sup>信<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>の<sup>ル</sup>式<sup>ニ</sup>請<sup>フ</sup>笑<sup>ニ</sup>評<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>未<sup>ク</sup>  
蓋<sup>シ</sup>余<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>於<sup>テ</sup>自<sup>ラ</sup>病<sup>ニ</sup>治<sup>テ</sup>汝<sup>ノ</sup>喜<sup>ム</sup>出<sup>ル</sup>神<sup>ニ</sup>  
髓<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>讓<sup>ラ</sup>一<sup>ニ</sup>步<sup>ヲ</sup>中<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>夫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>預<sup>ル</sup>自<sup>ラ</sup>  
鏡<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>事<sup>ヲ</sup>明<sup>ニ</sup>呼<sup>フ</sup>名<sup>ヲ</sup>曾<sup>シ</sup>開<sup>ル</sup>山<sup>ニ</sup>甘<sup>ク</sup>殺<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>  
余<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>少<sup>ク</sup>遭<sup>フ</sup>此<sup>ノ</sup>撰<sup>ニ</sup>卷<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>筆<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>考<sup>ス</sup>

前<sup>ニ</sup>丹<sup>ニ</sup>悲<sup>ク</sup>衆<sup>ニ</sup>聖<sup>ニ</sup>婦<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>振<sup>ル</sup>歎<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>生<sup>ル</sup>一<sup>ニ</sup>哭<sup>ス</sup>  
取<sup>リ</sup>何<sup>レ</sup>者<sup>カ</sup>歟<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>念<sup>ニ</sup>至<sup>テ</sup>茲<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>守<sup>ル</sup>心<sup>ニ</sup>息<sup>ス</sup>  
罪<sup>ニ</sup>深<sup>ク</sup>遂<sup>ニ</sup>昔<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>放<sup>ル</sup>殆<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>欄<sup>ニ</sup>外<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>表<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>  
心<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>因<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>德<sup>ニ</sup>評<sup>ニ</sup>判<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>高<sup>ク</sup>灵<sup>ニ</sup>驚<sup>ス</sup>  
山<sup>ニ</sup>承<sup>テ</sup>願<sup>フ</sup>深<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>流<sup>ル</sup>河<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>叩<sup>テ</sup>木<sup>ヲ</sup>又<sup>ク</sup>  
云<sup>フ</sup>尔<sup>ノ</sup>明<sup>ニ</sup>治<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>朔<sup>ニ</sup>廿<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>  
烈<sup>ク</sup>享<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>生<sup>ル</sup>海<sup>ニ</sup>館<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>醉<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>道<sup>ニ</sup>士<sup>ノ</sup>



彌次贊  
 原來聞漢  
 徒。臉容申  
 藏方。本分  
 著色且。隨  
 何皆不當  
 五返會半九題



彌次贊

北八贊  
 起頭是申  
 童。矮陋主  
 兒微。生理  
 李郎。駕。狼  
 漢信。步。飛  
 愚舍一得題



訂増補道中膝栗毛序

管根八里の長持唄は。猛き宰領の心を和らけ。竹の雀の馬士唄は。鬼殺しを爛せしむ。是の歌乃德利酒。呑や謠乃旅衣。都をさして行かけの駄賃帳を繰返し。筆の建場。雲駕の息杖を。急いやらやつと。書編る東海道。五十

三次の記行。無滑稽と方言。此二割増。重荷。僻言夷曲歌。それが中よも唯一。夜。鮓のめと盛押かたて。商なふ戀の管枕。その有増を宿帳の帖。となしたるは。空尻の殻無體。ある。ゆんの咄との間屋。場。もと。き。ハイ頼みま。走。あのみま。ま。と。此本の鹿島立。序。する。と。志。かり。

維時亨和二載壬戌孟陽吉日

十返舎一九識

○彌二尊誌銘

彌二字愚傳三世祖彌六爲紙屑買曾伯祖彌一爲屋敷折助與  
 北內爲內藏內俱得罰酒爲中風而死親爺彌八以買女郎棄番  
 町辻番爲山谷船頭其後以口說內藏者失船頭內藏者住替柳  
 橋乃託入復爲船頭號爲酒啞突所與游皆其近邊我利々々妄  
 者彌二少俠常垂二本鼻涕嚙親爺之隨事買食箸町內子供嶄然  
 爲餓鬼大將衆謂彌八有惡餓鬼矣其後以下吹笛叩太鼓踏所  
 備三河島授馬鹿囃躍方錢離潔好爲馳走率令仲間屈名聲大  
 振一時皆慕與之爲兄弟分萬西兄龜井戸親方等聞之賴人吳  
 錢爭欲令入我仲間捕口吹唱兄々焉寬政七年由親爺之薦至  
 葛西授突出面役春三月徳川將軍獵於下總小金原葛西當傳  
 馬彌二輩被課彌二謂己筵棒江戸子哩何爲雲助眞似鈍吉拔



作女代出助郷一人不悅爲喧嘩一村相談終逐出彌二不能歸  
三河島断然翻心爲狂歌師鑿手斧納言墨金權助居閑刻苦學  
狂歌又習都々逸管與彌婢有私借奔住於本所吉田町無產不  
能食飯獎彌婢爲夜鷹彌婢呆返即日歸在所相撲八年有富於  
湯島天神彌二當得金百兩氣俄傲然日夜猪口不離口女郎不  
去側旬餘將腎虛自歎曰君子樂清貧遂天命我爲有金振棒命  
不若別與友立貧乏野郎爲本之木阿彌即日往貧乏人巢穴下  
谷山崎町神田橋本町芝新網町等五日而悉無茶之嗚呼彌二  
雖白痴漢不求不義富貴猛省賑恤友達今夫賴傳信爲鯨儲錢  
則高亭大榭五采之池塘竹樹珠玉之出有馬車入有妻妾而與  
同役平居相慕酒肉相與撲散量筒相示貼印紙一盤一生附合不  
相背真若無間違一旦其人戴免之字向他若不相識人內實祝

而悅者皆是也此宜冠人間皮所我漫不出來而其人自視以爲  
得計聞此彌二之風雖餘程鉄皮賴骨亦可少愧矣彌二其後  
以無一文依神田御伯母姐持家八町堀叩寄席太鼓糊口有人  
自遠方來曰北八乃以舊相識置食客居數月以彼妊婦之故夜  
俱走取路於東海道出掛京大坂及大和廻實享和二年二月十  
二日也其紀行詳于膝栗毛可就見二人之去悠悠々緩々而謂身  
代不殘包風呂敷彌二永持金究不極雖有奇々的事必不能其  
妙々の骨折以致必傳於後世如膝栗毛變法磊也天保八年天  
下大飢彌二在大坂會大盤平八作亂以爲此義舉乃向鉢卷抱  
天秤棒入其仲間以三月二十六日戰死于天滿橋畔時年六十  
八後人曰無掛搦而出喧嘩場彌二馬蓋始于此北八眉遺骨東  
歸葬鼻下谷隨德寺彌二一家親類已亡並無子其得葬也實雖

係北八、筭段又多出假名垣魯文翁。々々勇ニ於爲人、立三約束、與彌二、爲ニ友達、彌二亦爲レ之盡。故有ニ西洋、嗟栗毛、種一矣、竟頼ニ其力、予固ト非ニ彌二親類、而嘉爲ニ其人、因ヲ不受頼、此作ニ墓誌、曰。

嗚呼彌二。以自惚與梅氣。雖固ニ一身自隱、樂男、猶爲ニ天下刮臍之本店。豈可與彼落語馬鹿詞家、同時而話哉。吾聞、遂ニ轉其魂、尙稱ニ笹棒、江戸兒、且驅ニ突痴理、鈍ニ云、留精魂於天地間、將俟ニ其同氣相求、道樂野郎、而援レ之。古之所謂死而不亡者、其彌二之謂耶。噫、微ニ斯滑稽人、吾誰與歸。

明治丙寅十一月三十日

花柳御門 醉多道士撰文

○累解

或人問ふ。彌次郎兵衛。喜多八ば。原何者ぞや。答て曰く。何でもかし。彌次唯の親仁あり。喜多八これも駿州尻江の産。尻喰ひ觀音の地尻よて。生れたる因縁よりてか旅役者。花水多羅四郎が弟子として。申童となる。されど尻癖わるく。其所に尻すはらせ尻の仕廻ひ、尻又帆をかけて。彌次も隨がひ出奔。俱に痴氣を尽そ而已。此發端ハ兩士か東都神田の八丁堀、店借居たりし中、の事を著し終、旅行の發起とする所以は馬鹿らしきことを作者が兼酒の飲料、餘計の著述をなすものからし。

○凡例

○驛々風土は隨つて音律、清濁の差別あり。俚言方語の通稱に異あることあり。笑ふべきに非き。古代の言詞は却て田舎、残りりと徂徠翁の謂あり。たとへば駿遠兩國にて。行といふを。行せといふ、行んずるなり。酒を吞せ飯を食せとは。皆吞んせ喰はんせるなりと。物類稱呼、又見むたり。

○恐しむといふ事を。相州よてり。かつ、ちんといひ。駿州よては。ちんといひ。遠州にてり。こはといふ。同國よて。九ツチけ、ねつといひ。心なきといふを。けされなしといふ事は。古今集「うらが手をさやにも見しかけ、れなく。よみをりさせるさやの中山とあり

和字正濫

に。からせてふ大おそどりの歌を。おやおぞどりと濁音よよませておし

鳥の事といへり。おそといふ。是あり。しの助字あり

○相豆駿遠よてまざいといふは。味からぞの下字をとりて。まざといふ。しの助字あり

○都て道中管根より伊勢路まては馬をおまといひ。又いふ「日本記」に馬をいふとよませり。仍て相通じて。おまといふ

○まざといふを。おせといふ「万葉」も今宵よまらぬまらぬまらぬ

○うらといふ我等の轉語おれらさち、めておらといひ。おら又轉じて。うらといふ

○驚くことを相豆よてり。たまげるといひ駿遠に。おび入るといふ。たまげる。「源氏」

よ魂消と有り○おでうわでうといふ言詞「紫日記」よなてう女のまなふみとあり

○愚なる者を駿遠よて。ひやうたぐねと云○よしと云ふり主あり。よとねと通へば也

○相豆よ。とてつもなといふ言詞は「性理大全」よ塗轍と有なるべし。駿州にいと

ひやらもあといひ。遠州よは。さやうくもなといふ

○すはること。かうまるといふは。禪家よ久しく座をる事を行座といふ行の字の久

しき義あり仍てかうまるといふ。まるとは居の心にて。ねまるといふ。まるとも

○此等の外擧るよ暇あらざ。只此巻中にあらはしたる言詞のみを爰よ解く仍て排設

の趣は。俚俗の詛言方語のま、を記して。其あらしみを純よす

○逆旅木賃泊の慘慄なる体。六部順禮。ぬけ参の患苦。雲瀧馬士。護摩の灰等の始末

もらびを載て下情を知らしむ

十返舎一九識



持10  
676

○山ニ繁  
華ニ井ノ内  
蛙生ス  
○自ニ蜻  
食之目  
可シ思ニ鳥  
賊様ト  
○一九  
假テ其生

十六丁	六行	そんちち	そんちち	百五十二丁	三行	一ふ	ツク	一ツ	ぶく
三丁	六行	積菜	漬菜	百五十八丁	三行	泊		泊	
二十四丁	九行	しやつや	やつ	百六十三丁	三行	行焼		行燈	
六十五丁	九行	衆のと	衆のと	百六十八丁	三行	観父		親父	
百三十五丁	十行	有なら	有から	百七十三丁	五行	まこ	また	まこ	たま
百三十五丁	一行	點然	默然	百八十三丁	五行	替女	ある	替女	ちら
百三十八丁	十一行	由縁	由縁	百九十二丁	十一行	餓鬼		餓鬼	
百四十二丁	一行	手酒	酒手	百九十六丁	一行	亭主		亭主	
同	七行	南無三寶	南無三寶	二百六十丁	十行	上方		割註	
百四十四丁	四行	はき結	はき詰	二百八丁	三行	云と		云と	
百五十丁	六行	よこく	よこく	三百四十五丁	六行	水戸	銭	木戸	銭
同	十二行	今折	今打	三百四十六丁	九行	女		割註	

増補 訂正道 中膝栗毛 發端

酒のもと 麴町 十返舎一九著  
此よか 神田 醉多道士笑評

武藏野の尾花がとろよ。かゝる白雲と詠し。むかしく浦の青屋。鳴たつ澤の夕暮よ愛て。仲の町の夕景色を。去らざる時のまときりし。今井の内に鮎と汲む。水道の水。長なへよして土藏造の白壁建續き香の物桶明俵破れ傘の置所まで。地主唯の通さぬ大江戸の繁昌。他國の目よりい。大道に金銀も時ちらし。あるやうにかもはれ。何でも一稼ぎと心ざして出かけ来るもの幾千萬の數限りも。なき其中よ。生國の駿州府中枋面屋彌次郎兵衛といふもの。親の代より相應の商人よして。百貳百の小判に何時でも困らぬ程の身代ありしが安部川町の色酒よ。はまり其上。旅役者華水多羅四郎が拘の鼻之助といへるよ打込。あの道よ孝行ものとして。黄金の釜を堀出せし心地えて悦ひ戯氣の。ありたけを盡し果の身代まで途方もなき穴を堀り明て留度なく。尻の仕舞

特10  
676

○由繁  
華井内  
蛙生  
○自蝟  
食之目  
可思鳥  
賊櫛  
○一九  
假其生

増補 訂正道中膝栗毛發端

酒のもと麴町

十返舎一九著

此よお神田

醉多道士笑評

武藏野の尾花がそよよ。かゝる白雲と詠し。むかしく浦の苦屋。鳴たつ澤の夕暮  
よ愛て。仲の町の夕景色を。きらざる時のおとありし。今井の内に鮎と汲む。水道の  
水。長なへよして土藏造の白壁建續き香の物桶明俵破れ傘の置所まで。地主唯の通さ  
ぬ大江戸の繁昌。他國の目より。大道に金銀も時ちらし。あるやうにおもはれ。何で  
も一稼ぎと心ざして出かけ来るもの幾千萬の數限りも。なき其中。生國ハ駿州府中  
柝面屋彌次郎兵衛といふもの。親の代より相應の商人として。百貳百の小判に。何時  
でも困らぬ程の身代ありしが安部川町の色酒よ。はまり其上。旅役者華水多羅四郎が  
拘の鼻之助といへる。打込。あの道よ孝行ものとして。黄金の釜を堀出せし心地。悦  
ひ戯氣の。ありたけを盡し果の身代まで途方もなき穴を堀り明て留度なく。尻の仕舞

（Faint, mostly illegible text from the reverse page, possibly bleed-through or a separate column of text.)

國一超筆  
語二日故  
郷難忘  
奴未脱  
俗  
○穴尻  
字妙  
○同病  
相憐  
○奈不  
餘活計  
何

若衆とふたり。尻に帆かけて。府中の町を欠落るとして  
借金い富士の山はどあるゆへよ

そこで夜逃げを駿河ものかき

斯足久保の茶を吐ちらし。頼て江戸よ。さたり。神田の八丁堀よ。新道の小借  
家住居し。すこしの貯へあるよ任せ。江戸前の魚の美味よ。豊島屋の劍菱。明梅はいく  
つとなく。長家の手水桶に配り。終る有金を吞く。是ではとまぬと。鼻之助も元服  
させ。喜多八と名乗せ。相應の商人かたへ奉公に遣りしが元來さいはじけものよて主  
人の氣にいり忽ち小銭の立まはる身分とあり彌次郎は又國元にて習ひ覺へたり。わ  
ぶら繪などをかきて其日ぐらし。春米の當座買。た、き納豆。あさりのむきみ。居あ  
がら呼込で喰てしまへば。びた錢壹文も残りぬ身代。田舎より着つ、けの。布子の袖。  
綿が出て洗濯の氣をつける者もなくこきは。餘りあるくらしと。近所の削り友達が  
打寄て。さるお屋鋪にねとる奉公勤めし女。年かさある媒して。彌次郎兵衛よ。あてが

○彌次  
公千載  
一遇

○下等  
社會情  
在眼中心

へば。破鍋に綴蓋が出来てより。狼の口わいたやうなふくろびも。ふさぎてやり。諸事  
手健に人仕事かどして。彌次郎と大事にかくる様子。此女房の奇特ある。心ざしよ。彌  
次郎夜もはやく寐て。随分機嫌を。とりくらしけるが。うかくとして。はや十年はか  
りの星霜と経りけれとも。喜捨鯛も成らせ相替らぬ貧報。されども屈託せぬ氣性よ  
て。莞爾落よしやれちらし。近邊の。あまけもの共の遊び所と成りて。五合徳利の寐  
姿流まもとよ絶へせ。べこく三味線の音。不斷味噌桶の蓋を。わくる間とては。なか  
りける。あると彌次郎兵衛の。るそとみへ女房あふつ。あがしもどお。あそのまのけし  
ふつて。うらくち。おちよま。モシおかみさんへ。御無心ながら。醬油が。そこしあらば。  
どうぞかして。おくんせへ。ホンニ。ゆふべの。大分。お賑やかで。ござりやした。わつ  
ちらが所の生酔ひどのを御覽せやれ。まだけへりやせんわな。此間だの晩夜更けて。  
路次の戸を。見れるやうよ。たいたとつて大屋さんの。おかみさんが。あの口でござ  
へそうよ小言をいひなすつたが。わつちらが所の野呂馬殿も。のろまなりやア前のま

○山神  
之膽力  
可驚

○猿之  
響笑



たおかみさんも。あんまりじやアござりやせん。へ。チント店賃の一年や二ねん溜つとつて。一生やらせに。おきやアまめへし。それをやかましくいふくらへなら。溝板の腐つた所も。どうぞとるがい。じやアねへかへ。そして犬の糞も。てんぐの内の前はかり浚つて長家のものは。あんだと思つて居るやら。ノウアくんさん。トむかふのうちの唄衆へ水をむける。どわがり口よかたわし。おろして子供房やがておりに出かけ。おくん。モシエ。あんまり大きな聲をして。そんなことをいひさるな。奥のかけんつうが。今手

○此山  
神亦氣  
強  
○亭注  
關白之  
位

水よいつたよ。ア、おしやべりも又大屋さんのおかみさんへ。いつそ追従ふばかりいつて。長家の事をどうめへつたからめつたと。ム、苦勞性じやアねへへ。それよ聞させへ。此間からあそこの内へ来て居た居候はアノかみさんの妹女だといふことだ。ナニあれがお屋敷又奉公まであるもどさまじる。ちよつと見ても忘れてありや。ありやアおへねへ。ばんくるわせものだ。一昨日もどこか下谷のれやし死へ。目見よいくとつてつくりたつて出ていつた。ナアニよその隠居さまへ。妾よいくので支度金が七兩来たとき。いやまやアねへかへ。あの頬で妾も氣が強い。わつちらもこの頼のはげつてうがなくて。耳の際の痰瘡がもふちつと。ちいさいと妾にでも出て。支度金をとるがものを。ハ、ハ、おかみさん。彌次さんはまだかへ。チャ、ハ、噂をいへん影がさすと。ソレ旦那がお歸りだ。こむたりおのがうちへいつ。彌次郎。エ、この畜生めは。願よかけておらがどころの裏口よ寐てゐら。おふつ茶のわいてあるか。ふつ。チャおまへ酒計で。おまんまはまだかへ。彌次郎。忘れてある事さ。居酒屋へは



○先ッ殺ス  
一人ッ  
○彌次  
之目尙  
愛ニ戀ス北  
八ニ

よつゝが。居飯屋へを寄あんだ。おふつ。そきて喜多八さんの所から。なんで度々呼び  
にくるのだへ。彌次郎。おれも金をかまてくれるとつて。おふつ。チャ馬鹿しむどうした  
のだへ。彌次郎。あいつめが假宅へでもばまつたそふで。親方の金をちつと計りつかいこ  
んたといふことだ。其尻がわれると。しくじるのあたりまへだが。こゝでしくぎつて  
の理屈のわるい事があるといふ。何だときいたら。あそこの番頭めが。此間疝氣が天  
窓へさしあんで。それなりよ。天窓が。きやつきりとあつて死だといふことだ。それよ親  
方の。年寄の癖に美さる若いかみさまをもつて。腎虚してもふ。今日かあそこのといふ  
くらゐ。これも今にめでたくあるの必定。そふとると喜多八めが其後家を請け合て。  
手も入る仕様があるといつたが。なるほどそふいけばあいつめり。あかまをれおまは  
あしだが。そこでいらいらもせりい事無し。どうぞこゝで。しくじらねへやうよ  
してへものだが。きかたがねへハナ時よ飯よしやう。何ぞ菜はねへがおふつ。さつきの  
むさみ殼汁さ。彌次。ナニ拔身が喰れるものか。きかしていつも。さつきのあれば。さつ

○阿蛸  
吸付テ不  
離名証  
自稱

けへあし。トこの内日もくれたるにあんどうをともし。彌次郎ちやづけを。侍。イヤ  
卒爾ありら。駿河の府中からおぎつた彌次郎兵衛殿の。爰元でおぎるか。ヤア。おふつハ  
イ。こつちらで。ござりませどが。どつちからお出ささいました侍。イヤ。ハイ氣遣ひ者  
ではおさんない。ヤア。ト三十ぢか女をつきて。そいり。こし。彌次。コレハ兵太左衛門  
さま。妹御を連れて。何んとして御出府で。ござります。兵太。あんどきてたア山が。あ。こ  
のいんもふとめを貴様の所へ。嫁入りよ。つれでまいたのでおぎる。ヤア。斯をかし  
申て。合点がまいるまい。貴様國元よ。これなる身どもが。いんもふとの。お蛸と。密  
通をせられたといふこと。おとよて聞て腹立。いたうたれども。たんだひとり。い  
んもふとがと。どふした縁で。貴様で。きつて。添ぬと。ヤとゆへ。不便に。おもつて  
堪忍の胸を撫で。そいた男よ。添せせと思ひ。あわめ。態く。召しつれて。参つて。おぎる。  
ヤア。此上の。随分と。いんもふとめを不便がつて。やつて。下さ。まづ。祝つて。冷酒で  
ありと。盃を。せせせ。ヤア。はやく。おふつ。チャ。ねまへさん。は。どきたか

○彌次  
之寫真

は知らねへが。この國からめつそふち。物体へ男といふ者。女にあつて。二世の三世の。眞實らま。ひかけて欺してみる。女をちと。おさだまりの口上。それを。まんまことをよして駿河から。わざ。其男に。添はそふとつて。つれておこしきさるといふ。馬鹿氣さつて。ゐるじやアござりませんか又妹御も妹御。満足な。男でもあるとか。わたしのしかたなし。添ては。ゐまどけれど色が黒くて目が三かくで口が。大きくて。髭だらけで。胸先のら腹中よ。癖がべつたりで。足。年中雁癩で。ざら。きて。イヤまた寐た時寐息の嗅い男。彌次。ヤイ。こいつめが。亭主を羅利骨灰に。まやアがる。おふつ。オホ。それでも男といふものは。そたらねへ者で。女とさへ。いやア眼一でも鼻欠でもた。は通さぬ氣性。さだめ念頃知られた人も。邂逅にはありましたろうが。あんまり好もしい。男でもござりませんか。おまへさんがたの。やう。跡を追て来た人は。ひとつとりもござりません。此の狭い内に。女房がふたり三人あつたら。大屋のら根太がたまらねへ。店を明ろと追出されるでござりませう人の知

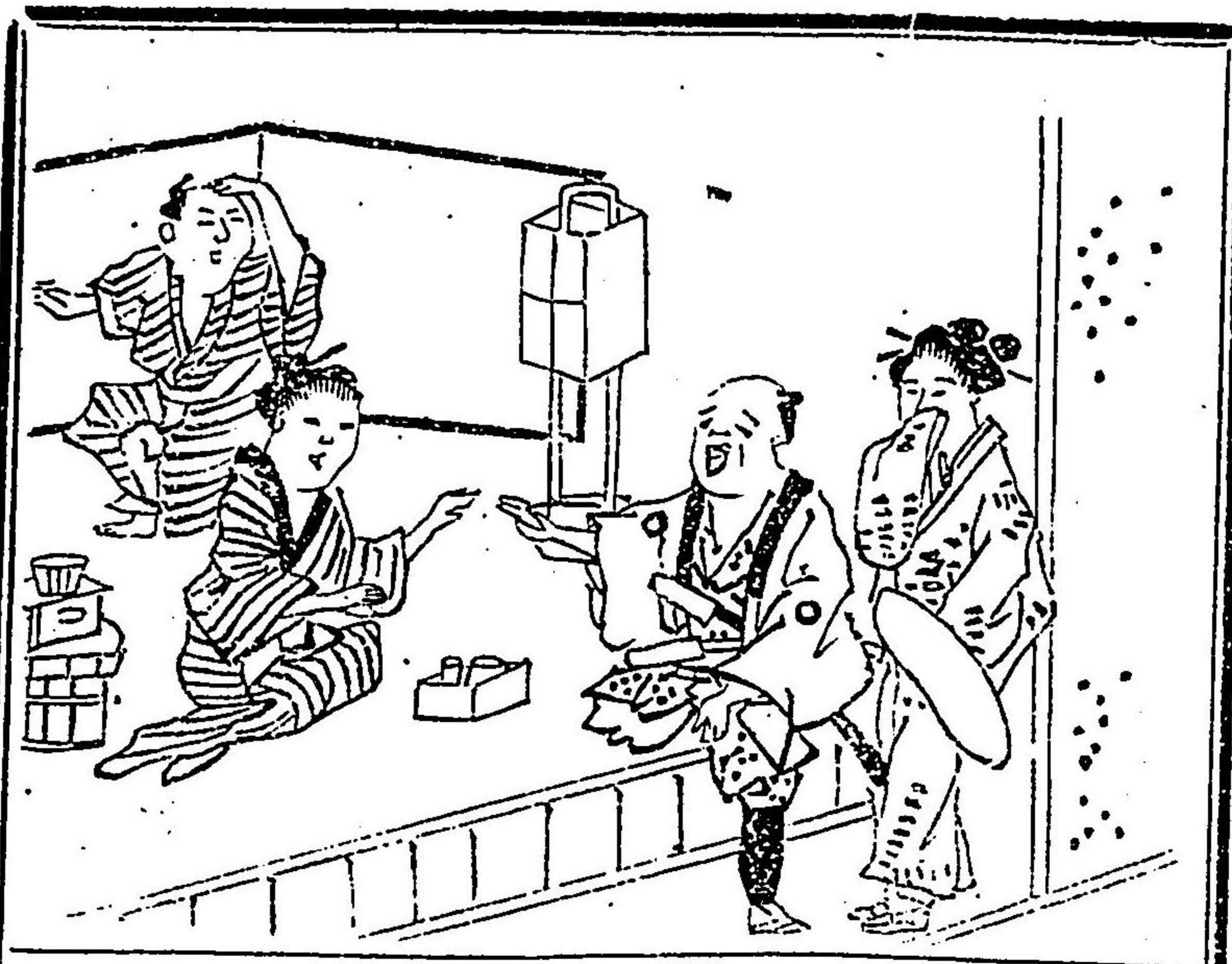
○彌次  
有直打

らねへうちよ。ばやくつれてお歸りなさませ。兵太。エレハイ最前からつべら。こべらど。此女中よくまやべるが。其方先なに者だい。おふつ。アイ。わたくしかへ。彌次郎兵衛の女房でござりませ。兵太。アニ女房だい。見たくでもないヤア。これ彌次郎兵衛。お身女房ともつたが。エレ。是非よ及ばない。繩をの。れ。國元へひいていかせに。わちうよりはやあわを取出立。彌次。ナニ繩を。かかれたアどういふ理屈。むつちが女房を。もちやア。繩をか。らにやア。ちりやせんかへ。と何うもねへ。モシエ。鯨切りを二本さしなつたつてそれが恐ろしむ。ものでもござりやせんわ。兵太。イヤお身。がぬにかさ高におでやるな。コリヤよくさけ。今度いんもふとを。めしつれた。家老中の指圖に依て罷り越たぞ其譯と。いふの相役の横須賀利金太かたより。此いんもふとを。婦妻。貰ひたきよし煤を以て。やこした。身よとつて。過分の聲ゆへ。早速。同心して結納まで受おさめる所よ。いんもふとの。一筋。こなたと夫婦の契約をした上。たどへ親兄弟の差圖でも。ほかへ縁よつかせたア。いやだといふ。みども魂消

まいものか。ア、せせ事がかいと。それから其利金太かたへ使ひをつかはし彌次郎兵衛と申すものと。妹めが密通を致せし事。神もつて存せと。それゆへ。結納も受納致せし所ろよ。いんもふとめり密通の男あらでり。添ないとやと然れば妹か首をさつてこなたへ持参仕らふ。それよて御一分を立られ。御了簡頼み入とや遣せし先方も諸親類をじめ傍輩どもへ。兼てこなた妹御を妻よ受る筈と吹聴せし上り。世間体へ對し中譯の無仕合。女の首一つ受たとて。何の役も。た、ぬこと此上り其元と討果と。より外分別なし。明晩安倍川原に於て。勝負を決せよとの返事。元來身共も覺悟の前。いのにもと挨拶せし所ろよ。家老中より雙方を召れ。年來御主人の御知行を頂戴いたし居ながら。私しの宿意をもつて。討果さんとの殿へ對して第一不忠妹が兄よかくして。夫を持しを知らせよ。利金太よ契約せしを。不届といひ難し。いまだ婚禮もせよ。さうちのさど。互よ一分のすたるといない筈。自今以後兩人遺恨を棄て御奉公を大切勤められよ。また妹あた子ことは借初よ。いひ約束せよ男の外。他へ縁さつてくま

○女房  
有先見  
五十三  
次曝耻  
因縁有  
于茲

じとは寔よ貞節の至りと殿も不便と思召され下地より馴染たる男に添せよとの御意。有難御受やて。それよりこれまで罷越たる所。さきの男今女房を持居故。すどくと妹をめしつれ歸りましたと。ア、ハ、兵五左衛門ともいはる、待が。生類さけてかへられずかヤアサア姉めを妻に致せば其通りいやだといへば。是非とも繩をかけて國元へひきつれ。家老中へ此段を披露し。一旦約せし利金太方へ。己を渡さねと。兵太左衛門武士がた、ちいサアせよとがいと諦めて繩をか、れ但しは踏附けてめまどらぞかヤア彌次ハア成程。そふおつまやれば。聞へましたか。しかしそれは。おめへさまの方の得手勝手。たとひ此身は三枚もあるされ切割まれて惣辛よせらるゝとも。我と大切よまて。艱難辛抱する此女房を捨て。妹御を女房にもたれるものか。まかたがねへ。どうとも御勝手よあせへまし。トかくごして兩手をうまろへまはせば。兵めんとするを。女ばおふつ。モシく段々の様子を承たまはりませそれ御尤奇事去らふゆゑがかり付き。ながら。現在夫が細めよか、り。永の道中に耻をさらま。お國で。もまも命よ拘ること



やなどあつてた。またしの悲しき。モシ今  
 おまへのいひなさるよりの。たとへ此身は  
 どうあつても。艱難辛抱な女房の。とて  
 られぬと。いひあさつたが私に千倍も  
 ふさんにもいひませぬ。わたしよりの。隙を  
 下さりませ。あの殊御の。駿河からの馴染  
 とあれば。私よりいひあさの事。添ふとあつ  
 しやるも無理ではない。サア斯わけて。い  
 ふうへに暇をもくれませ。お侍さまの。手よ  
 か。了簡あら。まづわたしから。ささへ  
 死にます。トなく。あがしもの。ほう  
 彌次郎ね。彌次。コリヤ。何をさる。馬鹿  
 さへて

○百石  
 之領分  
 必是禱  
 時

ものめがおふつ。イエ。それで。彌次。ハテさてそほほどに。思ひつめた。ことあらし  
 かたがねへ。ちつとの間暇をとつて。親分の所へでもいつて。ゐてくれ。大事の女房を  
 今去ふな。い。夢よもおもはねへ。はのねへ別れをさると。みんな己が。わりいから  
 だ。トさそがの彌次郎も。女房うの手まへ氣の毒さに。かたかけへまねきて。いろく  
 やれを。びんぼう人のさざんば。さの身きた儘。くしばこよ。ふるし。みひとつ。  
 ひつか。へて。さまたさから。さ。として出てゆく。兵太左工門。大小をとりて  
 ほ。ヤレ。重荷を。おろした。ナント彌次さん。わしが仕打の妙でありませう。彌  
 次。駿河もの。詞恐れ入た。田舎侍の立。い。うな後家の質屋へ見せても百石どりと  
 直打する男を。棒手振の芋七として。お。く。惜いもの。それよこのまた。矢場のお蛸が  
 田舎娘の身振。妙であつた。皆おれが自作の狂言で。兩人を頼んで女房よ。一ばい。く。と  
 せ。追出たも。あの陰氣もの。飽果たからの事。ひとつは急。拾五兩と云ふ。金が無  
 ればあらね。こ。芋七。ふ。と。咄したら。云。ソリヤ。あ  
 ば。るの事がある。去る所の隠居が内の腰本に手をつけ。孕したゆへ。婢や娘の手前へ



玄おた子もろとも。立ち出つれば彌次彌次コレ芋七。持參金の。さたが赤いがどふ郎おくる。ふりして。表も立ち出で

時分。隠居のやうから。くる筈。問違がひは。ないといふことだ。ソリヤア請合ひさづ

彌次コレヤア寒くあつた時。茶漬ても喰ねへか。あつば。イ、エ。よろしうござります。

彌次そんなちもふ寐ようか。あつば。おどこを。とりませう。彌次。チイ。おれが出して。

やろう。ト戸棚より。やふれぶどんよ。かいまさきを取り。彌次。エ、今ごろは誰だ。ト

長屋の者が娶を取ると長屋ぢうの。ものか来て其娶の尻をさそつて見るが定法。今

そまゝの来たことをどうして知つてやら。それでなとりよさあつたよ違ひは無し。そ

きたり懐妊のよし。おまじくは。まだ今宵は来ませぬと云つて。見せ度ねへか。どうで

○於壺

出先妻

取れと

こを

あろう。あつば。ヤ。わたしはいやだのふ。殊また、の身ては無し。まらないか人

に。此おるとを撫させる事はいやだね。彌次郎。そんならどこへかくてへものだ

が。此通り二階はなし。シャットあるぞ。窮屈ながら。ちどの間。此所へ。ト賣

のあま半櫃さいわい。ふたをわけて。彼お壺をぬれもとのことくふたしてあま。や

次。ヤア喜多八かエ、今時分よどうして来た。北八。イヤモウ。内も落着てゐられや

せぬ。此間のらおめへ。頼んだ拾五圓の金の事。翌日は店御しまが、る故。是非

へど。忽ち百日の説法屁ひとつ。おめへのいふに。随分心當たりがあるから。讀談

してやろうと。いひさつたよよつて。じつと待て居たが。今以て沙汰が無から。あ

まり氣つけへさ。寐處からそつと脱てきやしたが。いよくその金は。出来やせうか

ね。彌次。しれた事よ。あしたの晝まで。きつと出かえてやる。そこへいつちや男

だ。あんなこんなよ。まみつたれな暮し。きて居ても。さアといへ。拾兩や拾五兩の目

○張子

泰山吹

欲飛

くさりがね工面せうといつたがせうがよやア。ちげへはねへから。落着て居さつし  
 北八 そいつは有難。そのかはり百倍にして此恩を返しやと。此のひびからいふとを  
 り。番頭はあくなる。親方も今よ目出度なりやとから。跡で後家御を手にいれさへす  
 りやア。すぐよわつちが旦那様どうか芝居の敵役がいふようさこつたが。こればつ  
 かりは違なき。極々内々のところり。もふ出来か、つて。居やすから。今が大事の所こ  
 ゝで拾五兩の金がねへと。まくだつて。此もどらさ峠もどらさだのら何卒お頼み申し  
 やす 彌次 おれも手めへを思ふは。身をおもふだから。其咄しのとをりにいささへき  
 ると。互の爲。あその晝時分よ。耳を揃へて十五兩さつと間よあほせて遣す。の咄  
 のうち。半櫃のふ。於壺 モシ。どうぞしてくださりませ。腹が痛くて。どうやら産  
 たをおしあけて。ア、苦しむ。ト無症ようめさ出せば。彌次 エ、そいつの  
 そうよありままた。ア、苦しむ。ト無症ようめさ出せば。彌次 エ、そいつの  
 困つたものだ。コレ。北八。ためへ子を産女の手傳を。たとねへか 北八 ナニ  
 とんだとを。イヤかみさんが。いつの間よ孕んだのださつぱり知なんた隣のかみさん



でも起して来てたのむが宜。彌次 イヤ。く  
 ちつと譯があつて隣へも沙汰なしよ。こ  
 つそりとやりてへ。マアそこへ湯でもわ  
 かしてくれ。北八 それの承知だが何あんな  
 奇究屈な所へかみさんをいれて置ぬたの  
 だ。サア。く出させへ。トはら女の手  
 をひつぱりて。引出さんとし。あつばヤア  
 けるふ。あつば北八を見て。ヤア  
 ヤアおまへか。嬉しやく。わしが産み月  
 を心もとなさよ。爰まで尋ねて来てくだ  
 さりましたか。ト志がまつくに。北八はび  
 しんは。彌次郎 コリヤ北八。手めへ此女と  
 れだ。ちかづきか。あつばハイ私。この喜多八

○泰山  
遭地震

さまのござる内よ。おまんまたきをぬたして居りまえたもの。いやだといふを無理無駄に。北八さまよ口説れましてツイ逢まして。こうした身にありました故。お隙を貰ひ。親許へ歸りまして。物堅い親。うちへ入れせ。北八さまのもらひ分にて。親のてまへを引取れ。余所の内へ預られて居りましたが。此事親方さまの耳に入らぬうち私よ拾五両の金をつけて。外へ片付たいとの相談。わたしは逆も斯なるから。いつまでもはあれぬ氣でゐまえたけれど。それでいあなたのは爲もあるまいと。得心づくで思ひきり。心よそまぬこへ。嫁入して来ましたのでござりませと。トくるし中いさいのはあし彌彌次 ヤア〜そんなら親方の内の引負ひ拾五両あくて。償はれぬといつた。引負ひでなくて。この女を片付代の拾五両の 北八 さやう〜 彌次 エ、おきやアがれ。此べらばうやろうめ。よくおれをとんぐめよわはせやアのつた 北八 ナニとんだめよわふものか金さへ借ねへけりやアい、きやアねへ〜 彌次 ぬ、と何のとだコレ其金もへよ。おらア女房をさらけ出ましてしまつて。今夜からひとりで寐

○北八  
之言無  
申分奇  
妙

にやアならねへは 北八 そのかはりませ。若い女房を譲つたのら。申分あるめへ 彌次 たはことつくまやアがれ。あの女のつら。ふた目とも見られる顔かいめへまきやろうめだ。トまつくろにあつて。はらをたて。一ツ二ツいひつりて。彌次郎こらへせきりよむしがあぶるとへウ〜うなつてくるしがるのも。かまはせ。こあたにはやみくもどつかまふてゐるうち。夜明て媒妁の芋七。商賣物のかいだしよゆくどてこ、の内へおどづれなるか。何やらうちよは。ばつたたくさおとまて。女のうめく聲もきこゆるよ。芋七これいと。そとより戸をあけんとするに。あかき。叩てもあけさば。やまはよ。そとよりひつばせ 彌次 ヤアいも七か。よくも〜此やろうめと馴合えて。おれをはめたさ〜合点しねへず。そまねへず〜 芋七 ナニはめたとは何のことた 彌次 なんの事だもさまじひふてへ奴らだ。トまた芋七よどつてかゝると。いも七彌次郎をねぢふせる。北八とりさへても。さかき。どつたかへまて。たばこはんをふとくたくやら。どびんの茶をぶちまけるやら。三人やたら。みつちやに。さわきたつる物音。さんじよとなりの人々おひ〜かけつけ。かれこれを取りさへるうち。おつばはそこらとのた打まはり。くるしみたるか。つい血をあげて目をまはし。たをれる 北八 ヤア〜お壺さうした〜コレ芋来て〜可愛そふよ。どうかまたそうさ 芋七 コリヤ〜目をまはし〜のだコレ〜水だ〜 北八 お壺ヤア〜と奇りのて



○ 佳語

○ 先ッ殺ニス  
二人

いさゆ ねつばさまとは。たれのことだ。モシ愛のかみさまは、芋七 コレ此目をまはしたが。がみさまとあり、ハア彌次さん。ねめへのおかみさまか 彌次郎 アイわつちが女房のやうでもあり。またさいやうでもあり。とあり はア聞へた。喜多八さまのかみさまか 喜北八 アイワつちのか、アのやうでもあり又ないやうでもあり とあり マアあんよまろ。どつちのだから知れぬ。おかみさまヤアイ〜 芋七 コリヤつめたくかつた。もういけぬへ 北八 エ、ムぢらぬことをした。彌次さん醫者をよびよやつてくんなせへあ となりの喜主 わたしが元宅さんでも呼んで来てあげませうが 彌次 その序よれ寺へもいつてもらひてへな トこのうち醫者がくるやら灸をすへるやら。よつつばはかほのいろかじり。さつぱりいきたへ 喜多八 かはいや只の身てはなし。今のさわぎよ。血があがつたのさう。まかたがねへ。時よ彌次さんためへも腹立たさうが。どうぞ。了簡して此の取り始末をまてくんなせへあ 彌次 おれをば色々な目に逢せる 北八 何程勘當同然よした女でも斯なつては親の所へも知せぬは成めへ誰を遣た

○ 先ッ殺ニス  
三 八  
九 生涯  
之 環璫

もひだらう 芋七 ソリヤアわしてもいつてやろうか。せんでへこれはどういふわけらさつぱり耳からねへ。おらが新道の肴屋よ。預つて居た女。余所の隠居の妾だか。片付たい。世話してくれろと頼れたから。この内へ仲人きたが。今聞けば。おめへの女房といどうした。理屈は 北八 マア〜あどでわかる其の肴屋といふはいらが。親方の所の出入。預けておるたのやつぱりおいら。マアとをよりか早く親の所へ知らせへ。それもその肴屋まで報知せると。親の内へあそこからしらせてくれる。芋七 そんならいつてやせう。トいも七は出て行くさんじよの人々手傳ひて。そこらとりかたづる 北八 何よまろ。わつちのちよつといつて来やう。ゆふべそつと出たま、たから。あとい宜やうよ頼みませト紙入から金貳歩だして。彌次郎よわさし。出か〜 與九八 マヤ〜 北八殿て、よか。親方がどう〜今朝がた。御臨終おされた 北八 そうだらうとも 與九八 それよつゝ。おかみさまがあつしやるよ。北八に暇をくれる。あれは平生心ざしのみだらさもの。旦那殿がしきたる猶の事。女の主と侮とつて。どのや

○ 蕪峰  
哭飛去

うな不埒をせまいものでもないからそうく請人の所へ引き渡してやれとの事それ  
 はと傍から。さきく取り成をいつて見たが。どうてもさきまにかみさまへ。何ぞい  
 やらしい事でもいつたを見へる。そうかきて日頃のらいけすかねへ。頬の皮の厚い  
 男。顔を見るもいやだと。貴様の事をわるくいつて。七里潔敗いやだくといつてご  
 ざるから。まかたがねへ。モシ彌次郎兵衛さま。あなたか。只今御開の通りでござり  
 まそから。さだ八どのは是でお渡しします。彌次 承知いたしました。コレ喜多八あのと  
 をりだが。それでい、の 北八 イヤもふよくてもわるくてもしかたかねへ。しかまそ  
 の筈ではねへつもりだよ 彌次 くれくもいめへまします。業ざらしな野郎め。いつ  
 そのこと何も角も。ぶちまけやうか 北八 ア、コレく誤つたおがむく 與九八 また  
 折を見て。訴訟のーかたもあろう。あんましろ。今日の内がどり込で居るから。又その  
 内よ トあいつそこくよして與九八の出で 芋七 サアく親元へのしらせて來た  
 が。是のら買物をせせりなるめへ 北八 御勞苦く。迎ものとも私ちといつしよにきて

くんねへ ト彌次郎へ渡した貳歩を取て芋七を引つれば いも七 サアくこの元氣で  
 佛を桶へさらげこんでしまふ時に寺へどこだ 彌次郎は 馬鹿アいへ。おいらがうちに  
 寺か。あつてたまるものか 喜多八 そいつのつまらねへ 彌次郎 かもふるとアね。なん  
 でも持ち出しとへとりやア何處かきら寺があるだろよ 喜多八 それだどつて葬禮を昇  
 ひて。寺町を呼つてあるひたとつて買人のあるめへいも七 イヤそれもおもしろかる  
 う。わしの寺町へばかり。あきあひよゆくか呼びよぶが町とは。ちがひやそア今頃  
 のきろものきら死んでいこくくゆうれんどうや。ばけきやく。卒都婆の干物よ。  
 石塔のたちうりまどは。よく賣るから葬禮も買人がありませうハ、喜多八 かわ  
 へそふよ晒落どころさやアねへ。サアくはやく片付けてくんなせへ トなまゑひた  
 てんかつて。むだやらまやれやら出はうだい事。まやべりあからしやどけをおけの  
 中へおさめて。香華を手向けるどころへお壺のて、おや。涕をふまきくたづねきた  
 りアイゆるなつしやりまど。もしやハアお壺の親でござらア 喜多八 これは。よふこ  
 そまつこちらし親ヤレく愛をさきおりましたわしやハ、田舎者でござるから



○佛ヲ入ル  
釋迦様ニ  
此女成  
佛無疑  
南無阿  
彌陀佛  
南無阿  
彌陀佛

ありまど 大や コリヤア佛を逆さま入れたのでござるハ、ハ、親ハアそれで落着ま  
した。コリヤどあたも御太儀で御さるトこれより夜よ入て葬禮と奇し。あどねんを  
かくしんぼうせし親方の内を出されて。ろにとむらひけるが。さてしも喜多八のせつ  
よつまらぬ身の上にあきはて。いつこのと。まんなをまよ。ふたりづれで出かけま  
かとの。そうだんから友達にたのみて金子をかりうけまづその年の目出度春を  
むかへてささらぎのあかばより伊勢さんぐうとおもひたち東海道へど出かける

鹿島立の狂歌

難波江のよしあましとも 旅あれば  
おもひたつ日を吉日とせむ

増補 道中膝栗毛發端終

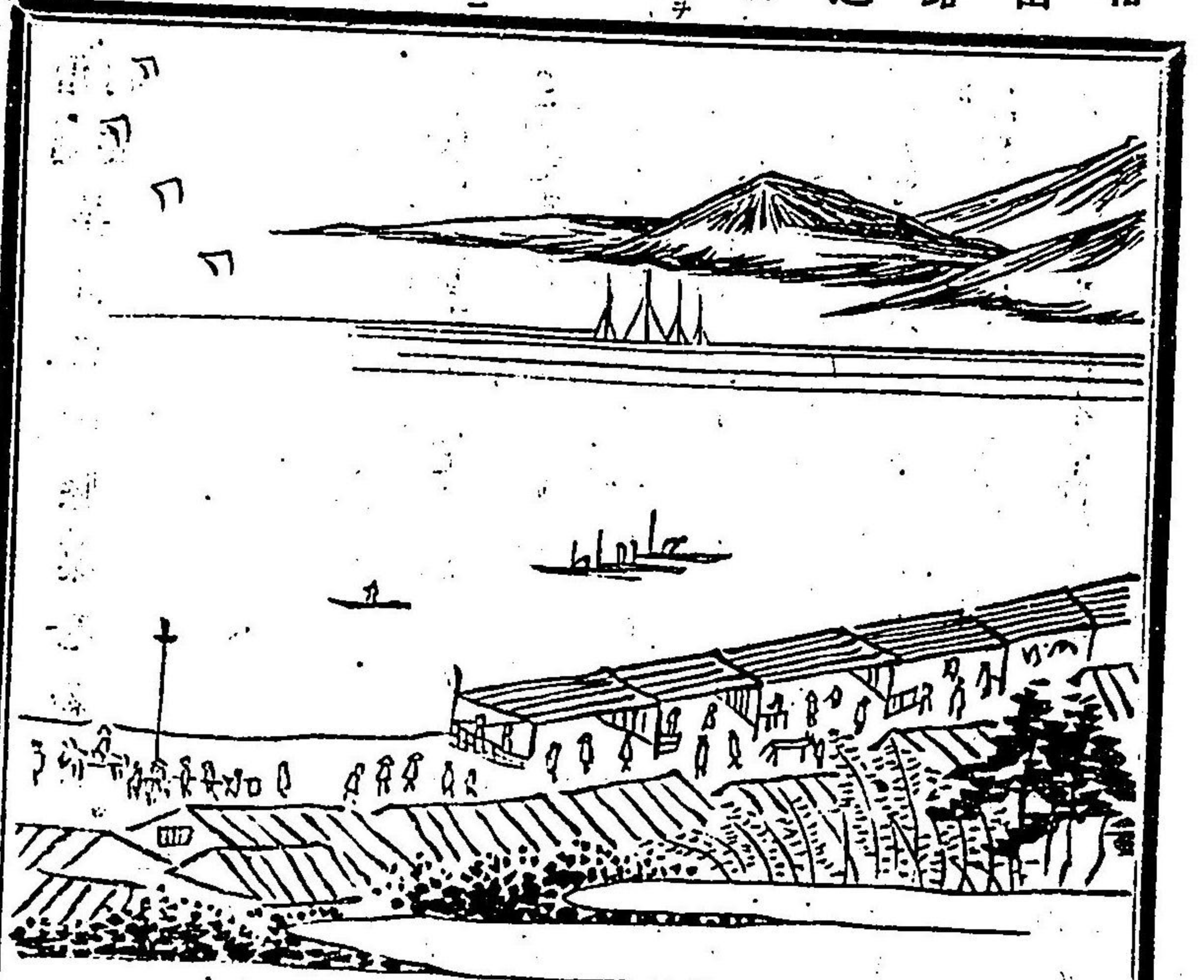
酒の元麴町 十返舎一九著  
酒の神田 醉多道士笑評

○發語

増補 笑評道中膝栗毛初編  
富貴自在冥加あれどや。營みたてし門の松風琴に通ふ麗らうさ。實や大道の髪はつの如し  
と。毛けすぢ程も動かぬ御代のためしよ。雞とりか鳴く吾妻錦給に。鎧武者よろいむしやの美名ひめいを残し。弓  
も太刀たちも類がくよして。千早振ちはやふるの廣前ひろまへよわさされる豊津國とよつくにのいさやしの堯舜けうしゆんのいよへ。  
延喜えんぎの昔むかしもまのあたり見る心地こころちよなん。いさや此時國々の名山勝地めいざんじやうちを巡見めぐみして。月代  
よぬる。聖代せいだいの御恩徳ごおんとくを。藥罐頭やくかんたまの茶香咄ちやのむねばらしよ。貯たくはへん物をと。玉たまくしげ二人ふたりの友ど  
ちいざないつれて。山鳥やまどりの尾おの長旅ながたびなれば臍へそのあたりよ打替うちかへの金をわた。め。花はなのお  
江戸えどを立出るたちいづり。神田かんだ八丁堀邊はつてうぼりへん。獨住ひとりずみの彌次郎兵衛やじらべゑといふ。のをらくもの。食客むせうの北  
八はちもろとも。朽木草鞋くもくわらじの足元あしもと軽く。千里音せんりやうの貯たくはへん何貝なんかいとなく。蛤はまぐりのむきみ絞しぼりに

○古製  
兵器至  
今無半  
文價亦  
目出度  
葵

○大和  
 國多山  
 嶽道路  
 險故巡  
 廻者皆  
 疲勞是  
 以有足  
 引冠辭

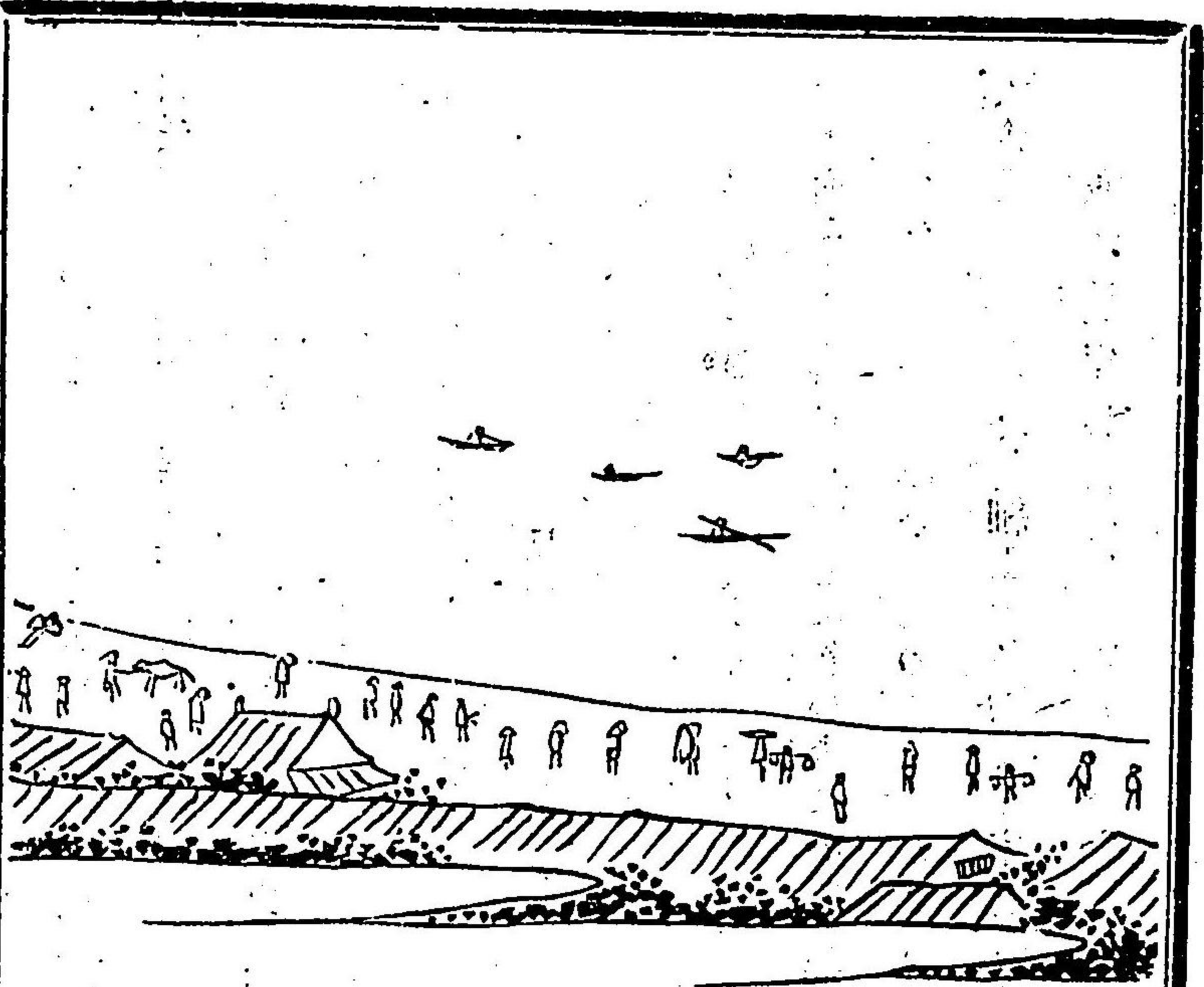


對の浴衣を吹あくる。神風や伊勢參宮  
 より足引の大和巡して。花の都も梅  
 の浪華へと。心ざして出行程に。早く  
 も高細の町も來か、り。川柳点の前句  
 集をおもひいだせば。

高細へ來てわめれたる

ことばかり

とよみたれ共我く。何一ツ心が、  
 りの事もなく獨身のささんじの鼠の  
 店貸出すもつらへと。身上のこらす。  
 風呂敷包とさしたるも心安し。去るが  
 ら旦那寺の佛餉袋を和らかに。つめた



れば外に百銅地腹を切て往來の切手  
 をもらい。大屋へ古借を濟したかわり  
 御關所の手形を請取。ふめる物の見  
 たを、やへさづけて。金よかへ。がら  
 くだ物の店請にまよはせて。禮を請。  
 積菜のおもしと炭か。庖丁の隣への  
 こし。ちぎれたれ共細をだれと油坪の  
 向へゆせりて。何一ツ取残したる物も  
 なく。まだも心が、りの酒屋と米屋の  
 拂させ。だしぬけよしたればさぞや  
 うらみん。さのどくながら。これも古

歌よ

この世よかりたをなすの今かとかいづれむくひの有とふもへを  
打笑ひつ、彌次郎兵衛狂詩を口ざさむ

雖非三亡命可奈何一借金不報塞尻過夫居本貫掛乞衆將是  
川向成三干戈

うち興じて程なく品川へつく彌次郎兵衛

海邊をばなど品川といふやらん  
と難じたる上の句に北八とりあへず

さればさきつものあるにまかせて  
いと面白く歩行どもなしに鈴が森にいたり彌次郎兵衛

おそろしやつみある人の首だまよつけたる名され鈴が森と

大森といへるの麥藁細工の名物よて家とよあさるう

飯に焚麥わら細工買たまへこれの子供をすかし屁のため

○ 向好

肉 柁者

頼 御膳

彌 次無

抜 目

それより六郷の渡しを越て萬年屋よて支度せんと腰をかける 万年やの女 おはようご

さいやす 彌次郎兵衛 二膳頼みまど きた八 コウ彌次さん見させへ今の女の尻の去年ま

での柳で居たけがもう白にあつたア。どうでも柁よこづかれると見へる。そしてめ

んよふさ。道中の茶屋で。床の間に。ひからびた花をいけて置の。あのけ物を

見ねへ何だ 彌次 アリヤア鯉の漣登りよ北 おらア鮓がそう麵を喰のかと思つた 彌次コ

ウむだをぬはせと。はやく喰はつし。汗がさめらア 北八 チャいつの間に持たた

トあらちやをわり切 彌次 もふおはちがれい落した 北八 又さだへいつて。うめへ物を

してやるふ 拂の男一人の六十位の親父一人の十四五のやつこいづれも宿の人足也

先拂 下アよくかぶり物を取ませふツ 北八 かけ落物の下座をしねへでもい、と見

へる 彌次 あせ北八 はて。かむり物を通りませうぞといふ 先拂 馬の口を取ませうぞ

北八 馬の口も。とりをづしができるのか。先拂 跡の人せいが高いぞ 彌次 いら

がとか。高いをづた愛宕の坂で九文龍とかたをあらべた男だ 北八 ちやれなさんる。と

んだめよあはふせ 彌次アレ見やれどれもい、奴だ。巻ばしよりでござせいに尻が並んで。何のどのねへ 葎町新道の土用干といふ物だ 北八 おや〜弓をかついてゐる。人の笠を見ねへ 頸と延引して居らア 彌次をしてあの羽織の長さの暖簾から。金玉がのぞいてゐる 北八 殿様のいゝ男だ。さぞ女中衆がこすり付るだらう 彌次 べらぶらうめ。色くお事よ。せばをやくのあなたがただ。とつてやたら。そんな事をしてつまる物の

北八 ナせそれだどつて。お道具を見ねへあの通りに立づめだ。いゝサアお駕が通たから行ふ。たつて行過る。馬方 親方戻り馬たが乗てくんなさ。彌次 安く乗べい。馬方 酒手で行ふ。二日乗てくんなさ。馬の直段もそうだができ彌次郎も北八もこ

んく馬ヒ 向よりくる馬方 へエちくしやうめ早い。こちらの馬方 くそを喰らへ。さきの馬方 うぬげつ出もしやぶれ。ト是がこのていの行違ひの挨拶だ。ひにあくた馬方 コレ伊賀よ昨日手ゆへと香てゐた。やろうのアリヤア上の宿の房州だ。な。この手

よ名といはそ皆國所の名と呼北八 先度の晩げにさ。アノ房州めが女房がな。己らぐを乗せた馬方大道よひより乍ら

○馬士  
社會言  
語寫出  
馬士矣

親方の背戸口は尿を。こいて居たと思へ。何がシヤア〜といふ音を聞とうらも氣か

見るくなつたもんだて。こいつなアかまう事アねへ。ぶつちめてやろふと思て。打喰

つたげんきて。いさなりよ。腕チねぢやアけて。そこへぶつたをしたとおもへ。そふす

ると女房めが。さをもつぶしやアがつてコリヤア。何をすると。ぬかしやアがつたか

ら。エ、あゝをするも犬のくそもいるもんかへ。ぶつてしめるのだ。ごまつてけつか

れと云ど。おにがアノ体たへだから。ひとへ力の有女よ。コノ野郎みやアと。己をつ、

こかしやアがつたんで。エ、どふしやアがると。よこ面ア一ツぶんなぐつて馬屋の壁

へおつたをして乗か、つたと思へ。まだこ、とをぬかしやアがるから己か親方の子

にやろふと思て餅よチ買て來がけたから其餅よチニツニツ女房めが口へねぢこんぶ

ら。むしやくと喰やアがるのら。其内にぶつちめ。そふとるも最つとくれろと。い

やのがつさんで。うらもそこらアさぐり廻して馬の糞たア。さらまに拾いつが口へ押

込んだら。胸よチわるかつて。はらア立やアがるまいか。うらもあんまり可愛そふだ

○温刺  
身亦<sup>も</sup>有<sup>り</sup>焉

八  
んてどふく焼杉の下駄ア一ッおつたをきたいな。ぬまくしん。此はなしふ二人の棒鼻へつく。夫より二人とも馬をおりてたどり。行程は神奈川の臺より來る爰ハ片側に茶店軒を並へ、何も座敷二階造欄干付の廊下棧橋もど渡して浪打ざわの景色いたつてよし。茶屋の女お休なさいやアせ。温たかな冷飯もございやアせ。煮たての肴のさめたのもございやアせ。その太いのをゆがりやアせ。うどんのおほきなのもございやアせ。お休なさいやアせ。二人のこゝにて一をい氣をつ。彌次 北八見さつし美しい太へもんだ。北八 ハアいか様い、娘だ時、何が有。さだ入をこらを見廻し肴をさしをふき、焼焼のわぢをわ。娘 これれいお待とを豫でございやした。彌次 おめへの焼た鱈なため、めてらし、盃もち出。娘 お休なさいやアせ。奥が廣ございぬやと。北八 奥が廣いはず。安房上總までつゝいてゐる。彌次 北八見さつし此肴のちとぶざつた目元だ。打かへ。彌次 ござつたど見ゆる目元のお肴は。さては娘が焼くさつたか。

九  
北八是を聞いておちこくことつけける。  
味をふよ見ゆる娘は油断とな。さやつが焼たる味の可るぞよ。  
彼是と興じて爰を立出色く道草を喰ふ驛路の氣さんとは高聲は咄ものしてたどり行程は此宿はづれより十二三才斗の伊勢参跡になり先よりなりて。伊勢参 旦那様壹文くれさい。彌次 やろふとも手めへどこだ。伊勢参 わしら奥州北八奥州のどこだ。伊勢参 笠よ書て有やと。彌次 奥州信夫郡幡山村長松。幡山かおいらも手めへたちの方に居たもんだ。幡山の與次郎兵衛殿の達者で居か。伊勢参 與次郎兵衛といふ人さアまり申さない。與太郎殿あらわしらか隣さア有申す。彌次 ヲ、その與太郎よ其又内に呑ん太郎といふ年寄のぢい様が有はづだ。イセ参 ぢい有申す。彌次 として與太郎殿の女房は儲女だつけ。イセ参 おかつ様ア女で御ざり申とよくしつて居めさる。彌次 今じやア何とぬふかしらねへが、おいらが居た時分は名主殿は熊野傳三郎といつてナ其女房が内にかつておいた馬と色事をして。よげたつけが。どふしたまらん。イセ参 それよさア。よく



○長松  
葉餅遂  
能<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>彌  
次<sub>一</sub>搗<sub>レ</sub>餅



奴の伊勢參  
もらへ。おんでもおの衆が國<sub>ノ</sub>の咄<sub>ヲ</sub>するとサ<sub>イ</sub>〜と<sub>ソ</sub>つてゐると直<sub>ニ</sub>買<sub>ッ</sub>てく

ま<sub>ツ</sub>て居<sub>ル</sub>めさる。庄屋殿<sub>ニ</sub>おつた  
まア。内の馬右工門<sub>ト</sub>いふ男<sub>ト</sub>つば  
しり申<sub>シ</sub>た北八<sub>ヲ</sub>妙々彌次<sub>コ</sub>リヤ小  
僧<sub>ヨ</sub>なせ跡<sub>ヘ</sub>さがる<sub>ク</sub>た<sub>ビ</sub>れた<sub>ガ</sub>  
伊勢參<sub>ヲ</sub>わし<sub>ノ</sub>ひだる<sub>ク</sub>て<sub>モ</sub>り申<sub>ス</sub>  
あ<sub>ハ</sub>彌次<sub>モ</sub>買<sub>ッ</sub>て<sub>ヤ</sub>ろ<sub>フ</sub>こ<sub>ヒ</sub>く  
五文餅<sub>五</sub>ツ六<sub>ツ</sub>買<sub>ッ</sub>て<sub>ヤ</sub>り<sub>ニ</sub>彌次<sub>モ</sub>ん  
なが<sub>ラ</sub>ん<sub>ノ</sub>よ<sub>ク</sub>づ<sub>ノ</sub>の<sub>リ</sub>  
と小僧<sub>能</sub>く知<sub>テ</sub>居<sub>ル</sub>だ<sub>ら</sub>う 伊勢參  
ア<sub>イ</sub>〜餅<sub>ヲ</sub>して<sub>ヤ</sub>る<sub>此</sub>内<sub>ツ</sub>れの  
髪跡<sub>カ</sub>ら 伊勢參<sub>これ</sub>も<sub>十</sub>四五<sub>の前</sub>  
呼<sub>カ</sub>ける サ<sub>イ</sub>〜長松<sub>ヤ</sub>イ<sub>〜</sub>  
伊勢參<sub>先</sub>へ<sub>行</sub>人<sub>ヲ</sub>買<sub>ッ</sub>て

んさるをチャアッレノイセ參  
買<sub>ッ</sub>て<sub>ク</sub>れ<sub>サ</sub>彌次<sub>手</sub>め<sub>ヘ</sub>の<sub>ど</sub>た<sub>付</sub>を見<sub>テ</sub>  
と與<sub>茂</sub>作<sub>ト</sub>い<sub>ふ</sub>親<sub>父</sub>か<sub>あ</sub>る<sub>ふ</sub> 伊勢參<sub>先</sub>餅<sub>ヲ</sub>買<sub>ッ</sub>て<sub>ク</sub>れ<sub>サ</sub>い<sub>ふ</sub>と<sub>ふ</sub>せ<sub>な</sub>い<sub>け</sub>り<sub>や</sub>ア<sub>。こ</sub>ん  
た<sub>の</sub>い<sub>ふ</sub>と<sub>が</sub>當<sub>リ</sub>や<sub>さ</sub>あ<sub>ハ</sub>彌次<sub>お</sub>さ<sub>や</sub>ア<sub>が</sub>れ<sub>ハ</sub>ハ<sub>ハ</sub>北八<sub>こ</sub>の<sub>つ</sub>の<sub>か</sub>つ<sub>が</sub>れ<sub>た</sub>。ハ  
〜ト打笑<sub>テ</sub>行<sub>程</sub>は<sub>早</sub>程<sub>ケ</sub>谷<sub>ノ</sub>驛<sub>ヨ</sub>つ<sub>く</sub>。兩<sub>側</sub>より<sub>旅</sub>雀<sub>ノ</sub>鉗<sub>鳥</sub>は<sub>出</sub>して<sub>置</sub>泊<sub>女</sub>の<sub>顔</sub>  
の。さ<sub>あ</sub>が<sub>ら</sub>面<sub>ヲ</sub>を<sub>り</sub>む<sub>り</sub>た<sub>る</sub>と<sub>と</sub>く。眞<sub>白</sub>は<sub>塗</sub>立<sub>。い</sub>づ<sub>れ</sub>も<sub>井</sub>の<sub>字</sub>か<sub>す</sub>り<sub>の</sub>紺<sub>の前</sub>垂<sub>を</sub>  
を<sub>み</sub>る<sub>の</sub>。儲<sub>こそ</sub>い<sub>ま</sub>し<sub>へ</sub>爰<sub>ハ</sub>帷<sub>子</sub>の<sub>宿</sub>と<sub>い</sub>ひ<sub>た</sub>る<sub>所</sub>な<sub>ん</sub>聞<sub>し</sub>。旅<sub>人</sub>を<sub>乗</sub>る<sub>馬</sub>士<sub>な</sub>ま<sub>け</sub>た<sub>る</sub>聲<sub>よ</sub>て  
馬<sub>方</sub>富士<sub>ノ</sub>人<sub>穴</sub>馬<sub>でも</sub>は<sub>い</sub>る。あ<sub>せ</sub>よ<sub>お</sub>方<sub>よ</sub>や<sub>穴</sub>が<sub>無</sub>ド<sub>ウ</sub>〜 泊<sub>女</sub>馬<sub>士</sub>と<sub>ん</sub>お<sub>泊</sub>か  
な 馬<sub>方</sub>イヤ<sub>旦</sub>那<sub>ハ</sub>武藏<sub>屋</sub>だ<sub>が</sub>。お<sub>前</sub>の<sub>顔</sub>を<sub>見</sub>ら<sub>ツ</sub>レ<sub>此</sub>ち<sub>く</sub>し<sub>や</sub>う<sub>め</sub>が<sub>泊</sub>た<sub>が</sub>ら<sub>ア</sub>  
ツレ〜馬<sub>ヒ</sub>イン〜 行<sub>過</sub>ると<sub>又</sub>あ<sub>と</sub>泊<sub>女</sub>申<sub>お</sub>泊<sub>か</sub>へ 引<sub>と</sub>ら<sub>へ</sub>旅<sub>人</sub>コ<sub>レ</sub>手<sub>ガ</sub>  
か<sub>も</sub>け<sub>ら</sub>ア 泊<sub>女</sub>手<sub>の</sub>も<sub>け</sub>て<sub>も</sub>よ<sub>ふ</sub>御<sub>ざ</sub>い<sub>舛</sub>お<sub>泊</sub>な<sub>さ</sub>い<sub>ませ</sub> 旅<sub>人</sub>馬<sub>鹿</sub>い<sub>へ</sub>手<sub>か</sub>なく<sub>ち</sub>  
や<sub>ア</sub>お<sub>飯</sub>ま<sub>が</sub>喰<sub>れ</sub>ね<sub>へ</sub> 泊<sub>女</sub>お<sub>飯</sub>の<sub>あ</sub>が<sub>ら</sub>れ<sub>ね</sub>へ<sub>ほう</sub>が<sub>お</sub>泊<sub>や</sub>ち<sub>や</sub>ア<sub>猶</sub>勝<sub>手</sub>さ 旅<sub>人</sub>エ

「ぬめろましいはなさぬかと」（やうくよふり切て行と）泊女（旅僧此女の）  
 旅僧 イヤもちつと先へ参ろふ（又あとからくるは旅僧） 泊女 お泊かへ（顔を）顔を見て  
 ア泊ますべし 泊女 お旅とは二百ツ、田舎 イヤくそらは出しやさない。そんたい湯  
 はぬるくてもよくござる。平のついで。替てくつた事ア御ざら無が。飯と汁はたつた  
 六七はいッ。も喰やアそれてよく御坐るは。そんたいよやア。明日の晝食は此柳より  
 よ一むらつめてもらへばもう外に何んも入らず無。旅とは百十六文ツ、出ーやさ  
 う 泊女 そんなら外へお泊るさいませへ 田舎 ハア泊ざア行ますべし。トゆる 彌次郎兵衛  
 北八此体を見て終始興に入又こしつける歌  
 お泊のよい程ヶ谷と泊め女。戸塚前てのはあさざりけり  
 と打笑ひ過行程は信濃坂といふ所にいたる是あん武州相州の境なりと聞ば  
 玉櫛げ二つにわかる國境。所かはれバ信濃坂なり  
 そでよばや日も西の山にはちらつきがれば。戸塚の驛よあん泊へしといそぎ行道

○北八  
 不<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>彌  
 次之子  
 分

すがら彌次 コレ北ヤ。待つせへ。咄があらア。何でも道中は飯盛をど、めてうるせへ  
 から。こ、よ一ッはのり事が有。あいらは親仁あり主やア廿代といふもんだから。親  
 子といつても。位だによつて。是から泊くでは何と親子の分よしうじやアね  
 へ。北八チ、これの妙だなる程それじやア。す、めねへていひそんなら親父さんど  
 いふのか 彌次 そうさ貴様の諸事を息子さとりが承知之助か 北八 よしくそらい  
 て亦い、たばでも有たら此息子を出ぬくめへ。彌次 エ、馬鹿アいはつし。チャも  
 う戸塚だ。笹屋よしうか 北八 親仁や 彌次 何んだ 北八 爰じやアねつからお泊させへ  
 といつて引ばらねへの 彌次 本よ其筈だ爰のとあたかお泊と見へて皆宿屋に札か張て  
 有北八 コウ向の内が風流たせ 彌次 コレ姉さん泊てくれる氣は無いか 旅屋女 イエ今晚  
 はお泊て合宿の成ませぬ 彌次 南無さんそうたるふ（ト段く宿をさがせども皆ふさ  
 つきあ）  
 泊めざるは宿を痴氣としられたり。大金玉の名ある戸塚よ

○北之  
不平可  
想

夫より宿はつれにいたるよ漸く旅人屋の合宿無きてに見ゆるめれば。やがて爰よりて彌次 何とわしらと泊てくんなせへ。てい主 お二人りかへ。お泊なされませ。當宿の宿屋の皆ふさぐりましたが私方むかり當りませぬ。彌次 こんなよきれいな内をなせめてねへの。てい主 我方は新宅てござり升。ソレお鍋お湯はどうだ。此内女たらいは座敷はこぶ。北八 コウ彌次さんじやアねへ新仁おめへ草鞋もいつしよよしておこふ。彌次 チ、そしてお色が脚半もぎつといすいておきや。北八 ナコ脚半を。いすげか顔を見ると彌次郎兵衛目つきでしらせるゆゑ。北八 姉さん茶を一宛くん。ト座敷口こ、とをいひちがら脚半を洗ひしまいて。彌次 女ばん茶を。直にお湯にお召ささいやせ。彌次 コウ女の面をみたか。真中が二ツ持て来り。へこんで何の事はねへ。踏けへしの馬蹄石といふ物だ。北八 そりやそうと彌次さん彌次ソレ女がきたり。北八 ナット新仁。湯へ這入ねへか。此内女盃を彌次 ヲ酒か江戸者と見と。どこでもころするふりあやまる。北八 ナせ酒を出しやア別。錢を取か。彌次 まれ。事。トいひちがら手拭を取湯へは入る。女 お一ツめしあがりませ。北八 是ハ

○聞只  
憑氣揚

御馳走だ。コウおわらが親父に早く揚らつせへ。いつてくん。女 ハイさようませふと。立て行此内彌次郎兵衛。彌次 ハ、ア何だ。コリヤア呑る。コレ手めへ早く湯入。てきや。北八 イヤ呑でからいろ。彌次 エ、てめへもいぢの。きたねへもんだ。這つてきやナ。此内北八湯。てい主 出て是の何も御座りませぬが。一ツ召あがりませ。彌次 イヤ御亭主さん。是でいめいわくだ。亭主 イエ時よかよう。御座り。私方は今迄外商賣を致して居ました。が。此度旅お屋よ成まして。すなはち今日が見世開で御座り。あなた方は始てのお客ゆへ。それで祝。一ツ差上。舛ので御座り。舛から別。御酒代をいた。くの。で。御座りませぬ。お心ろ置無召わのつて下さりませ。彌次 イヤ夫ハ先お目出たい。の。し御馳走よ成ては。近頃さのどくだ。亭主 ナコサ御遠慮あら。今にお吸物も出来。彌次 イヤもふおかまいなさるな。亭主 ハ、御ゆるりと。トい、さて立つて行。北八 ようどは。残らせわれ。て聞。親方。た、との有がてへ。彌次 コレまやれ。せともう。一べん湯へ這入てきや。其内に皆おれが呑でしま。ハ。北八 そうだろふと。おもつて。湯へいつて。モ。

あらうそれいねへ。チャ足はまだ土だらけだ。ま、よサア初めねへ 彌次もうとッくに  
 初てぬらアトレもう一ッ初直してから。さそう 北八 イヤあいらんこれぞ 〔ト茶碗に  
 きなしに。ぐう〕 北八 ア、い、酒だ時よ着いハ、ア 蒲鋒も白板だ。鯨じやアあんめへ  
 漬生姜も車海老。やはじやアねへ。コウ親仁此紫蘇の實がハつち味へナ。おめへは是  
 はつかり喰させへ 彌次馬鹿アいへそりやア跡へ残るよきまつた物た。もう吸物が出  
 そふな物だ 北八 まちなよ 〔トふまの時から〕 北八 出るく今よそつていらアチャ南  
 無さん神様へ上るのだ。イヤアくるぞ 〔トひさを直して居るとやが〕 女  
 を替ませふ 〔トもつて行二人りあがら〕 北八 チャ赤味噌だア。まやれるは。よもや玉味  
 噌じやアあんめへ。てうしはさどうだ 彌次世話しねへたつた今持て行たは 北八 もうさ  
 そふな物だ 〔此内女がてうしを持ってくと二人りながら成口ゆゑ相の押の〕 北八 コウ  
 姉さんちつと相としてくん女 更たくし一向喰ませぬ 北八 はてサコレさういはず  
 とそして。今夜おめへと一寸ナ。是が片めの盃だ。コウ親仁彌次 酔めのもう酔たさうさ

○北八  
在眼 中

北八 ナニ酔たも氣かつへエ。アノ親父の面はよハハハハハ 〔トまきまたにてしやれる  
 ら請た盃を干て彌次 北八 エ、親父のちくしやうめ思ひざしに預たな。コウ女中のちよ  
 次郎兵衛方ゑさす 頼み升 〔トしなたれかゝる女いあさ〕 彌次 コウ貴様ア悪男だ女の前であんな事をいふ  
 ち 北八 ナせいつちやアわりいか。わるかアいふめへ。おらアアノ太ゑもんめが。ねか  
 しな目つきをさるので。もう親子の縁か切度成た 〔ト此内よ膳も出て色々あれども餘  
 か親子の挨拶つよて旅まの 取上げねは今更一人寐の枕淋しく。打ふしけるが夜も  
 女真事とおもひ何をいつても 更行間々よ勝手もしつまり。山の神の小言いふ聲のみ聞へて此二人り。寐もやらせ。  
 若たる夜着のわか付かけて。千手観音の利生あらたよか。所へ。ふすまもる風の手  
 の届くも。うさく。ほろ酔の酒もさめて。今思ひ巡らせば。一人り寐よおはちの廻ら  
 ざるも。飯盛の杓子當りわるさ故にや。假の親子の遠慮有じい。かへつて鳥目の徳つ  
 きたりとおかしくて  
 一筋よ親子と思ふ女より。只ニタすぢの錢まうけせり

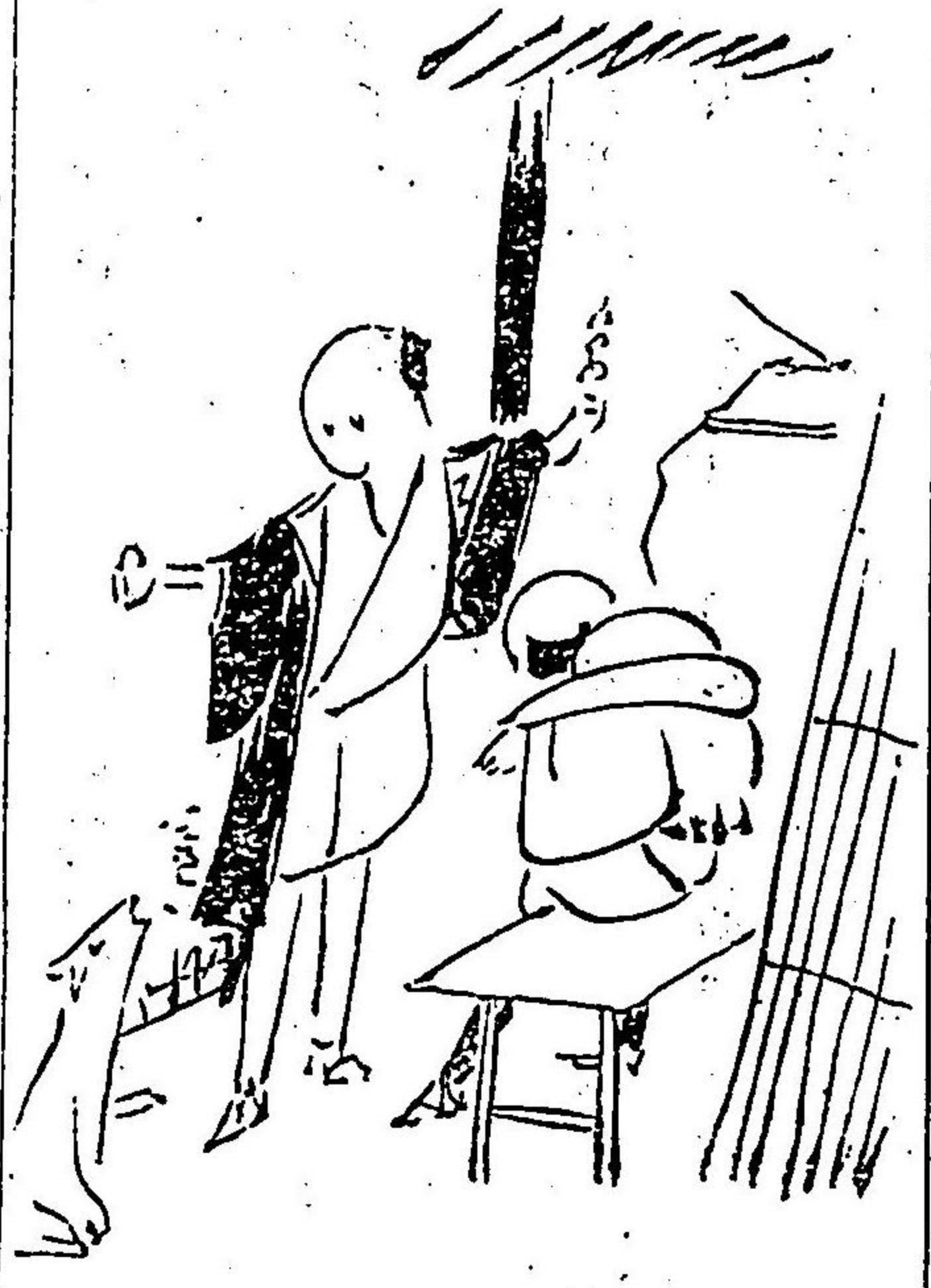
斯口すさみて。打笑ひつ、片向箱枕も。耳の根よいたくひ、く夜明の鐘早おもてよ  
 は助郷馬の嘶く聲ヒインく馬の屁 ブウくく  
 〔長持人〕人足 竹よさア雀ハアホア  
 〔足乃歌〕  
 んわへチイくどうもるく  
 〔此内彌次郎北八もあき出ればやがて膳も出て、よも  
 二八ハそこく支度してこ、を立出ると人足はあまりくたしけれの器を夫より  
 向よりつゞいて来るお大名長持引もさらせ〕  
 箱根さア八里ハイなア。わんわへあ  
 つくどうだかく 北八 彌次さん見ねへ重をうな物を能かつぐぜアノ尻を揮ざまア  
 彌次 わの手やいが尻を振まはすを見たらチトふさいで来た 北八 ちせく 彌次死んだ  
 女房が事を思ひ出して 北八 おきやアがれ。ハ、くく  
 〔此内向よりちよんがれ坊主  
 破れた扇子にて手をたき  
 なが〕坊主 ヒヤア御繁昌の旦那方一文やつて下しやいませ 彌次付なく坊主とこ  
 くくくよいとこな 北八 コレ付くなといふに銭のねへい 坊主 ナニ事か御座りや  
 しやう。道中なざるお方よ。あくて叶はぬ銭と金またも杖笠籠桐油。あんばさまつ  
 ぢ旦那でも。足一本では歩かれぬ。其上田町の反魂丹こりや幸手屋のしらみ紐。越中  
 ふんとしの掛かへも。なくていならぬ其替り古いやつ。手ぬくひよあつかひさざる

○山謂  
 大山

が御徳用彌次 エ、やのましいッレやろう。トはや道より壹坊主 コリヤ四文銭とは有  
 かだい 彌次 ヤア四文銭か南無さん坊。三文つりを貰せ 坊主 ハ、くく 彌次 いゆへ  
 ましい 〔此内早藤澤につきければまづぼう〕北八 ばアさん團子を。つめてへ。オ。チトあ  
 はあのあやしなある茶屋にやすと  
 つためてくんち 茶屋は、ドレ焼直して進せ升べい けー炭の火をかきさかして灰の立  
 入りはほこりとはたきく煙草吞るると六十位の桐油 親仁 をもかまはせおをき立る此内二  
 を着て風呂敷よつたる親仁此見せ先よ立どまりて 親仁 モシちつと物を問まそ  
 べい。江の島へはとふいさまで 彌次 おめへ江の島へ行なざるか。そんならこりよすま  
 つ直も行ってノオ。遊行様のお寺の前も橋が有から 北八 本は橋といやア儘其橋の向だ  
 つけ。いさな女房の有茶屋が有たつて 彌次 ヌレく 去年おらか山へ行た時泊た内だ。  
 アノ女房は江戸物よ 北八 どうりで氣がさいていらア 親仁 モシく其橋からどう行升  
 彌次 其橋の向も鳥居か有からそこを具すくに 北八 まがるど田圃へおッ落やそよ 彌次  
 エ、手めへだまつていろへ。ッノ道をきつと行と村はづれよ茶屋か貳軒有所が有 北  
 八 やんよ夫よ。よく腐つた物を喰はせる茶屋だ 彌次 ソリヤア手めへのいふのは右側

○親仁  
勤忍強  
於石地  
藏

だろふ。左側の内はい、はナ。去年おらから行た時。びちくそる鯛の焼物。夫に大平か  
海老のはね出るやつよ。玉子とくわると大椎茸よとして親仁 モシく私にそんな物  
は喰をどよう御座る。そこら又どう行升 彌次 そこをどつと行當ると石の地藏様が  
有やす 北八 アノ地藏様を瘡の願が聞そうだ。おらか方の。へた茄子があれで直つた 彌  
次 本よ瘡といやア新道の金箔屋の狸吉めい。草津へ行たけが。どうしたしらん 北八  
れば大福町よ所帯を持って居らア 彌次 大福町といふはどこだ 北八 大福町はいらか通  
りを真そぐに當座町へ出て判取町から店貸町を通過。地代屋敷の算盤橋を渡るとそ  
こが大福町だ 親仁 そんな事よりやア。江の島へ行道をおしへてくんさい 彌次 本よそ  
うだつけ其地藏様から大福町を真そぐよ行とノ 親仁 江の島へ行よもそんな名町か御座  
るか 彌次 イヤくこりやア江戸の町だつけ 親仁 エ、此乗よお江戸の事聞やさい。  
らつちもあゝ衆だドレ先へ行て開升べい。トふつここと北八 此内  
は團子を四五くし益彌次 あんつは黒い團子だ。トいひながら一トくし取上て見れば  
よのせてもち出つる



此ごろのひよりもさくや花の旅

彌次 サア行ら婆さんお世話。ト茶代を置爰を出て藤澤の宿へ。茶や女 お休あさい  
やアし酔ない酒も御座りやアすばりくそる強飯をわがりやアし 馬方 旦那生た馬の  
どうぞ。安くやりませう。馬は達者だ。はねる事、請合だ 籠 籠よしかの 旦那戻駕

○此籠  
必不進  
蓋戻籠



我くハ天窓を破りて歌よまん。刀作ある御影おがみて  
 春の日の長欠び。あごの掛金もはづる、斗り目を摺ながら 北八ア、退屈した。ナント  
 彌次さん道々なすを懸よふおめへ解か 彌次よかるう懸やれ 北八ア、外は白壁中へどん  
 くナアニ 彌次べら坊め。そんな古い事よりおれが掛ようか。コレ手めへとおれと連  
 達て行と掛て。サア何と、く 北八ソリヤアしれた事伊勢へ参どとく 彌次馬鹿め。これ  
 を馬二疋どとく 北八なぜ 彌次どうくだから 北八ハ、くくそんならおいふ二人  
 りが國所ナアニ 彌次 神田八丁堀家主與次郎兵衛店とどくか 北八エ、おぶしやれさん  
 な。これを豕が二疋犬子が十疋どとく 彌次其心の 北八豕二ぢがらきやん拾者 彌次お  
 さやアがれ。コレ今度のひびづかしやつやいはふ。其代り手めへ解ねへと酒を買せるが  
 い、か 北八解たらおめへ買か 彌次しれた事よ 北八こいつアおもしろい 彌次ちつと長  
 いせ。マアこうだ。おいらが二人が國所と掛て是を豕が二疋犬ある拾疋どとく其心は  
 ぶた二ぢがらきやんを者サアは何に 北八ハ、くそんなおぞが有物か 彌次べら棒

めありやアこそ。掛るは解て見ろへ 北八どうしてそれがしれる物か 彌次しれざア言  
 てさかせよふ。是と色男が自分の帯を取て女も帯ととらせると解 北八どうぎにむ  
 づかしい其心の 彌次ハテ解た上で又解せるから。なんと奇妙か。サアく酒を買く  
 北八まぢあよ。意趣げへしをやらがころ。おれがのも。ちつくり長い。マアかいつま  
 んだ所がこうだ。おいら二人りが國所と。掛て是を豕が二疋犬ころ拾疋と解其心の。  
 豕二ぢがらきやん拾者。是又色男が自分の帯を取て女にも帯をとらせると解其心を  
 解た上で解せるから。サア是ナアニ 彌次ハ、くくとはうもねへ長い謎たぞ 北八  
 とらだ彌次さんしれめへがノ。是を衣桁のふんどしと解やす 彌次其心のどうだ 北八  
 解てい掛くく二人ハ、くくく  
 〔打笑ひつ、おゆむどのなくいつの間にか  
 會我の中村に八幡八幡の宮を打をぎ酒匂  
 川にさしか  
 ありければ〕  
 我くハ二人り川越二人りみて。酒匂の川にしめてよつたり  
 〔此川を越行ば小田原の〕宿引 あまた方にお泊で御座り舛か 彌次貴様小田原かおいら  
 宿引早くも道よ待受て〕





飯を焚たら粥に成てしまうハ米を焚と云べい、彌次馬鹿アぬかせ。ハ、  
 「此内女煙草盆」北八 モシ姉さん湯が涌たら這入ませう彌次ソリヤ人の事を云。  
 うぬが何にすしらねへな。湯が涌たらわつくて這入される物の。夫も水が湯まわいた  
 ら這入やしやうとぬかしおれ 此又宿の女 お湯が涌ましお召なさいませ 彌次ナイ水  
 が涌たか。ドレ這入やせう 上方者と見へてその風呂桶は上方に流行五右衛門風呂  
 ど云風呂也左にゆらはと圖の如く土を持て釜をつき立其上へ餅屋のどら焼を焼く如  
 のうすべらなる鍋を掛て夫に水風呂桶と置廻りを湯のもらぬよふよふつくいをもつ  
 て塗のためたる風呂なり是ゆ湯を涌そよ焚木多分にいらす利方第一の水風呂也草  
 津大津あたりより皆此風呂也もて此風呂にハふたと云物なく底板上よ浮て居るゆ  
 るふたの代りも成て早く湯の涌く利方也湯よ入時ハ底を下へ沈めて這入彌次郎此  
 を踏込だ所が釜がじさよ有故大彌次 アツ、くこいつはとんだ水風呂、ト色  
 さに足を焼としてきもをつぶし 考これ  
 はどふして這入のだと聞も馬鹿くく外で洗ひおからそこらを見れば雪隠のそば  
 よ下駄が有故こいつ面黒いとかの下駄をはきて湯の中へ這入洗て居ると北八待かね  
 て湯殿とのそき見れ彌次 お半あみだの露ちり程も 北八 エ、あされらア。どうりで長  
 ばゆうらくと淨瑠璃 彌次 コレ鳥渡おれが手をいぢつて見てくれる  
 湯だと思たい、かげんよあがらねへか 彌次

○此レ是  
 謂ハ八釜  
 四釜之  
 問答



旅籠屋の湯風呂よりかぶ落葉哉  
 彌次馬鹿め水居風呂へ這入に別よ這入様が有物か先外で金玉と能洗てそして足から  
 先へとんぶりこ。すつあつこ 北八 エ、しやれんな。釜がじさよ有て是が這入れるも  
 のか 彌次這入れりやアこそ。手前の見た通り今迄おれが這入っていた 北八 お前へどう

北八 あせよ彌次もふ湯ぶつたかま  
 らん 北八 い、きせんな ト座敷へ  
 内彌次湯から上りかの下駄を彌  
 次サア這入らねへか 北八 ナットし  
 めた トそうくはたかよ成いち  
 つみ 北八 アツ、くく彌次さ  
 んくたいへんだ。鳥渡きてくん  
 な 彌次 そうくくい何だ 北八 コレ  
 お前へ此風呂へいどうして這入た

○畑永  
練陸難  
船

さて這入た彌次 ハテまづこい男だする風呂へ這入のよ。どうして這入たとは何れ事  
だ北八 ハテめんどうな彌次 ひづかしい事アねへ初の内ちつとあついのをまん棒する  
と後よのよくある 北八 馬鹿ア云なせへ眞棒まで居る内よア足が眞黒よこけてしま  
ハア 彌次 エ、埒の明ねへ男だ ト心の内いおかしさこらへられ座敷へ歸る北八色  
駄を見付てア、よめたと心よりなづきす北八 彌次さん、彌次 なんだ又呼か 北八  
ぐにその下駄をはきて水風呂の内へ這入 成程お前への云どうり入しめて見ると。あつくはねへ。ア、い、心持だ。おはれ成か  
な石童丸の。ツレレン、。此内彌次郎あたりと見ればかくして置たる下駄が無ゆゑ  
そがに尻があつく。立たりそはつたり色くしてあまり下駄までぐわたくと踏ら  
らしつひに釜の底を踏抜きさべつたりと尻餅をつきければ湯の皆流れてシウくく  
く北八 ヤアいたすけ船 彌次 どうしたくくく 宿の亭主此音よと  
参りきも亭主 どうなさいました 北八 イヤモウ命よ別條はねへが釜の底がぬけてア  
をつぶし 亭主 コレハ又どうまで底がぬけました 北八 ツイ下駄で。ぐわたくくやつ  
イタ、く 亭主 ト云に亭主ふしぎさうに北八の足 亭主 イヤアお前はとほうも無お人だ水風  
たのら に見れば下駄をばいて居るゆる

○首ッ丈ナ  
陥破釜  
北亦一  
個男色  
家

呂へ這入下駄をばいて這入と云事が有者で御坐升か。らつちもないこんだ 北八  
ヤわつちも初手ハ。はだして這入て見たが。あんまり。ぼついかからさ 亭主 イヤ早にが  
くしひこんど ト大き腹を立る北八もきのとくさこそくくとのらだをふいて色  
兩一へん遣しやう 言分ヶせる彌次郎氣の毒又思ひければ中へ這入釜の直し賃南  
くどわび事して  
水風呂の釜を抜たる科ゆへに。宿屋の亭主尻をよこした  
北八 いめへましい ト思ひ掛あく貳朱一ッ棒にふつて大きよふさぎ居る此内膳も出  
まり 彌次 コレ手めへなよもふさぎ事ア糸へ。大きに徳をしたハ 北八 あまが徳だ 彌次  
釜を抜て貳朱でい安ひよし町へ行て見やそんなこつちやアねへ 北八 エ、ぶしやれち  
んな人の心も知す 彌次 イヤ夫でもてめへがそんなちにして居るとおらア。氣の毒ち  
事が有 北八 何が 彌次 先の女が後に忍んでくるはづに。ぶつかつておいさから側で  
手めへが氣を悪して猪の事ふさくだらうと。夫かどうも氣の毒だ 北八 チャはんよか  
いつの間よ約束した 彌次 そんな事に。じよさいの有のじやねへ。さつき手めへが湯へ



又一首

ごま鹽しほの其そのららさま目めを見よとてや。おこわよ掛かけし女おんなうら飯  
彼かれ是これ興きようじてふしたりけるよ。早くも聞きこゆる遠寺はんとしの鐘かね一いつ睡すいの夢ゆめ覺さめて夜明よあけければ。や  
がておき出いそこく。支度したくして立出たちいけるよ。今日けふの名なあふ箱根はこね八里はちり早はやをろく。とつ  
ま上ありの右高道いしたかみちをたどり行程ゆくまじに風かぜまつり近ちかく成なりて彌次郎兵衛  
人ひとの足あしも踏ふどた、けど箱根山はこねやま。やん堅かたぢある石高いしたかのみち

彌次やじコレ。明松あきまつを買かねへりこ、の名物めいぶつだ。彌次やじべら棒ぼうめもう旭あきひの出いる時とき分明松あきまつのナ  
ニ入物いりものか北八きたやち。夜よが明あてもい、いあ。おめへ買かつてとばせハ云い夕ゆふアの代かりよ彌次やじ  
アかれ北八きたやち。又またこゝに湯本ゆもとの宿しゆくといふ兩側りやうがはの家作かさいく。さらびやかよして。い

づれの内うちも美目みめよき女おんな三三人さんざんツ、見みせ先まよ出いで名物めいぶつの挽物細工ひきものさいくと商あきなふ。北八きたやち一軒いっけん  
くよのぞき見て北八きたやち。サヤ。くあらい粉こなのかんばんを見るみようよ顔かほと手て先ま斗はり白しろい

女おんなが居ゐらア彌次やじ。何なにぞ買かふ娘むすめ。おみやげお召めしあさいませお遣入はしりあさいやんせ。彌次やじコウ姉ね  
さんそこよ有物あつものを見みせなせへ。ト云い娘むすめハ又外またがわの客きやくと合手あてよ成なりて商あきな婆ばハイ。是これて  
御ござり升のぼか。婆ばアではふしやう彌次やじ。夫おつとじやアねへコウ姉ねさんそつちうのと見みせねへ  
婆ばハイ。是これて御ござり升のぼか。彌次やじエ、夫おつとでもねへ。コウ姉ねさんおめへの手てに持もてゐる

何なにだ娘むすめ。ハイ。お煙草たばこ入いで御ご坐ざりやんす。彌次やじコレ。此事このことさ時ときよいくらだ娘むすめハイ  
三百さんひゃくで御ご坐ざりやんす。彌次やじ百ひゃくばかりよしおせへ。娘むすめお前まへさんわんまりな。あなた方なたのお  
影かげでかやうみ致いたてたり升のぼものを掛直かかけのヤやんせぬ。彌次郎やじらうをじろりと見みる彌次やじ。そん

なら二百にひゃくに。娘むすめもうちつとお召めしなさつて下くださいやせ。ヲホ。く。く。く。く。く。く。ト  
笑わらて彌次郎やじらうが顔かほを。彌次やじ。そんなら三百さんひゃく。娘むすめもうそつとで御ご坐ざりやんす。ナホ、く  
又またじろりと見みる。彌次やじ。ト豈本たがほんほふり。北八きたやち。サアいかふ娘むすめ。ようお出いささいやんした。北  
八きたやち。三百さんひゃくの物ものを四百よひゃくよ買かうとわたらしい。彌次やじ。夫おつとでもおしくねへ。アノ娘むすめハ  
よつほどおれよ氣きか有あたど見みへる。北八きたやち。おさやアがれハ、く。く。彌次やじ。夫おつとでも初手しよてか

らおれが顔かほはがり見みて居ゐたり。北八きたやち。見みて居ゐた筈はずだ。アノ娘むすめの眼めを見みたかや。敷敷よら眼めた

○目下  
書生連  
往々舞  
此二舞  
○鼻輿  
口之距  
離容易  
難測量

ハ、く、こ、い、い、が栗頭のこり子供こども四五人よんごにゐて、権現様ごんげんさまへ御代参ごだいさん壹文いちもんやつて下くださきチャ北八きたはちナニ御代参ごだいさんとの何なにだ、子供こども、こんた衆しゅうの代かりよ参まるの、北八きたはちナニおいらが代かりよ。いつれを見ても山家やまがそだち身代みかたりよとる面つらか有あるものかろくな首くびの一ツひとつもあひ。イヤ時ときにアノ鉦かねは何なんだ、彌次やじさいの河原かはらへきたぞく

辻堂つじどうのさそがにさいの瓦屋根かばらね。されども鬼おにの見みへぬ極樂ごくらく。お茶漬おちゃづけのさいの河原かはらの辻堂つじどうに。よえめたようお形かたちの坊ぼうさん。夫それより御關所ごせきしよを打過うちすぎて

春風はるかぜの手形てがたと明あけて君きみか代よの戸とぎ、ぬ關せきを越こる目出めたさ。斯祝かくしゆくして峠とがげの宿やどは悦よろこびの酒汲さけくみかはしぬ。

○第二編

長明ちやうめいが東海道記とうかいどうきに曰いはく松まつよ雅琴がせんの調子てうし有浪ありなみ鼓つづみの音ねありと息杖いきづえの竹笛たけふエを吹ふけ、助郷すけごうの馬太鼓うまたこを打うつ。膝栗毛ひざぐり二編にへんの序開じよひらき。ロヤリく〜てんつく〜とつてん〜。狂言詞かきごころ此様かさま

よい者ものの江戶えどの神田かんだの八丁堀邊はちぢんぼりへんに住居すまゐせし彌次郎兵衛やじらべゑ北八きたはちと申まをすおまけ者ものよてい。諸もろも我々われわれ伊勢いせへ七度熊野ななたびくまのへ三度愛宕さんだあいだこ様さまへ月参つぎまゐりの大願たいくわんを起おこし。ぶらりぶらりと出でのけ。ねつから急いそぎははとよ。ぬいやつと箱根はこねの驛えきよ着つてい。謠たぎ玉たまく〜け箱根はこねの山やまの九折くせき。げよや久方ひさかたの醴賣屋あまざけや。山やままよ魚うを乃各所多めいじよおほき山路やまぢかな。あまざけ賣親父めいおや。名物めいぶつあがらしやいませ。あま酒香さけのかままやいませ。北八きたはち彌次やじさんちつと休やすませう。チ一盃いちはいくんなトせう木きよ腰こしを掛かる。北八きたはちこいつは黒くろい〜。彌次やじ黒くろいようであまいは遠州濱松ゑんしゆはままつじや親父おや一盃いちはい汲くみて出す。北八きたはち黒くろいようであまいは遠州濱松ゑんしゆはままつじやアなへか。北八きたはちわりい〜コウおめへあせ香かまねへ。彌次やじおいらア。いやだ。ソノ茶碗ちやわんを見みや施主せしゆの氣きがさかねへよ。朝顔形あさがおがたにでもとればい〜よ。北八きたはちそうさ。是これじやア強飯こほめしの香かの物ものも奈良漬ならづけじやア有あるめへの親父おや。香かのものん御坐ござらねへか梅干うめほしよチ進しんせ升まべ〜皿ひらある梅干うめほし。北八きたはちチ一〜いくらだへサアお世話せわト錢ぜにを拂はひ出てゆく。向むかより來きる小こをを出です。馬士唄うまじうた。富士ふじの頭あたまがつんもへる。あじよよけひりがつんもえる。三島女しみまのむすめ郎衆らうしゅうに。がら、打込うちこみ。こがれおじやつたらつんもえたア。まよんがえドウ〜。こちらから行く。馬方うまかた互あひよ行いちか

○先生  
稱呼之  
下落已  
在當時

てヒヤア出羽宿の先生どうだ。向よりくる馬方べら棒めおれが先生ありア。うぬは  
つ、けぶア馬ヒオン〜  
【又向より来るいお大名のお國からお江戸入の女中立籠】  
ををつらせて四五人づれさわぎつれて来るを見て彌次郎チ  
ヤ〜るらい〜北八ほんよ是は皆生れた女だ奇妙〜。ナント彌次さん。つかね  
へこつたが白い手拭をかむると。顔の色が白く成てどんないさる男よ見へると云事  
だがほんとうかの彌次ッリヤア違なしさ北八よ〜  
【たもとからさらしの手拭  
を出してぐつとやうかぶり  
顔をのぞいて見て皆〜笑ひ通り過る】  
北八ナントどうだ今の女供がおいらが顔を  
見てうれ〜そうよ笑つて行た。どうでも色男のちがつたもんだ彌次笑つたはづさ  
手めへの手拭を見や木綿さる田の紐がさがつていらア彌次ヤア〜こりやア手拭じ  
やねへ越中ふんどぎで有た彌次手めへ。夕べ風呂へ這入時ふんどしを袂へ入て夫な  
りに。わすれたのねかしい太かたけさ手水をつかつて。顔も夫で拭ただらう。またね  
い男だ北八そうよ。どうりこそ。わるくさい手拭だと思つた彌次せんてへ。手めへが  
あだじけねいら。こんな恥をかくり北八なせ彌次木綿をしめるから手拭と取違へ

るの。コレおいらを見やれ。いつでも絹のふんどしだ北八夫ごとつて家根屋が長局の  
替替へよ行やア止めへし絹をきめる事すめへ。エ、ま、よ旅のばぢり。のさすてだ  
斯もあろうか  
手拭と思てかむるふんどし。儲こそ恥を晒すありけれ  
夫よりのぶと石をよめる彌次郎兵衛  
たがこ、よ脱捨お死し兎石掛る難所よ降参やして  
斯て山中と云へる建場よいたる。爰に兩側に茶屋軒を並べてお休なさいませアし。下り  
諸白もお坐りやアと。餅よマわがりやアと。いち膳飯よマわがりやアと。ね休なさい  
やアと〜彌次北八ちつと休ていかう  
【茶屋へ這入る此内の庭よつき立てたるへ  
きたるも有り澁紙を着たるも有り或は寐どぎ赤合羽などをきてよりこすり火〜おへ  
にあたり居ると表の方より竹のさせるとくわねて一人の雲助走つどはいり〜おへ  
ねへひゆるたくれどもだ。赤熊やとぶ八めが峠迄長持でやつたアあひどりの雲助  
いん其だのあの手か。あんどんよ。げんこい。ふんだくるべい】  
【此長持と云ひ六百の事  
あぬてと云ひ酒手の事

○景状  
穿得黄  
絹幼婦

「な」今一人コレよりやアゑいが。コノ野郎がおじやらくを見ろへ。まづかり紋付を着  
 がつた酒こもをきよ昨日小田原の甲州屋で。やらやつと一枚もらつて着たが。あんな  
 り裾が長くてお醫者様のようだとけつかる丸はぶか野郎めら工面かゑい柄好な物  
 を着やアかる。あらア此ぢう内からはだかてゐりやア。がら吉婆かぬかそふやア。古  
 傘をやるうから。ひつべがして着ると。げつかる。べら棒め。野郎の猪じやアぼんめへ  
 し。そんな物が着られるもんかど云たら。そんならこりよチ着ると言てゑいみしろを  
 一枚うつくれたと思へ。其みしろを。さんよようの晚げに。畑で湯よ終這入るとつて。  
 ひん腕でおゐたら。聞きやれ。だんじの着物を。がら、おまゝ喰れてしまつたア。いま  
 しましひ彌次郎北八此手やひの咄を聞てゐて。大きにきやうよ入頓てこ、を立出て  
 敷包と柳おりを肩よ引旅人十吉あなた方いどこで御坐り升彌次わつちらア。江戸さ  
 旅人十吉私も江戸で御座り升。あかゝ江戸いどの邊で御座り升。彌次 神田さ 旅人十吉 神  
 田よい私も居ましたが。どうかあなた方見やたようだ。神田いどこで御座り升彌次 神

○彌次  
自質見  
世淨瑠  
璃來

田の八丁堀で。わつちらが内えとち面屋彌次郎兵衛と云て間口が廿五間よ裏行が四  
 拾間。角屋敷の土藏造で大造な者よ。旅人十ハア其裏で御坐り升か。彌次とんだ事をい  
 ふ裏店の無さ。わつちらが所登軒で住居で居やす。旅人十ハアそんなら物地代で活券は  
 いく。彌次活券の千八百兩。旅人十ねめへ直で御坐りやすが口銭何朱でも。二ツ割  
 に致しやせう。彌次おめへ何をいふ。旅人十私に又地面の賣買の咄しかと存しまま。彌次  
 ナニそんな。こつちやアねへ。わつちらア。鳥渡出るよさへ。供の五人や十八のつれて  
 歩行やアす。夫じやア氣がつかつて面白くねへから。此男一人りつれて不自由である  
 くも物好だね。旅人十成程左様で御座りませう。イヤ又あまたのおふくる様なす。私よ  
 く存じてあり升が。先日や淺草の門跡様の前でお目に掛りました時何か包を。提てつ  
 えよそがつて御座る様と。大きにお年が寄りました。彌次ハア夫の太か寺參よでも行  
 れた時で御座りませう。お目へ御存じと有れば定めて何と詞を掛られたで御坐り  
 やせう。旅人十私を見るとじきに駈て御坐つて。何をかつしやるかと存ましたれ。壹文



やつて下しやいませと 北八 ヲハ、くくくく 彌次 イヤおめへおいちを。おつ  
よはぐらかす 北八 ねも白へくく 何とおめへこよひ。わつちらといつしよに泊りなど  
うぐ 旅十 よう御坐りやせう 夫より道すがら互ひよしやをほひ國澤と云るよいた  
あり彌次郎兵衛はる かのこれ伏し拜み 茲は法花寺といへる寺は足利武將の建立有し七面堂

足利の武將の建し名にめでて。七面堂と云べかりけり

斯て三人咄づれて市の山にいたる 此、よいがぐり頭の子供三人大なるそつば  
ウ彌次さんい、物がある。ア、泥龜を買取て晩に宿屋で。やらかしらどうだ 彌次よか  
ろうナント子僧其泥龜を賣らねへか 子供 こんた衆いるなら。ぶちくれへい。そんたい  
錢よよくれさるか 北八 やろう共ソリヤ大きな錢をやる 四文錢廿四文斗扱て  
らをしろぬ。かの泥龜を 北八 奇妙く 旅十 こいつは面白時に入らしやた。ち  
わらづとよ入れて引さけ 既其日も黄昏又近き入相の鐘幽響く鳥も寐ぐらに歸り  
と急やせう 人たどる 掛の駄賃馬追立て泊を急ぐ馬十頃のきまけたる。はてつ腹の淋く成たる故よやあ

○ 日來  
而急  
幾處彌  
次等如  
蝙蝠

らん 此時やうやく三島の宿をつく お泊なさいませ 彌次 エ、引張な此をはま  
たら泊ベエ 女 そんならサアれ泊 彌次 あかそかベイ引 トにけるはづみよ あんま  
タ、くく 眼こつぶれがべら坊め。あんまけんびさい引 焼酎賣の聲 焼酎に入ませ  
ぬか目のまはる焼酎を買しやいませ 北八 ぬか目かげんに。こ、へ泊らうの 籠や女 サア  
お這入あさいませ。ねさんどんお泊りだよ 宿屋の亭主 コレハお早よう御坐い升。お連  
様はおいくたり 彌次 影ぼしとでも六人亭主 へイ夫の。ヤレちやア三太郎いぬか。お  
湯を取てこい。お茶の煮へて有か。ツレ先風呂を一ツ上る。お飯も溜た。直にね這入な  
さいませ 此内三人共足を洗 宿女 お湯よお召ささいませ 彌次 ドレお先へ参ろう  
はだかに成 宿女 モシそこい。のうかで御坐い升。こつちらへ 彌次 ホイこれはト湯殿  
てかけ出せ 十吉 時よかのわら苞へ 北八 床の間よ置やし。のちに寐酒よ拵て貰いやせう 此内  
郎湯よりあがると次お十吉湯よ入よ此宿の亭主問屋の下役をつれ 亭主 御免下さい  
帳面と矢立をもちいづる是は宿帳とて旅人の國所をしるす事也 北八 泉州界名の 天川屋義平  
ませ。ハアお一人のお風呂か。宿帳を附升なた方お國は

○被遊  
意被愚  
弄

と云や亭主へいあきたり彌次私かへ城州山崎村與市兵衛とややす亭主さてい與市兵衛様といあきたか。うけたまはりおよんだ。あなたの狸様勘平様いどうあされまし  
た彌次勘平の三十は成やあらに死にやした亭主ハア夫はお力らおとしおかる様  
彌次すい分達者でなませ亭主として狸の角兵衛様や。めつばら彌八様の儲かあきた  
のお近所で有た彌次さやう〜亭主アノ又猪をどこに居られ升彌次ハア猪いどこ  
の亭主てんつる〜てんつるてんり。どう致しました皆々々ハ、〜  
亭主イヤまづ御膳を上ましやう彌次いま〜しい。けつくあつちあををれた此内  
女膳を持きたサアお上りなさいませ。コレちやア。おたつ殿よう。そこの飯櫃ウもつ  
りならべ置てサアお上りなさいませ。コレちやア。おたつ殿よう。そこの飯櫃ウもつ  
てきなさる北八時よ。こ、よやアまる物のなしかの宿女此間木曾海道追分から来た  
女郎衆が二人り御坐い升。お淋しかア。お呼あさいませ彌次こいつ面白かるう器量の  
宿女がいよゑいと云でも御坐りませい。マア十人前で御坐いませ北八ハ、〜  
〜十人前の飯盛が面黒い呼でくんる宿女そんなら只今ト云とて、立ていく此内  
十吉湯殿よりあがりきて

○彌次  
北得意  
可レ想

旅十おめへ方ア何かやばからぬお咄しだね彌次王やアどうだ旅十イヤ私しはアノ内  
の女に少し咄合が有やと此内宿女是は御如才で御坐い升。サアお買なさいませ。モ  
シ今のが参りました。コレお前ちやアこへ来ささう。ドレむかひも行にト女  
てゆくすべて此あたりより駿河遠州掛川あたり迄は行と云とをゆかきといひ喰ふ  
と云とをくはせと云ふ頓てかの女ふと間の影よのゑゐて立てゑるをひつはり出る  
やど女サア〜きなさる〜飯盛お竹アレサアふとつてい升と。がいにきよびきな  
さんな今一人の飯盛おつめどうせハア。出べいとこさア。出よやアあらない。サアお  
竹さんつん出なさるトやう〜二人乍ら出掛て来る一人は紺の木綿と紐うたばみ  
いどの入たるたて編の布子よ是も帯は太織のあいびろうとべよ木綿のふ北八サア  
んどしちら〜と出しかけ黒さらはのさせるを手よ持て座敷へとわる  
〜爰へさあせい時よ女中膳ひいて酒よしやせう宿女ハイ今又出し升ト膳を引  
丁子盃肴を宿女サア一ツ上りませ彌次トレ〜ト一口呑で下置とお竹コリヤ  
もちい出てハアかしよか〜トのむまねをして北八へおつめあたつ殿ハアありよげへだもし北  
八一ツ呑なせへつめわしらアはア。がいよ呑ましねへ。ヤレさて此衆のがいよ。おつ





泥龜すつばんは喰くわはられたるくるしさまよ。こちや石龜いしかめのじたんだをふむ

最早もはや其夜そのよもわけゆけば寺てらの鐘かねも勤行ごんぎょうの聲こゑ。もう共とも小響渡ひびきわたり。求食鳥もくじくの軒のき近く啼渡なみわたる  
よ皆みなく眼めさめて。おき出いれば勝手かつてより膳ぜんも出いて。夫それく支度しだくする肉にく宿女しゆくにょね一人ひとり

いどこへいきなされた 北八きたはち むんに十公じゅうこうはどうした 彌次やじ 大かた雪隠せつおんだらう先まへやらか

せトかまのせめしを喰く初め十吉じゅうきちははやみの間まよかららみちよりよけて行きコウ  
たればいくらまつてもくるはづはあ彌次やじ郎らうあたりを見廻みまわしふしぎそらよ

北八きたはち。アノ十吉じゅうきちとやらア何なんぞろふ 北八きたはち されを彌次やじ ハテがつてんのいかぬ。アノ野郎やろう  
が風呂敷ふろしき包かも笠かさもねへ。大かさいいらが寐ねて居ゐる内立うちたてしまつたと見みへる 北八きたはち セア

そんなら何なんぞ無ななりやアしねへかトそこら見みまひし何なんも別條べつじょうのねへか 彌次やじ イヤく別條べつじょうが  
有ありやうだトふところからどうまを振ふて見みる紙かみにト彌次やじ ヤイく

北八きたはち どうした 彌次やじ どうしたところか金が石いしも成なつてしまつた。エイく 北八きたはち こいつは  
大變たいへんく 彌次やじ くやしひ今の野郎やろうめにとり替かへられた。コレ女中にょちゆう御亭主ごていしゅを呼よんでくんな。

早くトむしやうよのほせかへるよ女にょはとふく立たて行いと今受玉いまうたまをりました借か

此こゝやうすを聞きて宿しゆくの亭主ていしゅ寐ねまのま、かけきたり

○孔子

曰有レ樂

必ズ有レ悲

余於ニ彌

次亦モ謂フ

焉

くどんご事ことで御坐ごまり升のぼ 彌次やじ イヤ貴様きさま御亭主ごていしゅだの。コレとまねへぞく。あんあごま

のはいに宿しゆくをかすからにやア。こなたもうはまへを取とらるう。あせおいらよさたなし

よ。先まへた、せた 亭主ていしゅ コレハけしからぬお連様つれさまと存ぞんて泊とどたので御座ごまい升のぼ。今朝けさた、

しやたもさつぱりまらせぬ。大方裏道おほまじちみちからでも 彌次やじ 裏道うらみちからでもすすまじい。そん

なで行いのじやアねへり。あんでも。アノごまの灰はいを出だせく。コレ野郎やろうを見みそくあ

つたか。お江戸えどでも神田かんだの八丁堀はちぢょうぼりでとち面めんやの彌次郎兵衛様やじらうべゑさまと云いちやア。おそらく。

れれが近付ちかづの人に誰たれぞらぬ者もののねへり。悪わるくふざさやアがるど。家臺骨かたいぼねよを叩たたき

あはして。合羽干場かっぱのぼしばの地請ぢまひに立たつ。足元あしもとのわかるい内うち。サアごまの灰はいめを爰こゝへ出だせ

サアくだせく 亭主ていしゅ 是こゝは御難題ごなんだい。さりとていお氣きの毒どくな 彌次やじ ナニお氣きの毒どくの

人丸様ひとまるさまだ。イヤ四斗樽しとど様があされらア。サア四斗樽しとどめをこへ出だせ 亭主ていしゅ ナニお氣きの毒どくの

とは彌次やじ イヤナニ。四斗樽しとどをがつてんで泊とどるからよやア。貴様きさまも一ツ穴ひとつあなの狐きつねだ 亭主ていしゅ

是こゝは無休むしゅうさ。ナニおしらが四斗樽しとどを泊とどませう 彌次やじ 泊とどねへ事ことが有ある者ものか夕ゆふべから。今いまの先ま

造て、の内よ寝て居たり 亭主アノ四斗樽ガかへ彌次ナ、サ。四斗樽。イヤくごまの  
 灰づく 北八 コレ彌次さん。マアまづかよえねへ。かはへそらに御亭主のまつた事  
 やアねへ。道連よまてきたのは。こつちがむりい。どうもまかたがねへとあきらめな  
 せへ 亭主 左様く是が私どもが内へ御座つての相宿ならん。おつまやるも尤もだが  
 何を云もいつしよ御座つた者を。やさばお前立の御鹿相と云者だ 北八 違いなーさ。  
 コレ彌次さんおめへりきんでも初まらねへ。どうもしやうとがねへのサ 見れば彌次  
 郎も成ほどと思たところがつまらぬ。ふ 北八 彌次さんマア飯でも喰ねへ 彌次 飲も  
 さきつてだんまりで居るしまいつかねば 北八 彌次さんマア飯でも喰ねへ 彌次 飲も  
 喰ぬ。ナント北八。かうだ府中迄いけば。ちつたアさんだんぞる。あても有のら先壹文  
 なしで出かけよう トつかい残の錢をみつめてやうくとこ、のはたごを拂ひあど  
 かけ道々も心がけてごまの灰の行をたづぬれ共一向まれ  
 ぞ。まやれもむだもごころやうた、うかくとたどりながら  
 まとはざの枯木に花の咲もせで。目をこそらすごまの灰かな  
 北八 彌次さんそんなちよ力を落しなさんる高がこうだ

うき沈みある世の次第不動尊。いのれるかいもあき護摩の灰  
 彌次 北ヤおらアも坊主よでも成たい 北八 おめへとんだ事を云 彌次 いつぞ江戸へ歸  
 へるうの 北八 ナニサ歸るとが有もんだ。 槍  
 杓をよつてもお伊勢様迄行てこよア。外  
 分がむりい 彌次 夫でも。モウひだるくつて  
 歩行かれねへ 北八 ハテ待あさぬ。こ、ま江  
 戸から。とづのつてきふ十二銅が有から先  
 へ行たら餅でも買って喰あせへ トムひつ、  
 つゑますのりうつらくとゆ 二人ながら  
 く向より状箱をかつき人足 エイさつさ  
 くく 北八 何だ。野郎の韋駄天様を見る  
 ようよ。ひやみとのけてきやアがる 彌次  
 だから定めてお飯もぶんだんよ喰たろう 北八 エ、おめへも乞食じみた事を云ものだ



○遭此  
目而後  
有記此  
事不然  
豈得寫  
此愚狀  
乎感讀  
百回

御狀箱 人足 エイさつさ、北八ッレあぶねへ。こつちへ因き人足 エイさつさ、ト通  
そがひに御狀箱の角で彌次郎が彌次 アイタ、人足のいさ、エイこりやア。さつ  
小びん先へかつたりとあたる、  
さく彌次 ア、くいたい、何の因果で。こんな目よあふか。あらア死に度成た北  
八、馬鹿ア云させへッレ馬がきたア 彌次 馬士どん先の宿迄い。まだよつほど有か  
の馬士 ナニヒつきに。そこだア 彌次 いくら程有へ馬士 たつた三里廿四五丁も有だん  
べい 彌次 ハッア、と段々たどり行程は頓て釜が淵と云る所よいたりてり、る中よも  
名を聞てはまや小金の釜が淵。口よ孝行またき故に  
此所にて餅などと、のへ。少しの腹乃虫をやしさい。たがひに力を付合咄まものして  
漸 沼津の驛よつく。こ、よて先足を休めんと宿はつれの茶屋へ這入茶屋女 お早う御  
座い升チャ。お支度でもまなさいませぬか 北八 イヤ跡の建場でうんといふほど喰て  
来やした ト此内兩掛を人足よかつがせ供を連たる侍お國ふう大たぶさ。木茶や女  
お茶上りませ侍 もう何時だの茶や女 ハイハッでも御ざりやまよ侍 よい酒があらばち

くと出しあさる茶や女 ハイ、三十二文の上ませうかやア侍 今すこし下直なのは  
なんぼじや茶や女 廿四文のも御座い舛侍 まからい。ッノ廿四文の酒と三十二文の酒  
と等分よ割て壹合五夕斗だまあさる茶や女 ハイ、ト勝手よりちろり盃を持来た  
侍 コリヤ、此煮付よつた。肴どもの價のあんばまや茶や女 卅貳文で御座い舛侍  
ちらは茶や女 十二文侍 ム、よい、コリヤ傳助。わびりよも一ツ香やれ 供傳助 子イ  
侍 コリヤ向ふに火を焚よるおな子共の奥田氏の内室よよく似よつ、供傳 いか様こち  
らの今笑ひよるおな子あども。よいよふで御座舛侍 どれか、ウ、アノ柱らのねき  
に。横たわつてあるおな子がよい。サア傳助今すこしある香でしまへ 供傳 子イ、  
く 勘定の致そう何ぼじや。コリヤ、此魚ども手つけ無ぞ茶屋女 ハイ、  
四十貳文で御座い舛チャ侍 ム、よい、ト供の者よ拂わせ、を出かける北八サ  
ア行ふ 彌次 アイお世話茶や女 どなたもようわいて 侍と跡よあり先よ成て色々咄  
り千本の松原よて北八がこじ付るうた

この景色見ては休よやならの坂。いざ煙草よや千本の松

〔侍此歌を聞てかん心し〕ヒヤアでけたく。お身立の江戸者だ。左様で御座り侍。私とも  
 の夜前の泊でござの灰に取つかれて。大きき難儀を致し侍。ハア夫の近頃氣の毒じ  
 や。成程ござの灰のさしたの。はたかるふ。北八 イヤござの灰とやは。とろ坊のこと  
 で御坐り侍。とろ棒と何じや。北八 ハイ泥坊と申の盗賊の事で御座り侍。ハ、ハ、ア。  
 何か人の物と取よる盗賊の事を泥坊と云か。彌次左様で御坐り侍。ソノ又泥坊をござ  
 の灰と云じやナ。成程解せたく。北八 時に旦那へちとお願が御坐り侍。私ども右の  
 泥坊と相まして。さつぱり路用の取られて。ままいましたから大きき難儀を致し侍。  
 府中迄參れば。いか様共致し升か。夫迄の所よこまり升。底で材の身の差合せとやら。  
 どうぞ是を賣とう御座り升が。お買ささつて下さりませぬか。〔ト腰ふさげたるいん  
 出し見侍〕ホウ夫の氣の毒途中で物と取るの如何敷がお身たちの難儀とあれば。求て  
 つかひそふ。あさいな何んはじや。北八 ハイ。三百位と差上ケませう。侍。夫の高直じや。北

○可憐  
彌次、洒  
落、不、出

八 ところまのおまけやませう侍。然らばその巾着共のあたひな。カフト六十文の遣はそ  
 ふか。北八 夫のあんまり侍。六十一文の遣はそか。北八 もちつとお買ささつて下さりませ  
 侍。まからは六十二文の遣はそか。北八 イエどうも侍。左あらは清水チウ舞臺どもからと  
 んだと思ふて六十三文の遣はそか。北八 イヤもうそんなや壹文ツ、お買なさつての御  
 相談が出来ませぬ。こう致ませう丁度よれ買なさつて下さりませ侍。ヤア丁度どの何  
 ぼじや。北八 ハイ丁度とヤハ百よつばまりませた事を丁度とヤ升から。百文なら差上  
 ませう侍。ム、百の事を丁度といふか然は丁度にもとめて遣はそふ。北八 夫は有難御ざ  
 り升。〔ト巾着を渡し百文とり〕モシ是の安い物で御ざり升。捨賣にしても根付くるみで。四五  
 百が物の御ざり升侍。イヤ身共悴共が兩人罷有が是の物領への。よいみやげじやて。北八  
 へいあなたにまたお若うお見えへあさい升よお子達がお二人りどの。よいお樂みで御  
 ざり升無様ながら。もうおいくつで御坐り升侍。あて、ね見やれ。北八 ハイあさのハコ  
 ウト三十七八もお成なされますか。侍。身共當年己の年で四十二才よまかりなる。北八



夫これのち若わかう御座り升侍こしやうコレハ御挨拶ごあいさつえかし身共相役あひやくの園原作そのはらまき之衛門。米木津甚太夫よねきつじんあど。皆同年みなしうねんで罷まかりあるが。其内そのうちで身共みどもがいつち若わかへくとい、おるで北八きたはちさやうで御座りせせう侍こしやう夫これ又家中内かちううちの若わかへおき子どもなぞが。身共みどもが事を澤村宗十郎さわむらねしじう似にて居ゐるとやそ北八きたはちハ、ア成程なるほど侍こしやう時ときよお手前てまへのいくつじや北八きたはち旦那だんなあめてなさつて御座らうじませ侍こしやうムウお手前てまへ前年ぜんねんなコウト廿七八にじゅうしちはちも成なりおるの北八きたはちイエ丁度ていどで御座り升侍こしやうニ丁度ていどアノ百ひやくか北八きたはちイヤ

是これで御座り升侍こしやうハア三百ひゃくふの若わかへ男おとこだ皆みな々々アハ、

未まだだ飯めしも喰くを沼津ぬまづと打うちすぎて。ひもじき原はらの宿しゆくよつきたり

北八きたはちエ、お目めへ又またそんな。まみつたれを云いひ今いまの錢せんで蕎麥そばでも喰くふべし彌次やじソリヤアよかるふく

ト蕎麥そばや北八きたはちチイ二膳にぜん頼たの升まうそばやハイく

ト頼たのて蕎麥そば彌次やじ太たい蕎麥そばだ喰くでが有あつてい、ハへ北八きたはちもう一いちばい替かえようか北八きたはちイヤくそう一度いちどきよ錢せんを使つかていさらぬ又また先まへへ行いつて何なんぞやらかまやせう。そば湯そばゆでもおもいれ呑のみなせへ彌次やじを

んから若者湯わかものゆを一いちツくんる蕎麥そばやハイく彌次やじア、うめへく北八きたはち呑のみねへかチイ

くもう一いち盃はいくんるチットくアツくく口くちと焼やけといた。あんまりあつた。どう

ず蕎麥そばをちつと。うめてもらいてへもんだ北八きたはちコレく若衆わかしゆだ々々氣きの毒どくぶが薬くすりを呑のみ

からもう一いちツ湯ゆをくんる蕎麥そばやハイく北八きたはちコレたつぶりだよチット由よしえかし私わたし

か呑薬のみくすりはしたじの這入はいつた湯ゆであけれい。さかねへから逆さかもの事ことよ若衆わかしゆだしたじをきこ

し差さてくんる。チットよし

ト鮒ぶの水香みづかよふよ

サア行いふ彌次やじでへふ心こころか慥たしかに成なる

今いまくひし蕎麥そばハ富士ふじぼと山盛やまもりよ。そこし心こころも浮島うきしまダ原はら

夫これより新田しんでんと云いふ建場たてばにいたる。爰こゝはうあぎの名物なひぶつよて家いえとよわをきたてるかば焼やき

の匂におひよ二人ふたりの鼻はなの先さきをひこつかいて

蒲焼かばやきの匂におひを嗅かぐもうとまじや。こちら二人ふたりはうんなきの旅

頼たのて元吉原もとよしはらを打うちすぎ柏橋かしははしとふ所ところにいふる。此所こゝより富士ふじの山正面やまのしやうめんに見みえて裾すそ

野第一のたらいちの絶景ぜつげいなり。彌次郎取やじらとりあへず

○彌次  
貧病全  
快醫者  
應退手

○反り討

餅の名の柏橋とて旅人の足をさすりて休やそらん  
 斯て吉原の驛よつく。棒心なの茶屋女共。いづれも黄色なる聲くよお休なさいやア  
 せ。酒とあかりやアし。米の飯をわがりやア志。こんよやくと葱のれ吸物もおざりや  
 アそれ休なさいやアし。籠かきかな馬方。テイ旦那衆おまアとふだ。戻りだから  
 安い。彌次今迄乗詰り乗てきたからちつと。是からひろいやせう。ころびやせうがさい  
 てあされらア。夫より此宿をづれよやふれわみ笠をウタイ。んざく酒を香をよ借お  
 肴は何々ぞ頃しも秋の山くさ桔梗かるかや。それもかうしおんと云の何やらん道中  
 よわづらぬまして難儀を致し升。何とぞ路錢の御合力を願升。北八イヤモウわつちら  
 ア。夕べごまの灰も路用をとられて壹文なした。どうぞもらい溜があらばこつちへ御  
 合力願升。浪人そんならコレつくなく。ト早々よ行過る二人もかかしさ打笑ひつ  
 音様のかけじを掛麻のやぶれ衣を着たる坊様の寐り。観音經。妙法蓮華經。普門品。第始  
 をして居り。が旅人を見るときよわのよりんを打鳴。終忽多聞。世間子息。大分遊興。每晚三味線。音曲。滅多無正。夜前大食翌日。頭痛八百。羅



利古灰笑止千萬近邊醫者早速御見舞調  
 合煎藥香多良久多良腹張多心經チイン  
 鼻の下。空殿の建立お心さしをお  
 頼んや舛。北八お經がおも白へから寄進  
 よ付やせう。坊主ハイ夫ハ御苦勞お名を  
 記しませう。彌次そんなら彌次郎兵衛と  
 付あさい。坊主ハイ俗名彌次郎兵衛。彌次  
 エ、まだ死よやアしねへハナ。坊主ハイ  
 まだ死おまやらんのかあ。イヤ是へハ  
 お心ざしの戒名を記し升。北八。チイそん  
 ならそけへ書てくん。釋の急難取つ  
 めた佛果菩提の爲ソリヤ壹文トあけ出  
 していき

○ 謀反  
露見財  
符城腹  
降  
○ 北食

過る松原の中程は十四五の前髪土手と崩してやく  
わん掛菓子など並べて遊ぶ片手に旅人を呼たつる  
彌次さん菓子でも喰ねへか 彌次 ナト休まう  
彌次 土手のうそべりの上へ腰を掛 北八  
僧此菓子はいくらづ、だ 子僧 アイ貳文ツ、彌次  
五ッ喰たからいくらだ 子僧 わしにい  
くらだかしりましない 北八 そんなら。こうと五ッで貳五の三文か。コレこ、よおくぞ  
彌次 ヒヤアこいつの安い物だもう一ッ喰はふ。コリヤアいくらだ 子僧 ソリヤア三文  
北八 ドレ〜むめへ〜小僧先の錢のすんだぞ。跡の菓子々四ッ喰たから三四の七  
文五分かエイの五分のまけろ〜 彌次 イヤ餅も有る 北八 どれこいつの味へ此餅にい  
くらだな 子僧 ソリヤア五文とよ 北八 五文ツ、ならこうと二人りで六ッ喰たから五  
六十五文ツレ遣るぞ 小僧 イヤ此衆のモウ塵劫記じやア賣ましかい五文ツ、六ッくれ  
あさる 北八 ヤア〜〜錢が有かしらん 子僧 こ、へ出るさる一ッ二ッ三ッ四ッ  
文ツ、一ッ〜〜かろて。め 彌次 こいつの大爆笑だ 北八 とんだ目にあつた サア  
のあさんやうよひつたくられて 行ふ 五軒も行過 北八 アノ小僧の如才のねへ奴だ。アノ餅が。ナニ五文取る物か二文

餅子僧  
不食其  
手

か三文の餅だるふよ。高く賣てしよてのそんをうめやアがつた 彌次 いま〜しい今  
喰た餅が。のどよつまつたゲツ〜 直まむくつたと打笑ひたどり行く 夫より久澤  
の善福寺と云へるよ曾我兄弟の石碑あるをわがまて北八  
いま曾我に機縁を結ふ我〜の。外に一家も一文もなし  
富士川の渡し場はいたりて彌次郎兵衛  
行水ハ矢をいる如く岩かどよ。あたるをいどふ 藤川の船  
此渡しを打越けるよ早日も西の山の端にちらつた。おのづから道急ぐ馬士唄の竹に  
どまる雀色時やう〜蒲原の宿よいたる。此宿の御本陣にお大名のお着と見へて勝  
手の今膳の出る最中。北八をとよりさしのぞ死てコウ彌次さん 鳥渡此風呂敷包を持  
てゐてくんち 彌次 どうする 北八 イヤちつどの問ふ 彌次郎よ包を渡し御本陣へす  
へ上りかたすみの方よ居ると本陣の女だん 子僧 といへり勝手のとさくさの中  
〜膳を持はこび大せいへすと北八 子僧 といへり勝手のとさくさの中  
〜こんさつの中ゆゑ人も気がつかぬゆゑ北八思ふさま喰てままい。ときまを見て手  
ぬぐひを廣げ椀も盛たる飯を一膳やつと打明け手ぬぐひよ引包を頼てそこ〜とよ

○彌次  
言奇麗  
事蓋滿  
腹之贅  
澤

軒の下まごつく内彌次郎の向の  
飯を喰て来たが奇妙か 彌次 エ、どこで 北八 本陣でどさくさまぎれよ五六ばいやらか  
してきた 彌次 ソリヤア。い、とをまた。まかしてめへも實のねへもんだ。なせおいら  
も連れていかねへエ 北八 イヤおめへにやアみやげをもつてきた 包し飯を出す 彌次 何  
だ飯か有がてへ。イヤ中々手めへ。さがきいていりへ。ア、うめへく 残さぬ喰  
の手ぬぐひを ヤア是の手拭も包んで来たか。エ、きたねへ 北八 ナニきたねへ物か 彌  
次 夫だつて手めへが金玉や何かを洗つた手拭だ物を。ア、むねがわるい。ベック  
北八 ハ、く時又宿はづれへいつて。木賃と出よふ 打つれて此宿の棒ばあへ出  
彌次 コウどうぞいきな女のある内へ泊てへの 北八 ナニ木賃で泊内よいきさもひやうた  
んもある物か。ハテどこだかしれねへ トあつちこつちの内をのろきあるく軒下 北  
八 アイタ、い、犬 キヤン、く、の聲 鯨のそウし鯖のすウし 北八 コウとし屋さん  
こ、らよ。木賃宿へねへかの としや アイ向のどつばしの内よ 彌次 アイお世話 トおし

たる内の 北八 チト御免あせへ トせつと這入見れば疊の四五疊も敷かれようといふ  
門口から 七十近き親仁。いろりのきはにわらをなつてゐる。じぎいよて。つるしあ  
る。鍋に何かぐづぐ煮へるそばに。六部が一人順禮二人一人の六十余の親父。一人  
の十七八の娘おひづるをきたま。あかぎれだらけの足をのばし火に ひとりへ這入  
あたりてゐる。此家の婆々ア松の枝をへしおりいろりへくべあがら ひとりへ這入  
らしやりませ 北八 わしらを今や泊てくんあせへ 親父 あがらしやりませ。ソレそこに  
氷がある足よウゆとぎささる 足を洗 北八 彌次さん見ねへい、順禮が泊て居る 彌次  
ホンニ。こいつ。只いおかれぬ。ひだるい時よアまづい物あしだ ト打笑ひ足を洗  
六部 サアこ、へ来てあたりなさる 北八 コウ彌次さんもつとをつちへ奇なト 娘のそ  
込でとわるあるじの婆々 婆は サア粥がでさ、皆あ喰なさる 彌次 ソレハ。あつたので  
いいろりの鍋をふるし 彌次 粥がでさ、皆あ喰なさる 彌次 ソレハ。あつたので  
よかるう 婆は インチこんた衆のとじやア御座らぬ。コリヤア此衆の粥だアよ 順禮イ  
ヤ今日もらつた米ア。まいなばつかしたんと有てそして半分ハ石ころだアのし。こり  
よチ喰たら腹がもたたく成たんべい 婆は 六部さんのも三合ばかりやア。有たんべい。  
そこへ分て喰なさる ト此内順禮六部もてん、碗を出し盛て喰内。だ、合の米な  
れば彌次郎北八た、見てゐる斗手もちなくつて煙草入の底を

はたく六部の二人のお衆の定めしお江戸の衆だろが私共も江戸で。てんこち  
傾て喰しまい。もあいに逢たアモし彌次どうしなさつた六部わしがハア。此六部も成た因縁のう。



ひねくりまはらてとつけもないを思ひついたアモし彌次はての六部イヤサ箱屋を  
あつはじめ申たり。あにが重箱だアの。櫛箱だアの色々箱共を。づなく買こんで賣

語りやべいが。ヤレ借人と云者さア。は  
ア運が無ちやア。もち上べいよも。あん  
とてうまづきやア上りやささい私が  
ハア。若い時分よお江戸も居やたが其  
時あんでもハア。夏のとつ、さから。秋  
へぶつ掛て毎日。づなく風の吹た  
とが有申た。其時分ハア。あんでも金も  
うけのウ。すべいとつて色々首ア。

○殺猫者  
者ハ獨り醉

つもりだアモし彌次ハテ風が吹たによつて箱屋といどういふあんどだの六部されば  
さア。私しがハア思ひ付にやア。あよが儲まひ日。どひやうもない風が吹て。お江  
戸でい。がいに砂ぼこりがたちアすからおのづと人さアの目眼へ砂共が吹込で眼玉  
のつぶれる者が。たんと出来るだんべいと思つたから。そこでハア。私しが工夫のウ  
考て。せけんの俄盲が外よあじやうせうとをあしみんな三味のウ習ひしやるだんべ  
い。そよとると三味線屋共が繁昌して世界の猫共が打殺されべいから。そこで鼠共が。  
づなくあれて。あんでも世間の箱共のウ。皆なかじり亡すべいことア目の前だアモし。  
コリヤハア。こ、で箱屋商賣のウ。おつ初めたら賣れべいこたア違ひのあいど。あよ  
がハア身上あり切箱共のウ。仕入たと思つしやい彌次コリヤアい、思ひ付だ大方  
賣や考たろふ六部イヤ一ツも賣ましない。そこで私しもハア。是程迄に工夫のウ考て。  
せつびまうかるべもと思た事がつ、はづれやたから。まよせんハア。あじよやしても  
いか無こんだど。發起のウして。六部も成やた兎角世界の思ふようよヤア。おらな

○ 於レ是ニ  
始知ニ紙  
鳴一

もんだアもし北八 ハア感心なわ咄だ時に又順禮さん。おめへハどふ云事から思ひ付  
て順禮よやア。出なとつた順禮 コリヤハア私一も序にざんげ咄のウ。ままどべい。此  
娘ハコリヤアふとりの孫で御座るが。わし共ハア。かはつたおんで佛縁のウ。結び  
やた。わしハ日光の方で御座るが。定めて夫さまだちも。咄聞て居やり申すたんべ  
ムが。とし共が國なすハ雷が澤山で此二十年斗りも跡のとで有やたが。ふと夏。でか  
く雷が鳴やて。わし共が脊戸口さアへ。れつちたと思ひさる。そうするとハア。其  
雷殿が榎木の株つちいで。でかく尻をうちやて。疝氣がおこつたと。さわざやると  
とよ。わにがそこで天竺のウへ。歸るへい事も出来なから。わし共の内で養生のウ  
して居る内。恥さアかたりやさよやア。理が聞へやさないが。其雷が私共の娘と。  
がらいねんぶろのウままして。たがいハアはなれべいよふすもあさんあから。直  
よ其雷どのをむこよ取たと思ひさる。底でハア天ぢくの親方殿から夕立の時分  
ハ手傳てくれるとつて。夏中のたのまれて行やりやたが。ふと夏上がたさアへかせぎ

に行くどつて出たきりけりで歸らぬと思ひさる。あまつさい其時わしが娘ハあつ  
ばらんでハあるし。ゆにがハア案じあるまの事。大かた。とこぞへあつこつて腰骨  
がナ。ぶんぬいて煩つてでも居るだんべいと思つさばかしで便聞べいよも。あてづ、  
ばう也コリヤハア。あんたるこんだと思つて居る内友達の雷殿が来て。是のむこ殿  
ハハア。熊野浦へあつちて。鯨。がら、呑れたとの咄しヤレ。惻悲しいこんだど  
娘も泣やる。わしモハア片腕れう。もがれたやうに思ひ。ありましたが。あんとすべい。  
せう事がない。そんたいにヤア娘がかみなり殿の種をおつ孕んだから鬼子でもうみ  
あるべい。夫がハア親雷の跡をつかせべいと。樂まんであんでも鬼の子を産よう  
よと。氏神様へ願のウ掛て祈た所が因果なこたア。生れた子ダ此娘で御座り申。そこ  
でハアわし共も力のウおとして。これ程祈たのよ鬼の産を。まかもこんなよまん足な  
人間の子を産と云いよくくの因果だどあきらめて罪止しよこりよをつれて順禮ど  
思立たアもし。わし共ほど因果者ア無と思やア咄しよヲするさへ。むねがつふれ申

「トなみだながらに咄そ内ハヤ夜もふけ、れハ」婆バ サア皆奇ぢべらしやいませ内  
 が。がいよせばいからわしと順禮の女の乗ハ天上へあがつて寝ますべし」ト九ツ階子  
 て順禮の娘を連れて上る。六部ハ笈の内より紙帳など出しかぶる主の親父も順禮ハ北八  
 禮もうそつぺらなる蒲團の様を物をつぱり。いろりのはたへころげてねる」  
 コリヤ小便ガもるようだ 彌次 おいらもいつしよよ行ふ」ト裏口ハ彌次 ヤア順禮めふつ  
 ちめようと思つたら二階へ行つた。いまくしい 北八 さつさから咄して居る内そ  
 つと手をにぎつたり尻を。つめつたりしてちわをして居たがおめへゑるめへ 彌次 う  
 そをつくせ 北八 うそでない今夜アノ娘をぶつちめて見せよふ 彌次 早ハ男だ」ト内へ  
 口をしめ」か、る木賃泊のわびしきも。咄しの種ト云ふながら凌ぐべき庭屏風も破壁  
 をもる風の音いたくも更行鐘に目覺て北八移たりを伺ひ見れば皆旅勞れの掛合尉ゴ  
 ウ〜スウ〜ムニヤ〜」時分のよ〜と北八をつとておき上れ共わかりいなし。  
 と階子に取つき二階へ上り見れば天井竹すのこにて其上上庭を引ればあるくと  
 ミシリ〜ト鳴に驚き頓て四ツばひよ成てさぐり廻り娘と思ひ婆々アが寝て居る蒲  
 團の中へ這込をろ〜あで廻し」だれた。あよよまてる」トいふ聲に北八うろたへ借  
 ゆそりおこせば婆をア目を覺」だれた。あよよまてる」トいふ聲に北八うろたへ借

○感々  
 能極ニ込  
 順禮ニ可  
 レ謂フマ  
 ラク之  
 男一矣

やうしよ足へ竹のとげを立て。ばつたりこけると竹すの子を踏ぬき」あんだ〜  
 下へどつさり落る音ミシ〜ガラ〜ストウン内の親仁目をさま」あんだ〜  
 の婆」あんだのまら無がどつびやうしよ無。皆奇おきなさる〜」此音ハ六部も順六  
 部 ぞゑらい音がした。あかりをつけさる真くらであんだかかんだかぢれないぞこ  
 むわやしいかな北八天井をふみぬき下へ落た所が何か箱の様な物の中へ落て一向よ  
 わあら老足にころ〜と何だの。ひつか、るゆゑさぐりて見れば佛様のご、うあり  
 借は佛ぐんの中へ落しと苦しき内にもあかしさ半分」あんだか佛様の中へ落さそふ  
 此間に掛出んとするに早あかりをともして内の親父」あんだか佛様の中へ落さそふ  
 だと佛だんの戸を開けば思ひがけさ」親父 イヤ此人ハ北八 モシ身延様へいどう  
 北八 這ひ出たるゆゑさをもつふしで」親父 イヤ此人ハ北八 モシ身延様へいどう  
 参り舛 親父 馬鹿ア云つしやい。こんなアアアせそこへ這入らしやつた 北八 イヤわ  
 つちは小便におきた所がツイ戸まどいとして 親父 アコ戸まどいとした。イヤ此人ハ  
 佛様の中へ小便を。しやせぬか」ト佛壇の」ヤア〜こんなア天井から落めさつたさ  
 北八 アイサついアノ猫におわれて落やした 親父 アコこんな鼠じやア有まい猫よおは  
 れた、ア。あんたるこんだ。そしてアせ天井へあがらしやつた 北八 イヤわしハふんど  
 しを鼠よ引かれたから。もしや二階よでもあろふかと夫をさがしよ」ト云わけをして  
 居うち上ら婆

○敗軍  
 探ニ婆將  
 軍一喝ニ

ばがをり「イヤ」くそうじやア御座ら無わしもハア六十に成申が。どこの國にかあ  
 よよきそべいと思てわーが。びどころへ這込めさつた親父 ヤア「く」こんなア氣が違  
 やアせぬか。わし共二十一年もこつちイ。そんなあじやらしいこたア。中絶のウして  
 居升よ。アノ志わくたあ婆、アガ所へ這込込と云ハ。イヤ早こんたは見たくでもない  
 人だ 北八 イエもう御免なせへコレ彌次三寢たふりをして居せとおきてくんない  
 こされておか「彌次」 どうも若者と云者アあとの考へが御座りやせん。どうやうや  
 しさをかくし」  
 うけんしてくんなせへ」ト六部や順禮も共々口を添へて漸々とおさまり北八も浴衣  
 志まいければ程あく夜が明て彌次郎北「彌次」 北八でへぶふさぐのウ。小田原の泊では  
 八はそうくは此所を立出行道とがら」 北八でへぶふさぐのウ。小田原の泊では  
 氷風呂の底をぬいて武朱ふんだくられ。又夕べは二階とふんぬいて三百とられたも。  
 ちへがねへぞ 北八 イヤ面目しでへもねへ。いまく「さ」が一首よんだ  
 順禮の娘と思ひまのびし「」とてこそ高野六十の婆々  
 彌次 ハ、く夕べ戸まどひの云譯もおかしかつたが。ふんどしを鼠よひかれたと

ハ。いこじつけだ。イヤ夫で一ツ咄をあんじたがどうぞ 北八 コリヤ面白へ聞てへの  
 彌次 まづこうだ夕べのように順禮や六部と一所よ木賃泊をしやした時よ手めへが夜  
 中よおきて。何のまどつさやす。そうすると皆なが目を覺えて。コリヤれめへ何を  
 しさざると云とてめへが云よ。ハイヤわしハふんどしを。鼠にひのれやした。たしか  
 二階の方へ引いていつた様だと云と。順禮も六部もそう云なされば。わしも枕元に置  
 たふんどしが見へぬ。イヤわしハの。こ、へ置たがない。コリヤア皆を鼠よ引れた  
 もんだらう。あんでも二階へ行て見やせうと。皆連立て階子を上りやそ。そふすると  
 二階の角のはうで。三味線の音がする。イヤあつハふしぎだと上り口からすかして  
 見れば。鼠共が大勢寄て皆のふんどしを廣げて見て。一疋の鼠が云に。おいらがひ  
 いてきた六部のふんどしハ振うと三味線の音がする。どうしたとだやらがつてん  
 が行ぬと云あがら。其ふんどしを口よくとへて振て見ると成程「ハ、ナン」くく  
 ちぞとなりやす。そこで又外の鼠が云よハ六部のふんどしにかぎつて。三味線の音が



するもふしきだ。物のためし。おいらが引てきた順禮のふんをしむも振て見よう。とおるじく口よくわへて振うと是もサ、サン〜と鳴やした。こいつの妙だ。又一疋の鼠が。おれの北八とやらいふ男のふんどしを引てきたが。コリヤア越中だから短い丈で鼓弓の音がとるだろうと。くわへて振て見れば。ツ、ンツン〜と義太夫三味線の音がしやと。そちで鼠共が。こいつのふ〜さだ六部や順禮のふんどし。皆のはいらしい歌三味線の音がとるよ。奇せ北八とやらがふんどしの義太夫三味線の音がするだろうと云と角つこの鼠がまばらく考。ソリヤア其筈だ。へ。ナせその筈だ。ハテ北八とやらの大かた太棹だるふよ。北八、ハ、〜、〜、奇妙〜ト此咄のうにつくと両側よ茶や女。お這入ささいやアせ。名物砂糖餅よを上りやアせしよつばいり呼立ること。お這入ささいやアせ。彌次エ、やかましい女どもだ。呼たつる女の聲の髪をとりや。さてこそこ、ハ髪由井の宿。夫より由井川を打越倉澤と云る立場へつく愛の鮑獎螺の名物よて蟹人直よ海より

○ 奇兒  
不食團

取來たりて商ふ爰にてしばく足を休めて  
こ、元又賣るのさ、ゐの壺焼や見どころおはさ倉澤の宿  
夫より薩陸峠を打越たどりもく程は俄は大雨降いだしければ。半合羽打のつぎ笠深く片づけ。名よあふ田子の浦清見が關の風景も降うつて見る方もなく。砂道は踏返し足もおもげもやうやく興津の驛にいたり爰もあやしげなる茶店に立寄。北八、チイ婆アさんソノきな粉をつけた團子を二三本くんあせへ。彌次、儲〜久しぶりでれ目への顔を見た。ハ、つもお達者で目出度。時よ此子ハちいささと見たとよりかア。大きく成た姉様は達者のの。婆はわまは子供はお座んさい。彌次、そんなら孫か。婆はイン子子かなげりやア孫もお座んない。彌次、ハテノお目への孫でなげりやア儲このか孫で有た。婆はイン子馬士じやアねざんない隣の駕屋の子でおざるは。彌次、ハアとうの。コウわの子團子が二ツあまつ〜ソレ喰な。駕屋子、うらやアだ。彌次、ナせいやだ。駕や子、ナニ糠アつけた團子のやアだ。彌次、ナニ糠をつけた物か。コリヤきな粉だ。婆はイン子わし

○見不  
糖カ彌次  
應レ學ア馬ヲ

らがとこじやア糠アつけて賣ア彌次エ、どうりで。ぞらくすると思つた。ハッく  
 そんなら犬又やろふコイ〜〜犬 見ん〜〜彌次 コリヤ。やるはあんといへ犬  
 あアん 彌次ア、おしいもんぞ。ト残り犬にやつてしまし胸をわるくしてこ、を立  
 やれも。むだもいではおそた、とほ〜〜とわゆみなや  
 みて程なく江尻の宿を打過けるよこ、よて雨もはれて  
 降くらし富士の根ぶとを打過て。江尻は雨の露あがりたり  
 雨やみたればおのづから行かふ人の足もろげよ。からしり馬の鈴の音もぬさまし  
 くシヤン〜〜馬方唄 よんベナア。まのんだらアエ。おさんどなア。まづいイあせ  
 さねていたから。まよあべの飯がとぎて。つ、ふまたア、へ引エ、此やてつをらア又  
 ばりを。こきやアがる。序でようらもやらかすべしシヤア〜〜先へ行馬方跡  
 郎ヤイ。よしがお馬アだがあまだ行馬方 コリヤア下町の酒屋のおまよ。彼所の野郎  
 めが。がいよ。無上。つかやア、がつたんで。おまア 強氣。さんよやうも清水へ四くら  
 行て歸ると役が當つて府中迄とつとしらかしたア。駄賃は皆んあうらが香でままつ

てから。おまに喰せべい物アなし。丁場の脊戸よつあいでおいたら。雪隠の家よまよ。  
 ぐら、皆あくらやアがつた馬方 先へ行 アノ酒屋の女房めい。まよつばいやつよ。うらがあ  
 してよ居る時分にやア飯の中へすさを交て喰しやアがつた。夫よあんだかハア。うら  
 を見るとむせうよ字を書習への。イヤ筆盤をかかれのど。いろ〜〜な戯言を。つみや  
 アがつてうらをあしこの伴頭よ仕ようど。いやアがつた其手を喰もの業さらしあ  
 ドウ〜北八 馬士とん火をうしてくんあせへ 馬方 アイ〜お前ちヤアお江戸だる。  
 お江戸衆の氣がつかない。さんよよう。うらが府中から江尻迄二百でのせた旦那かお江  
 戸衆でゑい旦那よ。長沼迄くると其旦那が云にやア。江尻迄三百じやア安いから酒  
 手を二百ましてやろう。其代酒のべつよ。こつちから買て呑せると。小吉田の的場  
 で。たらふく酒を振舞しやつた。夫から又云しやるよやア。コリヤ馬士。主やア一  
 日おまを引てあゆんで草臥たろう。是からうらがありて。よしを此おまよ乗せよう  
 と云いしやる。コリヤハアあんたるこんど。うらア乗れたアやアだと云ても聞かない旦那

○此客  
 聽馬方  
 謎語不  
 附馬士  
 ○遣馬  
 者

那よ。せつびうちらよ乗どつて。そんな乗賃を二百やろうと梅の木うめぎの立場たちばからとう  
 くうらをばい乗て江尻えじりへくると。興津迄おきつまでおまア取のとだが草臥くたびしたろうから。おまアと  
 つたふんで駄賃だちんやろうと又二百下くださつた。あんぢるい旦那だんな。めつたにやアないもん  
 だ。ト咄の内此馬うちのうまも乗て居る旅人りょじん。コウくく馬士ばし。チイ旦那だんなあぶない。目を覺さえな  
 ざる。旅人りょじんあこされ。馬うまが埒らちかぬかぬから寢ねぶけが出る。昨日きのう三島しみまから乗た馬うまのよい  
 馬うまであつた。そして馬士ばしかとんだ氣の能男いのおとこよ。三島しみまから沼津ぬまづへ百五十でねを去て。乗  
 た所ところが馬士ばしが云いふ。旦那だんな。こんな早い馬うまも乗て今いま落おちようか。イヤめつたにぬねふ  
 りもぢらぬまど。心遣こころづかいまて居ゐさえやるだらう。夫それか氣きの毒どくだのら駄賃だちんのモウもらい  
 舛むちまいといひゐる。夫それから三枚橋さんまいはしへくると。旦那だんなの馬うまのくらで腰こしがいたみませうちと  
 おりてお休やすみある酒さけでもあかるなら酒手さかてのこつちから上あませうと。馬方ばほうの方ほうから百  
 五十くれて。沼津ぬまづへくると。先まの宿迄しゆくまで送おくてあけたいが。わしが馬うまのはね升かから外ほかも馬  
 へ取とりて乗のりていかまやれ。駄賃だちんのわしが進しんませうと。又百五十た、くれたあんな氣きの



よい馬士ばしも無なもんだ。ト咄の内此馬うちのうまを  
 なが。コウくくムニア。此咄このうたも  
 北八きたはちも大きおきよけう入いり歩あひ共ともなしよ  
 府中ふちゆうの宿しゆくにつく先傳馬せんでんば町まち宿しゆくをかりて  
 夫それより彌次郎やじらうが去さるべの方ほうへたづね行  
 き爰こゝに金子かねこのさいかくと、のひ大きおきよ  
 けさみ出して宿しゆくへ歸かへりなんでもこよひ  
 にかねて聞きおよびし阿部川あべがわ町まちへ去さけこ  
 まんと。北八きたはちもろ共とも其そのした。彌次やじモシ  
 くをして宿しゆくの亭主ていしゆをまねき。御亭主ごていしゆわつちらア是これから二丁にちやう町まちとやら  
 へ見物けんぶつも行いてへもんだが。どつちの方ほう  
 だね亭主ていしゆ安部川あべがわの方ほうで御座ござり舛むち北八きたはち遠とほ  
 いかね亭主ていしゆ爰こゝから廿四五町にじゅうごごまちばかりしも有あり  
 升か何なんあら馬うまでも雇やこつて上あげませうか。北八きたはち  
 いつひ、彌次やじから尻しりも乗のりて女郎買ぢやうかいも

おもしろい／＼頼て爰より殺尻馬に打乗行程よ。かの安部川町と云るの安部川彌勒の手前よて道筋よりそこし引込て大門あり爰にて馬をかり廊に入て見よ兩側は軒を並べて引立るすが、さの聲賑しく見せつさのおもむきハ東都の吉原町よおほよそ似たり。客とふばしさが黒き木綿は紋の付たる羽織をど着て手拭の先を結すしてかぶり。おくりゆく茶屋の女の焼杉の駒下駄を引せり。客人の神と見へしハ。ねほくの股引草鞋にて。いづれも祖父をまよりなり。そ、り手やいよ前垂掛の競われば棒の先よ。もつこうなどく、り付てかつき歩行。ひやかゝり。行こふ男女の開帳参の人のごとく更ハ風俗定まらず。又繁昌いふ斗無し。向よりくる地廻りと見へてかたのだしのしくき角下駄は竹の皮の鼻をすげたるをは。鳥がら替りたる。どてらを着て山き晒の手拭をいくびにのぶり往來の人ハ行當りて。あんたい。コノ御ぢいハ眼をはたけて通りやアがれ。アせおれよぶつ、かつた。跡からく。ヤイ市イあんとした。そいつ。へこたらししてやらせい。之ハへこませ。先の相手。開がりでツイから、行合ました堪忍なさい。ト行通る夫より此手。地廻。アノ壁のさし居る女のつらハ淺間様の天の面の

○田舎  
冷客眞  
面白

ようだ。アリヤ立て行ア。せハのみじかハ女郎だ。梶原れおまが喰た笹葉を見ようよ半分迄かアそだ、あいの。今一人り。この内の着物の皆んち七軒町の硯ぶこのよ。うだナア。此梶原の馬が喰た笹の葉と云は。狐がささの梶原堂の故事也又七軒町の摸様を油糸に見たて。彌次。ナントどこぞへあがるふ。北八。まちあよたしかよ、は澄分と拾文目と貳朱だけな。壁の方よまよふ。大方拾文目だろふ。向の暖簾ハ何だ信濃屋こちらが丁子屋こ、が大和屋だ。まかしようして上るのだから勝手がまねねへ。子先をうるついで居る内容。北八。よし／＼サア爰よしやせう彌次さん見たてね。ハ一人り上るを見まして。ト連立て。づつと暖。是ハ能か出をさいました先上へ。次。チットままつたサア上ろう。籬の内へ這入と若者。是ハ能か出をさいました先上へ。ト二階へ案内する二人ハ見立た女郎を注文すると直に其部屋へ連て行わたりを見。れハ床の間に、琴も有り花も生て有総て吉原小見世の部屋持の如しこ、は酒代別。よ掛ると。御酒はどう致しませう。北八。酒も出せて貰な。若者。ハイ／＼とつて上ませう。みる若者。ト此内彌次郎が相方。名ハ小笹野。上田の小袖。縞襦子の帯空色縮緬の打掛。北八が相方伊佐川。縞縮緬は金もうるの帯黒縮緬の打掛向れも皆紅裏也。座は附と木地ろ色の煙草盆。小笹野。よく御座いました。いさ川。ハ、見たくてもまい。アノがきやアまだをひかへて。

○兩白  
痴不記  
三島之  
敗北早  
己氣取  
大盡目  
今亦多  
此部類

煙草も入るい。ヤア小さめヤア〜引彌次サアお目へ方。最どこつちへ寄らせぬ。若衆酒を早く。若者かもし。畏まりまえた口。今持出し。お定まりの盃も夫〜にそんでまゐる。彌次若衆一ツ呑な。若者ハイ彌次ッレ着。ト南鐘一。若者是のハイ。行替りてかむろ小さめ。かむろアノヤ。今吉濃屋から磯次さんがおさいますして。お前も用が有升から。ちよッくり。ささしやめましとさヤア。伊さ川。今行まよ。小笹ハレ。小雨やア久能の仙さんいおぎつたか。小さめイン子。小笹のばあチヤ。おらやだやア。こんぢうから行せ〜〜と云てよこして。がいよ人をつるくるヤア。北八。コウお目へ方ア。もつとこつちへ寄て一ツ呑あせへい。川。アイまわお前方わがり升。此内若者二人どやりてが持出。〜やりて。た、今は有難お座り升と。若者私金太とヤ升。是は權右衛門已後は御依頼ヤ升。〜ていねいよ。彌次ハ、ア爰では花もひつばらにもらう極とみへた若者よ金太。權右衛門と云名もめづらしい。北八。コノ重箱い何だ。ハ、ア阿部川の五文取か。是が貳朱の返し。記の字屋の臺と云物だの。ッ、〜。ト此内廊下に何るさはがし大勢の聲よてとむのどまぬのと

○彌出  
倍奇

めめきて隣座。北八。そう〜しい何だい。川。何でもお座りまゐるい。アリヤア性の敷へ皆々這入。悪い客衆をめつけて。連れてきたのでお座り升ヤア。彌次。こいついおもろい。ドレ〜トふす間と少し明て隣座敷をのぞき見。女郎。お前此中からこつちへいなせきまゐなれ。大勢の女郎が客一人を中よどり巻。今一人。丁字屋へばつかしお座るから。と夏さんが腹ア。つ、たつも。無理まやの女郎。アお座りまゐるな。此客人の。山家の人。ヤレ扱わまの。ハイ一昨日も昨日も来ぞ〜と思たが。がらゝ用が出来てこられなくなつたソリヤア。ハイ丁字屋へも川鍋の伯父殿の附合で行きたア。行たけれど。アハイ爰の常夏あんなへとやかはまてたア有し。日天。糞掛て不味心まやアおざらぢまヤア。女郎。むわチヤ。夫でも丁字屋の花山さんよ馴染で行きたア。ちがひいね座りまし無ハ。客。アハイそんだたア無こんだが。づなくとふ云ア。せまどが無。トまおれかへつて居るこ、の内姉女郎名ハ常夏打掛と。常夏彌次さんこん中から合ましないが能おさいますま。客。よかアさまし無。堪忍まささ常夏。何もかんよせまてたア。ね座りまゐるい。わまもハイ此内での。ゆんねい〜と

云はれる女郎でお座い升。こんなア顔かほを危しつぶされちやア。はうばい衆しゆうの前へ。立たて様やうがね座りまし無逆なげもハイ。是こゝつ切きりの縁えんあら。お前まへちの様な性根じやうねの悪い客衆きやくしゆうの見みせまめの爲ためわまがせすと見みさつまやいまし。ッレ夏菊あきくきくさん先刻さつぎの刺刀かみそりを持もてお座まいまし客きやくヤレそりやア。わしよどうせせと思おもて。どこ夏あきどうせせもんか。髪かみを切きらせよヤア。ト刺刀かみそりを持もて立たか、れを客きやくの客きやくヤアレコリヤ。情待なさあさろ。新造しんぞう共どもち。またせとアおざいままない客きやく。そんだアとつて此こゝちつばけなまげの。ちよん先さきさへ切きら無ない夫おつとよオ。ハイ切きりせごアゆるしなさる。常夏じやうあきナニゆるさせもんで客きやくアレこりや。常夏じやうあきッレ切きりらず客きやくヤアレこりや。トまげ出でそを取とりて。よがさばこそ寄より掛か客きやく人ひとへけんつらよて皆付みなづ髪かみあれば。まげもび。つてあたをむちりちらかす。いつたい此こゝんもあちてままい客きやくへあたをなでまはして。ヤアこりやハイ。あたアむちり無なきたり。女郎ぢやうらうみ。おわチャ。オホ、。客きやくヤレ笑わら所ところじやない。コレわまハ。ハイ丁子屋ていしやへい行いまいのらあたア出でてくれあさる。常夏じやうあきわまやア。まりままない客きやくアレハイ。夏あき菊くきく殿でんが。かくした。サアあたア早はやく出でしあさる。常夏じやうあきあまい。ハイ是こゝれでも丁子屋ていしやへい

かまか客きやくモウいかない。常夏じやうあきほんどうにかヤア。客きやく天照皇太神宮様あまてらすみことみやうさま掛かて行いかない。常夏じやうあきすんちら夏菊あきくきくさん出でして上あさまやい舛まち。ト常夏じやうあきのさしづにかくし客きやくヤアまだ。たらあい。夏菊あきくきくモウ夫おつとばつかし客きやくア。ハイまだ片小かたこびんがそこらよア無なか尋たづてくれあさる。女郎ぢやうらうコレカ有ありヤア。客きやく夫おつとだ。トじしんよあたをさぐりまはしてまげ。客きやくヤレ。あまぬ目めにあつた。皆みな々々。オホ、。ト是こゝれより中直なかつちりの酒さけも成なてす彌次郎やじらう北八きたはちは彌次やじ何なんくのうらでも有ありやつづが。よつほど面白おもしろかった。丁度ていど去年こゝろの春はる一九が中田屋なかつたやの勝山かつやまにまむられた時とき。あんあままで有あつた。どうさらしな。ト此こゝ内うちモウお床とこに致いたませうサトあつちらへ。ト北八きたはちは自分の相方あひまの部屋へやへ行いと其内そのうち若者わかしよ一ひと斯かて一ひと匪いつぱいの夢ゆめは覺さめて。おかつまの名残なごみりをおしみ彌次郎やじらう床とこを起おき出でせば北八きたはちも目めを摺すりながら。爰こゝよ來きたりて打連うちつれ立たち階子はしこをおりるよ皆みな々々送おくり出でて挨拶あいさつとこ。にひき別わかれ。傳でん馬ば町まち差さて急いそぎ歸かへり來きたりければ早はやくも宿やどよは朝飯あさめしの用意よういと、のへ膳ぜんを据するよ支度しだくあらましよして。やがて此こゝ驛やくを打立うちたけるが。今いまもどりし道みちを真ますぐに程無ほどな彌次郎やじらうと云いるよ

○五文  
餅金二  
朱彌次  
等可レ搗  
餅

いたる。爰は、よわふ阿部川餅の名物にて、雨側の茶屋いづれもされるよ花やかなり茶や女めい物餅ものもちをあがりやアし。五文ごもんどりをあがりやアし。彌次やじ「おいらア夕ゆふべ貳朱にじゆが餅もちを喰くて来たからモウ此こでの喰くめへ北八きたはちそふさく」ト此内阿部川の川越道こしよ出でむかひて且那衆お登のぼりかナ彌次やじ「イ貴様何きさまなんだ川越かほして御座ござり升やす安やすくやらせよお頼たのん申ま升やす北八きたはちいくらだ川越かほし昨日きのうの雨あめで水みづが高たかいから一人前ひとりまへ六十四文むそじゆぶん北八きたはちそいつは高たかい川越かほしハレ川がわをまアお見みなさる」ト打連て川彌次やじ成程なるほどどうせいな水みづせいだコレ落おれためへよ川越かほしナニねまるサアそつちよをつん向むかなさる」ト二人をかた車に乗て北八きたはちア、南なんまゐるだ々々々目めが廻まるようだ川越かほししつかり。わまかあたまへ取とつきなさる。ア、コレそんなにわししが目めをふさがつしやるな向むか見みへさい彌次やじ成程なるほど深ふかい。コレおとして下くださるな川越かほしアニ落おれたもんかへ彌次やじ夫おれでもひよつと落おれたらどうする川越かほしハレ落おれた所ところが。たかでお前まへは流ながれてまはしやる分ぶんのた彌次やじエ、流ながれてたまる者ものか。イヤもうきたぞくヤレく御ごくろうく」トかた車よりお彌次やじソレ別べつ酒手さけでが十六文むそじゆぶんッ、川越かほし

へイコレハ御機嫌ごきげんよう」ト川越の直上川上のあ北八きたはちアレ彌次やじさん見みねへかいらをば。ふかい所ところを渡わたして六十四文むそじゆぶんッ、ふんだくりやアがつた川がわこしの肩かたくるまよて我われくを。深ふかいところへ引廻ひきまはしたり夫おれより手越てこしの里さとに至いたるよ。又またもや俄にわか雨降あり出でてたちまち車軸しゃちくを流ながしければ半合羽はんがつば取出とりだし打うちかつぎ足あしを早はやめて程ほどなく丸子まりこの宿しゆくに至いたる爰こゝで支度しだくせんと茶屋ちややへ這入はいる北八きたはちコウ飯いひを喰くふか爰こゝで、汁じゆの名物めいぶつだ、彌次やじそうよ。モシ御亭主ごていしゆとろ、汁じゆ有ありやすか亭主ていしゆハイ今いま出でます彌次やじナニ出来できねへか。ままつた亭主ていしゆアレじつさま拵こしらへせよ。ちいと待まちなさる」トよはのに芋の皮もむかきし亭主ていしゆお鍋なべヤイく此こゝをがしひまわよましして居ゐる。ちよつくりこい」トせはしく呼立る裏口うらぐちより小言こごんを云いひあがら来る。中ちゆうは乳香子にゅうかうしを脊せおひひ」今彌太アのこの。御ごばアどんと咄はなしよヲして居ゐたよやかましひ八はちだヤア亭主ていしゆアニハイやのましひもんだ。コリへ。そこへ膳ぜんを二膳にぜん拵こしらえらる。エ、ソレ前垂まいたれが引ひきらア女房にようばうお前まへい著はしめらつたのウ。まらずか亭主ていしゆアニおれがし

○蕩子

買女郎

摺身代

箸之摺

芋不足

怪

○夫婦

蕩論却

摺多少

錢

るもんか。コリヤ、イ其箸よヲよこせヤア 女房はに 是これかい 亭主ていしゆ エ、箸はしでいもが。すられるもんか。摺すりこ木のきとどい。コリヤ 借かまおつくな其膳そのぜんへ附つけるのじヤア無ないい。こ、へよこせと云いことよ。エ、うちのあかない女にだ。ト摺すりこを取とり木きてこ。女房にッレおまい摺すりこ木きがさかさまだ 亭主ていしゆ かまうあ。それごとより。うぬがッリヤ海うみ苔かきがこげらア 女房にヤレく。やかましひ人ひとだコノ又またがきヤア。ねんなじ様ようにやへらア 亭主ていしゆ コリヤ摺すり鉢はちをつかまへて呉くれろ。エ、そうもつちやア摺すりられないい。おへなるいやうたくれめだ 女房にアコこんたがひゆうたくれだ 亭主ていしゆ イヤ此こあまア。ト摺すりこ木きで一いっくらはせ。此この野郎やろうめい。ト摺すり鉢はちを取とりておげるとそこら 亭主ていしゆ ヒヤアラぬ。ト摺すりこ木きをふり回まわして立たか、りし。あたりへとろ、がこぼれる。ト摺すりこ木きをふり回まわして立たか、りし。とこ。女房に こんたよまけて居ゐるもんか。トつかみか、りし。是こもとろ、よま。ヤ又また見みたくでも無ないい。いさのひか。アまづまりなさる。ト兩方りうほうをあだめよか、コリヤ。ハイあんたるこんだ。ト三人さんにんがからだ中ちゆうとろ、だらけにぬる。くしてわ。彌次やじこいつはじまらねへ先まへ行いふか。トれかしさをこら。北八きたはち とんだ手てやひだ。ア、とろ、

汁じゆで一首しゆよみやした

喧嘩けんかする夫婦ふうふの口くちを尖とがらして。驚おどとろ、よすべりこそすれ

夫おとこより宇津うづの山やま差掛さしかりたるよ。雨あめの次第しだいに篠しのを亂みだし、鳥つたの細道ほそみち必かならずばそくも。杖つえを力ちからよ十圓子じゅうげんこの茶屋ちやちかく成なつて。彌次やじ郎らう思おもはせ坂道さかみちにそべりころびければ

降ふりささる雨あめやあられの十圓子じゅうげんこ。ころげて腰こしを宇津うづの山道やまみち

岡部おかべの宿しゆくの。お泊とまりで御座ござい升しやうか 彌次やじ イヤわつちらア今日けふ川がはを越こさよヤアならねへ 宿しゆく引ひ待まち請こて

大井川おおいがはの留とどまりました 北八きたはち 南無なむさん川がはがつかへやしたか 宿引しゆくひ さやうで御座ござる升しやう。

先まへお出いでなさつてもお大名だいめいが五いッ頭かしら鳥田とりたと藤枝ふぢえだよお泊とまりで御座ござる升しやうからあきた方の

お宿しゆくの御座ござりませぬ。先岡部まつかべへお泊とまりなさいませ 彌次やじ そんならそうまよふか 北八きたはち お目

へ何屋なにやの宿引しゆくひ 相良屋さうらやと申まを升しやう。直すにお供致ともいたしませう。ト打連うちづていそぎ行いはとよ早くも大

よんたり ければ 豆腐とうふなる岡部おかべの宿しゆくにつきてけり。足あしに出来できたる豆まめとつぶして

○遭川  
溜二兩個  
暫少振三降  
藤枝



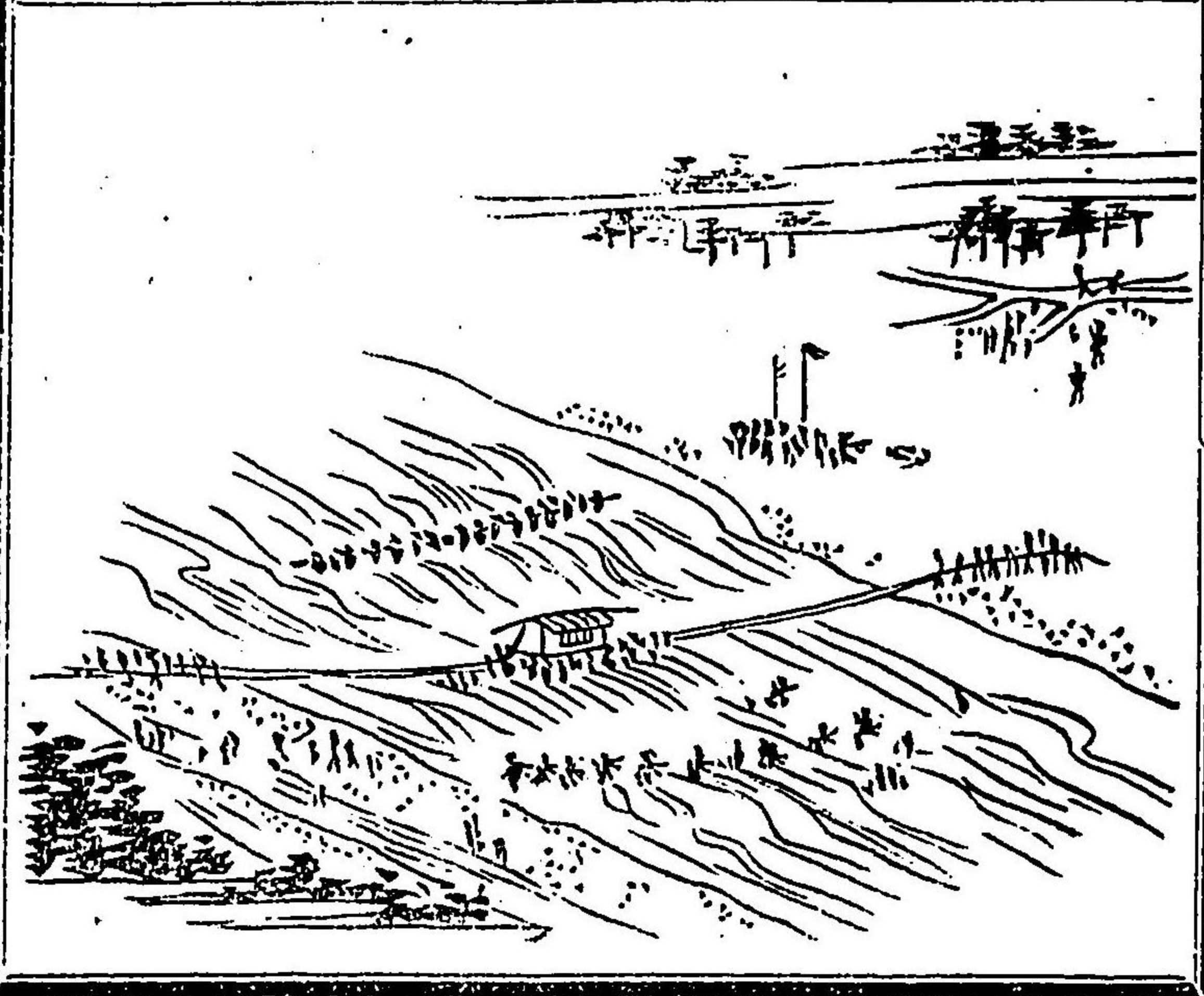
〔先此驛又宿をとりて川の明まで去る〕  
〔をらく旅のつかれをやすめける〕

○第三編

○起頭  
粲然綴  
得昇平  
之象

名にしあふ遠江灘。浪たいらに街道の並松。枝をならさせ。往來の旅人互道  
を讓合泰平を唄ふ。つゝら馬の小室節豐又宿場人足共町場を争はず。雲助駄賃をゆ  
そらせして。盲人おのづから獨行し。女同志の道運。ぬけ參の童盗賊かわか  
の愁よあはず。かゝる有難き御代よこそ東西より南西北遊行する雲水のたのみ。  
愛よかの彌次郎兵衛北八の大井川の川支まで岡部の宿は滞留せまが。  
今朝御狀箱渡り。一番越も濟たる由。聞とひとま。そこくみ支度去て旅籠屋を  
立出けるよ早諸家の同勢往來の貴賤櫛のはを引がごとく問屋駕ちうをかけり。小荷  
駄馬飛で走る街道の賑はひいさましく。二人も共にうかれたどりいく程よ朝比奈川  
を打越八幡鬼島を過白子町に至る愛の建場よて兩側の茶屋女お茶ア參るはア。一膳  
飯よチ參るはア。お休さるまア。馬士の唄うらがお長松のか、ア。たこよ。ナ

アあせさ峭だとももしゆるへ。八間真  
中み足だらけ。しよんがヘドゥ。馬  
ヒイン。馬方。旦那しゆお馬アいらあ  
いか二百だが安いもんだア。あんち  
錢さへくんささやア。たでも行ず  
よ北八。エ、二百出しやア夜の馬に乗  
アくそたれめが馬方。ヤイクそつされた  
ア。あんだい。うらがいつくそを。馬  
ヒ、ヒン。彌次。ナントちよつぱり香  
で行か。コウ姉さんい、酒があらばち  
つと斗出してくんさ。茶屋。茶屋の女  
ハイかんをきて上ヶ老がヤア。彌次とう



○怖汚  
陀佛  
其身之  
汚陀佛  
也

「時よ肴は何が有やす」亭主 アイねふかとまぐろの煮たの斗かし北八 イヤねぎまの  
 風呂吹ツレよかるふ 亭主 イン子風呂吹じやア御座らさい。たんだ鹽油で煮たのだア  
 のし「ト云つてうし盃を持出」彌次 ハア葱まと云から江戸でとるようだと思つた  
 らコリヤア雉子焼を煮たのだなよま〜 北八 初めようチット〜 イヤこの肴の  
 おだ佛だせ。コリヤ昨日のまぐろだぞ 亭主 イン子ハイ昨日の。魚じやア御座らないの  
 彌次 それでもまごつぱり喰ぬ〜 亭主 ハアさんによろのが見るかア一昨日のを進せま  
 せうか。そんだいよやア酔こたア請合ご申 北八 エ、酔てたまる物かそまて此酒は半  
 分水ぶ。ペツ〜 時ふいくらだの 亭主 ハイ肴が六十四支酒が廿八支 彌次 味くねへ  
 替りよ高ひもんだ。サア行ふと錢を拂ひ爰を立出早くも銚が溜と云どころにいたり  
 例のそさの道おれば彌次郎兵衛取あへぞ  
 こ、元は鞍の銚の溜なれど踏またがりて通られもせず  
 夫より平島口田中を打過藤枝の宿近く成て

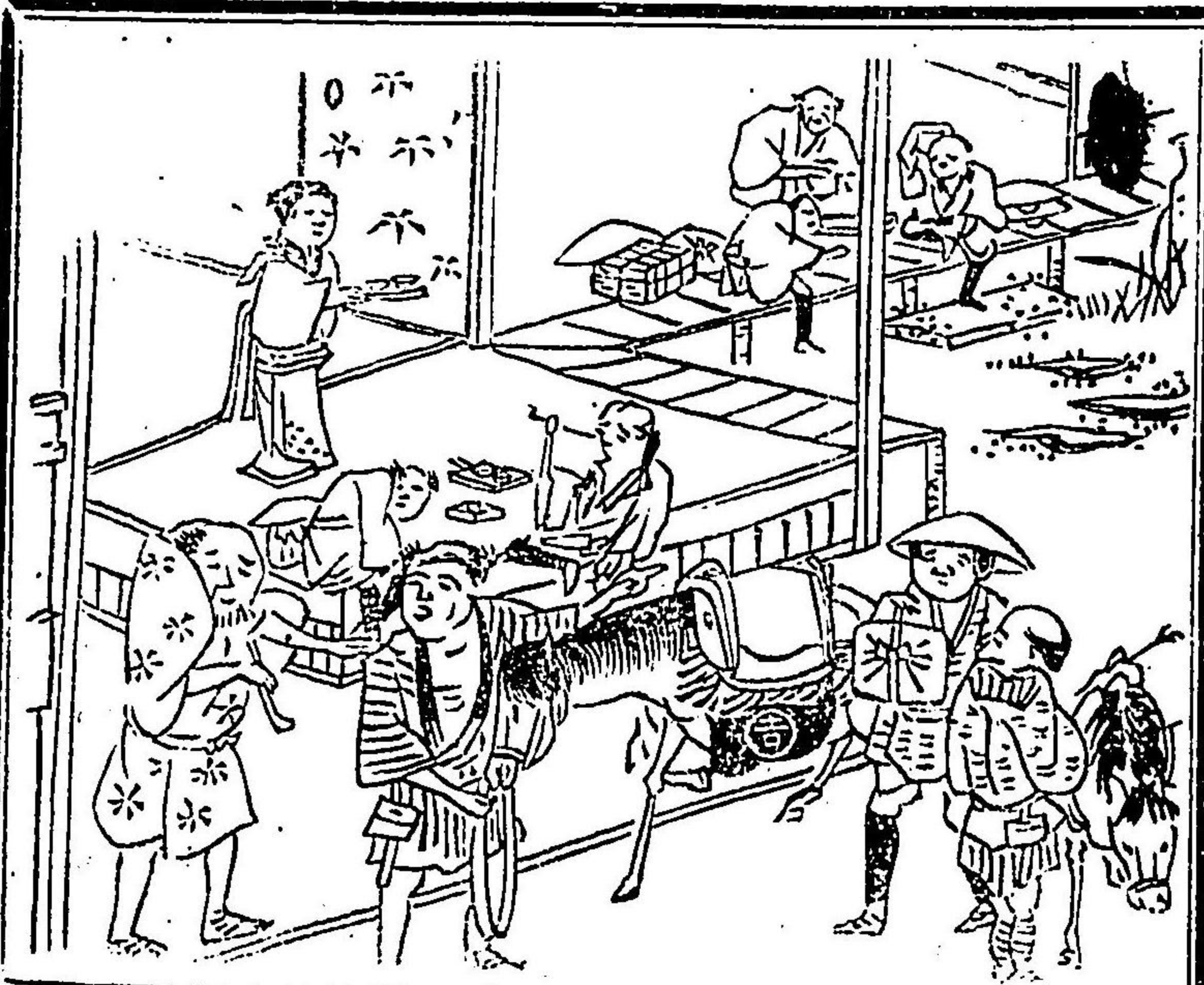
街道の松の木の間に見ゆる。これ紫さきの藤枝の宿

「此宿の入口にて風呂敷包。ちよいとかたよ掛たる田舎の親父馬のはねたるにおどろ  
 き逃るひやうしに北八へつき當ると北八水たまりの中へころげて大きにあつくな  
 りおき上りて田舎」北八 コノ親仁め眼が見ゆるへか寒鳥の黒焼でもくらやアかれ 親  
 仁 コリヤハイ御免なさい 北八 ヤイ御免なさいじやア。濟まねへ〜。コレ野郎の粒  
 でも。ぎアつ〜云のら金の 鮎をにらんで産湯から水道の水とあびた男だ 親仁 イン  
 子。ハイ水をあびたならよう御座るが。そなたのこけた所にお馬の小便溜りだア 北  
 八 エ、其小便の溜つた。所へあせ。つ、こまやアがつたへ 親仁 そりや。ハイおまも。  
 がらひお馬につ、ばねられて。そなたも行やつたのだどうもせまことがない。かんよ  
 さつーやい 北八 何だ堪忍しろいやだはへ。ほんのこつたが。大江山の親分が鐵棒引  
 渡りよこようか。石尊様か猪のくまの似づらをか、せた灯燈で路次口から溝板の上  
 へ。はるか、んで。さても。さかねへと云ちやア。久米の平内を居ざるそくよ。やつた  
 よりのア。又びつくとせぬ奴様だア 親仁 ソリヤア。ハイあまか七六かしひことを云

つしやるが。せーらよやア。ハイがひもくよまれ申さぬ。わしも。ハイ此近任の長田村  
ぢやア名主役も勤た家筋だんで。今でもお地頭様の年頭よやア。上席のウせる男だ。  
あよもがいに心れるく雑言のウしめさるたア御座んさいやア。北八エ、悪く。しや  
れらア。尻がかい、へへ。頭の飲でもひろはせてやろふか。親仁エ、そなたア。づない  
人だヤア。わしにもハイ荒神様がついてぬまがいはよおとがひのウ。た、かーやん  
な。北八エ、此摺こ木め。トくらはせに掛る彌次郎兵衛。彌次。北八もう了簡えろへ。親  
父ね目へダ。せんでへ鹿相まゐから氣かつエ、もういひかゝ行なせへ。ト北八をな  
仁の面をふくらかしふせ。  
うくは行過ると彌次郎。  
頭に乘て北八も今こ、かれし。藥罐あたまたの親父をこんだ  
打笑ひつ、瀬戸川を打越夫より志多村大木の橋を渡り瀬戸と云所よいたる。爰の建  
場よて染飯の名物おれば  
焼物の名よあふ瀬戸の名物ハ。儲こそ米も染附にして

○ 瘦我  
漫 兩個  
之 喉已  
愚 微々  
々

斯て此町はづきの茶屋。先刻の田舎親父休るたりけるが二人を見つけて呼かけ親  
父エレ。先刻よやア無禮のウままた。わまもハイ有ようは一盃香だ元氣で。づま  
ひ事も云申したが。其方衆が了簡のウまてくれさつたから。へこたらずよ歸村のウ  
まますい。マアあんでも禮よ酒ウ一ツ進ませせう。こ、へ寄らつまやゐまし。彌次ナニ  
目つちら酒も香で來やまた。親父エレ。チャア折角わまが思ひだアのし。せつひ一ツよ  
からまよコリヤ。御亭主味よ酒ウ出さつまやゐまし。北八イヤお心さしハ忝なひ  
ダサア彌次さん行ふ。親父ハテコリヤじやうのこわぬ人だヤア。じつさよ。やらまに。  
ちよつくり寄てくれされやア。トむり彌次郎北八が手を取て引摺込二人。彌次  
ハ。北八一盃やらかそふか。然し親父さんお目への御ちそうじやア氣の毒だ。親父ハテ  
コリヤ。よと云のよ御亭の。肴アじやうよつん出してくれさ。時にコリヤハ  
イ爰はあんまり端つばた奥座敷へ行まかヤア。茶や女。サアあつちイ御座らまやゐまし  
し掛た銚子盃を奥へ持て行と三人も中庭から廻。サア親父さん初めあせへ。親父



アイそんたら毒見のウまませせ。チト  
 〳〳よからせ〳〳儲先若いのへ進せ  
 ませう 北八 アイわつちやア酒よりかア  
 腹がへつた 親父 アニ腹がへつた。ソリ  
 ヤア飯を喰つてやい。じつさによくま  
 る 北八 イヤ先酒よしよう。ナット有升  
 〳〳時に此吸物は何〳〳。た、み鯛のせ  
 んを煮か大かたこの跡じやアかばらや  
 の胡麻汁か。薩摩芋のよごまが出るだ  
 ろう 彌次 サア悪く云せ。コレ此海老を  
 見や。こうはねかへつた所はごう天井  
 の天人と云身がある 北八 イヤ豊後ぶし

の。とかアいなア、引といふ所も有やすハイ〳〳〳時又親父さん上やせう 親父  
 インチ。へさいましやう今肴がこきに。コリヤあん姉〳〳先刻からハイ。へし折るや  
 ど腕をた、くにわせ肴アつん出さない 茶やの女 ハイ〳〳只今上げせよ〳〳と大平と鉢  
 肴を持 彌次 やらやつと持て来た。平何だア玉子のぶい〳〳か 彌次 おそひ筈だ今産  
 のを待て居たと見へた 北八 こいつの無撻だ奇妙々々 親父 たんと呑でくれさつしやい  
 そんたア私が爲にやア。命の親だ。よく先刻ヤア了簡のウまてくれさつたのし 北八  
 イヤわつちもツイ虫の居所か悪くつて云過しまえた眞平御免 彌次 そこの旦那殿も野  
 暮じやアねへ。若こぬつひどうせ味噌喰べつたり焼せうがといふ男だのら。まやう度ハ  
 あし〳〳トた、呑酒もへつるせうたら〳〳闇雲お引掛る此内勝手よりも色々持ち出  
 立て行 北八 膳も出て彌次郎北八そこしハ氣の毒なうら是も喰てしもうと親父小便に  
 跡よて 〳〳彌次さんお目へこ、の割合を。おれによこしなせへ。おゐらがアノ  
 親父をいぢめたればこそ。お前どうてきまやらかまたせ 彌次 おきやアがれそう云て。  
 モ方ざらじやアねへ。アノ親父のこぬうち後又香分もやらかそう 北八 おらア此茶碗

○悪口  
鴉之黒  
燧之報  
見阿房  
々々之  
目

よつんでくんな。ヲツトきた〜きたさの〜。讃岐の金比羅高が高瀬の船頭の子じや者。おさへてどうぞるシヤン〜。彌次、エ、引山に切ころはした松の木丸太の様でも妻と定めたら。方さらよく、もあるまゐし。やどさのせ〜面走ろへ〜。時に此親仁の。べら作めいどう〜た。北八、ホンニ長の雪隠だ。モシ女中爰よ居た父様の何所へ行たの。茶や女、たしか外ての方へ。彌次、ハテソこいつ何か庵んちさだいのへ〜。トまも〜。此親父何所へ行たう一向よ。北八、モシ女中今の親仁が爰の拂をして行たか。茶や女、イ、エまだいた、さませぬ。彌次、ヤア〜。北八、一べい赤飯よかきやアがつた。あ。追駈てぶちのめそふ。殊よ親父は此近在の者ゆる脇道へ道入しにやさらに行へし。けて立歸り。彌次三どうもしれねへ〜とんだ目よあつた。彌次、仕方かねへ手めへ拂をしや。アノ親仁めがくやま〜棒で。手前に意趣返しをきたのたはあ。北八、それでモナニおれ斗りかふるもんだいま〜しい折角酔た酒が皆あ。さめてしまつた。彌次、次郎殿の犬と太郎殿の犬と皆な醒てしまつたか。北八、エ、まやれなさんな其所じやアねへ。

○思苦  
厄拂一宜  
諦

マア何にしろいくらだね。亭主、ハイ〜九百長五十で御座り升。北八、かたりよ合たと思つて往生して拂ひやせう。云ア云程ちるのねへ咄だ。彌次、そう云てもあつな親父だい、事をまやアがつたコウ北八手めへの顔で一首うのんだ。御馳走と思ひの外の始末よて。腹もふくれた顔もふくれた。北八、〜。ごう腹な生馬の眼を買やアがめた。有かたい忝じけないと禮云て。一盃たべし酒の御馳走。斯よみて北八も笑ひをまよほし田舎者どあをどりて。とんご意趣返しを。まられたるもかろしく。爰を出てもく程よ大井川の手前ある島田の驛に至りけるに川越共出向て旦那衆川ア頼ん升。彌次、貴様川越か二人いくらで越と。川越、ハイ今朝ガキよ明た川だんて。肩ぐるまじやアあふん無蓮臺でやらせよ。お二人で八百下さるませ。彌次、どはうもねへ越後新潟じやアあんめるし。八百よこせもすさまじい。川越、そんたらいくら下さるヤア。彌次、何程も摺木もいらねへ。わいらがまきに越は。川越、チ、川流れやア。

貳百附て寺へやるら。何ならそうさつしやゝ流た方が安くあがらアハ、くくく  
 彌次 馬鹿アぬかせ問屋へ掛つてお越をさるは、  
 足早よ行過、彌次 ナント北八はいつら  
 に。からかうが面どういふらいつそのと問屋へ掛て越よ。手目への脇差を借しやれ北  
 八 あせどうする 彌次 侍よ成は、ト北八が脇差を取て差。おのれが脇差の引はだを彌  
 次 ナント出来合のお侍よく似合たるう。此風呂敷包を手めへいつしよよ持て供も成  
 てさや、北八 こいつは大笑ひだ、くくくく  
 ト彌次郎兵衛が荷物を一しよよし  
 て。北八肩よ引掛やがて川問屋よ至  
 り彌次郎兵衛お國、コソリヤ問屋共身共大切な主用で罷通る川越人足を頼むぞ 問屋  
 詞のこわいろよて、  
 ハイかーこまりました御同勢いはいくたり 彌次 ナニ同勢を 問屋 さようで御座り舛。  
 旦那はお駕かお馬かお荷物何駄ほど御座り舛 彌次 本馬が三疋。駄荷が都合十五駄  
 程ありあるが。道中邪魔だから江戸表におゐてきた。其替り身共駕の陸尺が八人そこ  
 へ記めさる 問屋 ハイお侍衆は 彌次 侍共が十二人鎗持挾箱ぞうり取。よいかく合羽  
 籠竹馬つがう上下三十人余りじや 問屋 ハイ、其御同勢は何所より舛 彌次 イヤサ

江戸表出立の節に残り召連たが。途中で退く麻疹をいたしおるら宿くへ  
 残り置た。そこで只今、川を越をといふ同勢の上下合せてたつた二人玄や臺越も致そ  
 う何ぼじや 問屋 ハイお二人なら進臺で  
 四百八十文で御座り舛 彌次 夫の高直じ  
 や。ちとまけやれ 問屋 エ、此川乃賃錢  
 にまけると云ひないヤア。馬鹿云迄と  
 早く行がよからに 彌次 イヤ侍に向  
 つて馬鹿云などの何じや 問屋 ハ、く  
 くがいよ頭なひお侍だヤア 彌次 こ  
 いつ武士を嘲ろらおる。ふと、尻千



万お 問屋 こんた武士が刀の小尻を見さつしやい、ト云ひれて彌次郎兵衛ふり歸りう  
 引はた斗の所ニツよ折てゐる皆くどつと笑ひ出、問屋 刀の折たのを差武士が何所  
 せむさどがの彌次郎面目無くしよげ反てだんまり

○三保  
谷子孫  
被壓頸  
根子

よ有者だ。こんな衆問屋をかたりに來たなそんなでハ。ハイ濟せない。彌次イヤ身共ハ  
 三保の谷四郎國俊の末孫だから。夫で刀の折たのを差あるて問屋。たはこと云とく、  
 し揚るぞ。北八 コッ彌次さんお納らねへ早く行ふ。ト手を取て引づられ彌次郎兵衛問  
 屋ハ、くくくとはうもあい氣違だ。彌次 ツイ。やりぞ成すいまくしるハ、  
 出来合の生くら武士の印とて。刀の先の折てぼづかし  
 此狂歌よ双方大笑ひとなり。彌次郎兵衛北八愛をのがれ。いそぎ川端に至り見るよ往  
 來の貴賤を死間もなく此川の先を争ひ越行中よ二人も直段取極めて蓮臺よ打乗見れ  
 心。大井川の水さか巻。目もくらむ斗。今や命をも捨なんと思入程の恐しさ。譬ゆるよ  
 物なく。まことや東海第一の大河。水勢早く石流て。渡るよあやむ。難所ながら。程な  
 く打越て蓮臺をかり立嬉しさいわん方なし  
 蓮臺よ乗しはけつく地獄よて。おりた所がほんの極樂

○所謂  
過誤失  
策

斯打興して。金谷の宿よ至兩側の茶屋女お休なさいませアしく。駕やもどり駕乗  
 ていじや御座い。北八 コッ彌次さん駕のどうだ。彌次 イヤ氣がない手めへ乗から乗てい  
 かつし。北八 そんなら日坂迄乗るか。ト駕の直段極て打乗するよ折節雨降り出しけれ  
 て早くも菊川の坂よ。ふぶぶ浴や岸打浪の御熊の。アイお駕の旦那登文下さい。北八附  
 掛ると順禮が二三入。御道中御繁昌の旦那此中へたつた一文。北八 エ、附など云にべら棒め。順禮  
 夫にべら棒が入もんか。そつちがべら棒だ。北八 コノ乞食めが。トりきむはづみにいか  
 つばりぬけて北八どつ。アイタ、くくく。順禮 ハ、くくく。駕や エレ、くくく。怪我アさ  
 つしやりませぬか。北八 コレ手めへたちやア。おせこんな駕よ乗た。駕屋 ぬさつたや  
 りませ。あんとせろもんで。北八 何所へ行て。い、駕をかりて來さつた。駕屋 こかア坂  
 中で。のり所が御座らあ。イヤよかどがある棒組。主のへこをはづせ。棒組 アせ。ど  
 うせる。駕や ハテおれがせるとがある見され。ト自分のふんどじとはせし棒組のふん  
 だう中を。サア乗ていじや御座れ。北八 とんだ事とする。是で乗られるもんか。駕屋 ハテ

外ほかよせる事がない。そんないよやア。寐ねぶ度たくならしやつても。此このへこで落おちき様が御坐ごまらるる不肖ふせうして乗のりつしやるませ。ト氣きの毒どくそふよ云。北八きたはちもおかし。白しろるふんどしで駕かこの胴中どうちゆうをくくつた所ところ。しつかいお屋敷やしきの葬禮そうらいと云物もの。北八きたはちエ、いまくしよそんな事を云いなさんち。彌次やじハ、ア駕かこの内うちで物を云いのら佛ほとけでもねへ。こいつ開ひらへた科人しかりんだち。北八きたはちエ、猶なほいまくしよ。ねらアもふありて行いう。トあ、より駕かこを賃ちや錢せんを拂はらひ駕かこを歸かへしたどり行いよ。雨あめの。まきりよ降ふ出しければ坂道さかみちすべりてやうく。と佐夜さよの中山ちゆうせん建場けんぢやうよ至いた。こ、名なよあふ飴あめの餅もちの名物めいぶつよて白しろき餅もちに水飴みづあめをくるみて。此この二人ふたり酒さけ呑のなればやうやく。ツニツ喰くける内雨うちあめづよくありたるよ。

こ、元もとの名物めいぶつながら我われく。降ふ出す雨あめの餅もちあましたり。傳つたへ聞き無間むけんの鐘かねの其寺そのでらに名なのみ残りて今いまなしと。

此寺このでらに無間むけんの鐘かねもつきて無し。今いまの晦日みそかよ嘘うそやつくらん。夫それより此坂このさかを下くだり日駕ひつぎかの驛えきに至いた頃ころ。雨あめの次第しだいにつよく成なりて今いま一ひとと足あしも行いれど。あたりも見みへどかぬ程ほど。しきりに降ふくらしければ。或ある旅籠屋りゆうろうやの軒のきまた、せむ。彌次やじいま

くしぬごうてきよ降ふりく。北八きたはち花屋はなやの柳やなぎじゃア有あめへし。いつ迄まで人の門かどに立たても居おられめへ。ナント彌次やじさん大井川おおいがわの越こすし最此宿もつこのしゆくよ泊とまらうじやアねへか。彌次やじナ。とんだ事を云いふ。まごハッよやア成なるめへ今いまから泊とまつてつまるものか。宿しゆくや婆ば々々此雨このあめじゃア。行いれましあ。泊とまらしやりませ。北八きたはちイヤこりや泊とまたく成なつた。彌次やじさん見みねへ奥おくまたばが大分たいぶん泊とまて居おる。彌次やじヲヤドレ。こいつ咄はなせるはへ。旅籠りゆうろうば、サア。おまいち泊とまらしやりませ。彌次やじそらしやせふ。トこ、にて彌次郎やじらう北八きたはち。足を彌次やじコレ。女中にようぢゆう素湯すゆがわらむ一盃いっぱいくんち。宿女しゆくにょハイ。いんま上あうせ。北八きたはち飛龍ひりゆうづが聞きてあされら。宿女しゆくにょハ。イおさゆ。彌次やじよし。北八きたはち昨日きのうの藥種くすりぐしをくりやな。北八きたはち何なんぞ。まんりいあんかん丹たんか待まちなよ蟻ありの戸渡とわたりから。ひねり出だしてやるふ。彌次やじエ、馬鹿ばかア云いやんな。腹はらがいたく。てあらぬ。北八きたはちソリヤアおめへ。ないらのおこつたのだ。豆まめを喰くやアあをる。彌次やじエ、悪わる敷しやれまを。早はやく出だしてくれろへ。北八きたはちそんなら眞ま目めよ。ソレ田町たまちゆうの反魂丹はんこんたん手てを出だし。彌次やじニッ斗はかりくりやれ。ガリ。コリヤ胡椒こしやうだアハ。辛からい。北八きたはちハ、



くく待なよ。イヤ最さい。イヤこ、に錦袋圓が有ッレよしか 彌次唐紙の影でまつ  
 くらだト包紙を明て 薬を取出し ガリくくく。ア、又何を喰しやアがつたメツく 北八  
 ドレ見せな。イヤア是の觀音様ぞ 彌次 ほんは觀音様の頭アかみくだいて仕舞たハ、  
 くく 宿女 御膳を上ケませう 北八 イヤ三膳喰ア澤山だ 彌次 能口を叩く男だ。やか  
 ましひ。だまつてまやべれ 北八 静よさわげが。あきとらア ト此内膳も出て色く 彌  
 次 時よ女中奥の客人の女斗りだが。ありやア何だ 宿女 皆な巫女で御座りませア 北八  
 ナニ巫女だコリや面白へ。ちと生口を寄て貰ひてへもんだ 彌次 もうれそかるふ。セツ  
 からハ寄ぬと云とだ 宿女 ナニまんたハッ少し過で御座りませア 彌次 そんなら聞て  
 見てくんな。おいらが山の神を寄て貰をふ 北八 コリヤおかしい 宿女 いんま聞て上ふ  
 せよ ト此内膳も齋。女奥の間へ行。かの巫女よ其事を聞合と。巫女承知の由あれば。  
 宿の女水と汲来る。彌次郎過さりし女房の事を思ひ出 巫女 宿の女水と汲来る。彌次郎過さりし女房の事を思ひ出 巫女  
 て。まきみの葉に氷を向ると。巫女は先神おろしを初と 巫女 そもく 謹みうやま  
 つてやたてまつる。上は梵天帝釋四大天王。下界に至れば。おんまやう王。五道の冥

官。我日本ハ神國の初め天神七代地神五代の御神。伊勢ハ神明天照皇太神宮。外宮ハ  
 の四十末社内宮ふは。八十末社。雨宮風の宮。月夜み日夜みの御命。北ふべん宮。鏡の  
 社。天の岩戸大日如來。朝熊がたけ福一万虚空藏。其外日本六十余州。総じて神の政所。  
 出雲の國の大社神の数が九万八千。七社の御神。佛の数が一萬三千。四禮の靈いじや  
 う。冥道を。おどろかし。此に請奉つる。ハア恐わりや。此時よ此々方の。そしやうり  
 やう。代々の佛てうま。弓と矢のつがひの親。一郎殿より三郎殿。番も替れ水も替れ替  
 らぬ物の五尺の弓。一打うてハ寺くくの佛壇に響くのうじゆヤアレ。ハアあつかしや  
 くく 能水を向て下さつた。としが弓取の枕添殿も出やううけれど。まやばよむた  
 時精進がさうらひで肴ハ骨迄喰やつたむくひ。今の牛鬼も成て地獄の門番をして居ら  
 る、ゆる。隙がない。夫でわし斗り出まいたぞや 彌次 おめへだれたるのらねへ 巫女ハ  
 アわまの氷を手向ごんの爲よハ。唐の鏡じや。子寶の 北八 からのか、みよア彌次さ  
 んおめへのおふくろのとだ 彌次 ハ、アお母ろか。そんたにやア用ない 巫女 ハアレ

○ 嚴冬  
 着單衣  
 女房寒  
 忍可レ知ル



唐の鏡どんじやア用のお座らさいか。且  
 しゃアそきたの枕添ひじや。あつかまし  
 くも能々問ふて下さつた。そなたの様  
 いくじ無又連添て。わちや一生喰や。くは  
 せ。寒く成ても裕一枚着せてくれた事は  
 なし。寒の冬も單物一ツ。ア、うらほしや  
 く彌次 勘忍してくま。おれもその時分  
 のめんくが悪くて。かはへそふよ苦勞を  
 仕死よ、しやつたが。残り多ひ北八  
 彌次さんおめへなくか。ハ、ハ、ハ、ハ、こ  
 いつの鬼の目涙だ巫女 わすれもせない。  
 其方が着を煩らはしやつ時。且しわあや

○ 見レ往テ  
 而レ不レ歸  
 極樂ハ蓋  
 可レ結 搆  
 處

よく。ひつをかく。瓜の蔓の次郎殿の。よんく病ひ。たつた一人りの子實の脾胃虚  
 して骨斗は瘦こける。米のなし日あしひせがむ。大屋殿の店賃やらねの路次の犬のく  
 そよ。近つても。こごとの云のれを彌次もうく云てくれるな。ひねがさけるようだ  
 巫女 夫にわしが奉公して折角ためた着物迄其方ゆゑに置おくまたがくやしい。質の  
 さかさまよヤア流れ申さぬ 彌次 其代り手ゆへに結構な所へ行て居るだろふが。おれ  
 の今だよ苦勞がたへぬ 巫女 ヤアレ。ハア。何が結構で御座ろふ。友達衆の世話で石塔  
 の建て。下さつたれど。夫成で墓参もせど。寺へ附届もして下されねば。無縁同前と成  
 て。今での石塔も堀の下の石かけと成たれば。折ふし犬が小便を。まかける斗り。つい  
 に水一ツ手向られた事御座らぬ。ほんに長死をそれ色くなめよあひ舐ぞや 彌  
 次 もつともだく 巫女 其つらひ目は合奇から。草葉の影で其方の事を片時わすれぬ。  
 どうぞ其方も早く冥途へさて下され。やがてわちが向に來ませうか 彌次 ヤアレどん  
 だ事を云遠ひ所を。かあらと向よ來るふやアおよばぬ 巫女 そんならわしが願をのさ

へて下され 彌次、何成とく 巫女、名残おしや。かたりたひ事。とひたひ事敷のざり、つさせね  
 座りました 紙よくるみていだす 北八 くら開の恥を。どうくわかるみへ。ぶちま  
 けて仕廻たハ、くく 時、彌次さんおめへ。とんだふさぐの。ナント一盃香ふじや  
 アねへが 彌次 夫もよのろふ ト手を叩き女を呼 巫女 今日のお前様方ア何所から出  
 るざりました 彌次 アイ岡部から来やまた 巫女 夫をお早ようお座りました 彌次 ナニわ  
 つちらア歩行事ア韋駄天様さ。サアト云と十四五里宛の歩行さやす 北八 其代り跡で  
 十日程の役又立やせぬハ、くく 此内酒と肴 彌次 ちと上りませぬか 巫女 見たし  
 の一向下ざりませぬ 北八 ちららのお方、どうだ 巫女 の、さんお出サア。お釜さんも  
 れ来なさいまし 北八 ハ、アおめへのおふくろか。エ、こいつのめつたあこたア。云れ  
 ぬはへ先上やせう ト是より酒盛とあり。さぬつおさ、つ此巫女共思ひの外の喰ひぬ  
 けにて。いくら香でもしやア、くとして居る彌次郎兵衛北八の大

○ 彌次 無言

きに酔が廻り色くおかまきしやれあれ共 何とおふくろさん今夜おめへのお娘を  
 余りくだくしけれの略を北八悉じたて 彌次 イヤおれがかりるつもまだ 北八 とんだ事を云。お前こ  
 わつちよ貸てくんなせへ 彌次 今宵の精進でもしてやりなせへ。可愛そうは死だ嗅衆か。あれ程は思てどふぞ早く  
 冥途へこぬ。頓て向にこようと深切に云じやアねへの 彌次 ヤレ夫を云てくれるか向  
 ひよこられてたまるものか 北八 夫だからお目への由さ。サアおふくろ此方よきまつ  
 た ト巫女の娘よしおたれ 巫女 およまおさりますせ 巫女の心、 娘が。いやあらわたま  
 での 北八 最ふこふおつちやア。だれかれの見さかひひない ト夢中よ成てしやれる此  
 爰よもあれ共罌す。早酒もおさまり彌次郎北八も、次の間に歸り日か暮るやい 内勝手より膳も出て色々  
 あや床をどらせ寝がける奥の間も草臥やもろ寐かける様子北八小聲にて 何でも  
 巫女の新造めが。いつちちちらのはしに寐た様子だ。後に這掛てやろふ。彌次さんお  
 目へ寐たふりなぞは通り者だぜ 彌次 れきやアがれ。おれがしめるハ 北八 氣のつへ、  
 大笑だ ト云つ、兩人ながらぐすでも夜も五ツ過四ツ廻りの拍子木の音枕は響臺所  
 よ明日の支度の味噌摺音もやまければ只犬の遠吠のみ聞へて物淋ひしくふけ渡るに

○北八  
一生之  
榮譽死  
嘗無恨

○彌次  
尙振此  
婦々之  
醜可想  
見

北八時分の好ど。そつとあき出て。奥の間を窺へば。行燈さへて。まつくら闇。そろ方よりものをも云と北八が手を取て引摺寄る。北八こいつの有難と其ま、夜着をそつぼり。手枕のころひ寐又假のちさりをこめし跡の。二人共前後もしらす鼻つき合せてぐつと寐入。彌次郎兵衛一ト寐。最ふ何時だしらぬ手水は行ふ。コリア真つくらで入まて目をさませ。をさあがりて。是も奥の間へ這込北八が先を越たどの露しらす。方角がしれぬ。ト小便に行ふりにて。是も奥の間へ這込北八が先を越たどの露しらす。ひ北八がムニヤムニヤいふ口びるをねぶり廻し。わアイタ、くく。彌次北八か北八んぐりとかみ附く北八さきもをつぶし目を覺し。此聲は北八と寐て居。コリヤハイおまぬち何だそ彌次三かエ、きたねへペック。ト云聲の婆々の巫女北八の二度ひつくりうく。まの静よしなさる。娘が目と覺とに。こいつ取違たかいま。ト這出てそくと次の間へ逃歸る。彌次郎も逃。お前此年寄をさぐさんで今逃るとい御座らんととるを巫女手を取て引づりあからぬ。彌次イヤ人違へだおれでい。婆はアインチそう云はしやますか。わし共こんなとを。商賣にやアしませぬが。旅人衆の伽でも去て。ちつと斗しの心附を賞ふが世渡り。はらさんくさぐさんで只逃るといあつかましひ夜の明る造わしがふどころでねやしやませ。彌次是はめいわくな。ヤイ北八く。婆はアレハイ大きき聲をささや

ますか。彌次夫でもおれのしらぬエ、北八めがとんだ目よ合ーやアがる。トやうくなして逃んとすれば又とりつくと。つきたをーて。がた。ひしどけちらかしをうく。次の間へはいこみながら。巫女アと思て忍び北八ふ。口と寄たるとぞくやーさ。まの、めまたき驛路のいそかしけよ。引つる、朝出の馬の嘶又旅勞れの目をこすりあがら。彌次郎北八あき出て支度とる内。相宿の巫女か顔ふくらがしぬるもおかしく。爰と立いで古宮譽田の八幡を打過。右よ。まうどの畑。嫁が田といへる。見ゆれの彌次郎兵衛。干からびーまうとの畑よ引替て。水澤山の嫁が田ぞよき。夫より搦井川と云所に至りけるに。昨日の雨つよくまて。橋落けるにや。行かふ人みづから股引を取裾まくり揚て爰を渡るに。彌次郎北八もいざや引連て渡りなんどとる折柄。京登りの座頭二人連。此川の歩渡りなる事を聞けるよや一人の座頭。犬市モシ川の膝さきも御座り舛かき。北八さやうく。まかし水が早いからか目へ方アあふ

あゝ。用心して渡りませへ 犬市 ハア成程水の音がよつ程早い  
 犬市 イヤこゝらがどうか浅いようだ。コリヤ猿市二人ながら脚半を取も面どうだ。  
 ね主若役よおれをおぶつて渡れ 猿市 ハ、く、く、づるゐ事をぬかそ拳で参ろう。何  
 でもまらた者が。おぶつて渡るのがよしか 犬市 コリア面白いサアこんさんちア梅  
 で猿市 りやんどうさい  
 ぞく 猿市 エ、いま、しいそんち。此風呂敷包を貴様いつしよ。しよはつせへ。  
 ソレ由かサアこい、ト支度して脊中を向る。彌次郎是ハ有難と猿市よおぶされば  
 渡るとこなたの岸 猿市ハ連の犬市と心ねてさつ、と川へ這入あんなく向へ  
 残りたる犬市 ヤイ猿市どうも早く川を渡さぬか 猿市向の岸よ、コリヤヒや  
 う段ちやつた。たつた今れぶつて渡したよ又そつちへ行ておれをなふるち 犬市馬鹿  
 ア云己れ斗り渡つて太いやつた 猿市 イヤふといとつちのことだ 犬市 コリヤおの  
 れ兄弟子よ向て言語同断を早く来て渡さぬか 市仕方なく又こちらへ渡りて歸り、猿  
 市 サアそんちらおぶさりささる、ト脊中をいだと。北八しめたと手を換ておぶさるべ  
 猿市又さつ、と川へ這入。犬市ハ大きよせさ込

○北八  
 之流利  
 足、碇難



コレ猿市どよに居る 猿市川 イヤこい  
 ついだれた 北八を川の中 北八 ヤア  
 いたさけてくれ、ト手足をもがき  
 飛込引上れば頭から 北八 エ、座頭め  
 骨迄くさる程ぬれ、  
 が。とんだ目よ合しやアケつた 彌次  
 、く、く、まづ着物をぬぎやれ絞つて  
 やろふ北八全体彌次さんが悪い。おん  
 のおぶさらせともし、とよ。お目へが  
 手本を出きたからツイおれも 彌次川へ  
 はまつたが。氣の毒さ、く、く、夫  
 で一首やらかした

はまりけり眼のなき人と侮りし。報ひの早き川の流れよ  
 北八 エ、聞たくもねへ。よしてくんな。エ、寒い。トはだかよ成りがた。へながら着物を絞る此内座頭  
 の川を渡。彌次 こ、で干てもならぬへから。着替を出して着やれ。何所で火を焚  
 て貰ておふるかい。北八 エ、いま。しん風を引た。ハアッツシヤミ。トぶつ。小  
 着替を出して着替へくさつた着物の絞て。棒鼻の茶屋女お飯よチ上りマアし。鯨とこ  
 引さげ出掛る程なく掛川の宿に至る。人よやくと。干大根のお吸物もお座りマアせ。蛸のせんば煮もおざりマアす。お休な  
 さいまア。長持人。吹ばナア。吹程ナア、ンエ。持もナかるいナア、ンエ綿をサ  
 ア入。長持は綿をナア、ンエヨウまつたかどうだか。馬のいさ、き彌次  
 チヤ北八見さつし先刻の座頭めらが。あそこに呑でけつかる。北八 こいつのい、事  
 が有。おいらを川へはめた意趣返しをしてやるふ。トつくり聲よて。かの座頭。北八  
 ナイ御免あせへ。茶や女 お出さいます。茶を汲でくる。北八かの。茶や女 お支度でも  
 なさい舛か。彌次 まだ。腹が平んばこまだ。座頭のわきへ腰を掛る。先きの座頭二人此所よ休み酒を呑。犬市

○主説  
 客無ニ餘  
 蓮一矣

ハアねつから酒がたらぬようだ。もう二合やらかそう。猿市 いか様かア御亭主くも  
 うちつと頼舛 茶や女 ハイ。犬市 時に今の川へをまつたへら棒共い。どうしたるふ  
 猿市 夫よハ、先替り目をやらかそう。ト猪口よ一盃ついで。ト口香。下に置  
 でしまいちやつ。猿市 イヤふといやつらで有た。ちやんとおれよおぶさりやアがつて。  
 と元の所よ置く。其代り。水を喰やアがつた。時いたそけてくれるとかなしひおとばねを出えおつた  
 何でも。かすりを取事斗り。心掛てゐるやつごから。大方おいついごま乃灰だろふよ  
 犬市 そふさ。どうでろくな者じやアない。あ、いふやつい。こんな所へ来ても。おての  
 喰逃をして。ぶち乃めされる者だ。イヤ時よ盃のどうした。猿市 ホンニ置すれた。ト  
 口を取揚て呑うとまた。トヤこぼしたそうな。トそこらあたり。ハテめいよふあ。改め  
 所夕酒の。ト又一盃つぎ一口呑で下置と。犬市 からして居る所へ先きのやつらが来  
 てさそう。ト又一盃つぎ一口呑で下置と。犬市 からして居る所へ先きのやつらが来  
 たらおかしかるふ。猿市 ナニおいつら。大方着物を絞たり。干たりして。まだあつち  
 よまごつゐて居るだろふ智慧のないへら棒共だ。ト云ながら盃を取揚た所。猿市 是の  
 が又酒の。一きいもなし。

どうだ 犬市 又こぼしたか。いくぢのな 猿市 イヤこぼしのせぬが。ハテ奇妙てう來な  
 犬市 イヤ手めへそんな事斗り云て一人で呑茶ト此内北八銚子を取。自分が呑だ茶呑  
 所ト犬市 コリヤ猿酒盃を廻さぬかトひつたくり銚子トヤア此猿市め一人りで喰  
 つてしまやアがつた 猿市 ナアニとんだ事を 犬市 夫でも銚子がさつぱりだ 猿市 何だ銚  
 子がない。イヤ此所の御亭主トわしらを盲とめあどつて。こんを横着をさつまやる  
 か。二合の酒がたつたニタ口香ともうあいは。どうしたもんだ 亭主 ハイ夫の二合まの  
 もたつぶりついで上ましたよ。大方こぼしなさつたもんだんて 猿市 ナニこぼすもん  
 だ。商人ト似合ぬ事をさつまやるから此酒代の拂ませぬぞト大さな腹を立る此時門  
 前より見て居りしが北八ト子もり ワアイ。座頭殿の酒皆なあの人が茶椀へ汲でま  
 のほうへゆびさゝをまてトはつせいた 北八 ヤア此子トとんだ事を云。コリヤア茶だトト云ながら呑さした  
 ふト亭主 イヤお前。酒くさい。そして顔が赤くならしやつたト大方あの衆乃酒と呑  
 ましやつたな 北八 エ、此人もおあじようよ。度方もねへ。わしが顔の赤く成つたの。

茶に酔たのだ。わまのかはつたとで。茶をたんと呑と酔。酒に酔た人の。くだを巻が。  
 茶よ酔た證據より。茶斗り云がくせでならぬ。底で茶斗りながら。どなたも茶よふチ  
 ヤハ、くくくく 猿市 イヤ其手を喰  
 はぬ子供ト正直だ。コリヤアこんた衆  
 が横取して。呑だト違ひトない。酒代を  
 拂トいやれ 北八 茶れや色。茶りトい。茶  
 わるもない事を茶べらトやる茶つきか  
 ら呑だは茶斗り。茶どう衆の茶けを。茶  
 くぶくトた。覺ト御茶らぬ。わるる茶  
 れだ。チヤハ、くくく 犬市 イヤ



是眼の見へぬ者だと思て其ぢやらくらひ。おろつしやれ。ハテ見て居た子供が證據人  
 猿市 まだ慥な事御亭主あの衆の呑だ茶碗か酒くさいか。かぎて見させやれトトウ  
 ぞか

○北、啓  
辨、亭主、  
裁判得、  
中庸蓋、  
不可茶、  
糟

ぬ所へ氣を附られ。北八ちやつと。茶碗をか  
くそふとすると亭主いつとどりかきで見て  
くする。コリヤハイお前ちの。呑ましやつたよ違ひない。酒代を置つしやめまし。  
ト云れて。北八こひつ。イヤ茶けい呑ぬから。茶の代は拂はぬ。茶代なら何ばでも拂  
をふいくらだ。亭主。そんなら茶代をおかきやめな。茶か二合で六十四文。北八ヤ何だ  
茶を二合呑だ。度方もねへ。彌次。エ、めんどうぢや。拂つて。ままつたかい。手めへのす  
るとたア。何でもおさまらねへ。足元の明るい内拂つてましま。ト眼顔でしらせる。北  
四文拂つ。猿市。イヤ早とんだ人たちだ。大方先刻おふさつたもこんな衆であるふ。人  
てやると。ト買酒を横取して飲と云ひまア。盗る衆と云者だ。北八。ナニ盗賊。此どう目くらが。  
トりさみ掛るを。彌次。ハテこつちがわるい。モシ了量してくんなせへ。こいつの茶よ  
彌次郎おしとめ。酔と氣かつよくて成やせぬ。サア茶つくと行ふ。アイお茶らは。ト首捨て。北八  
こ、を立いで足ば。北八。ア、いまくしい今日のとんだ間がわるい。錢を出して酒を  
やよ此宿をうち過。飲さのらへこまされたがうまらねへ。彌次。ハ、くくおれよりハよつ程ちるのねへ

男だ

○三尺  
坊、効驗  
於、今、著  
明、奏

そる事もあす事も皆蘆葎や。茶よまられたる人のまがさ  
斯興じ。打笑ひつ。頓て秋葉三尺坊への別れ道に至り。彌次郎兵衛遙拜して  
脇差の二尺五寸も何かせん。三尺ばらの誓ひ頼めば  
夫より澤田細田と打過砂川の坂道に掛りける。両方より木立生茂りて。日の影くら  
く。折節行さきも。とだへたるよ。誰ともしきずコラレ。旅の人ヲ。ト呼掛られ。雨  
りかへり見れを。片わらの木影よりのさく。とふとこる手よて出来る。どてら布子  
よ一腰ぼつこみ。山岡頭巾をのむりたる髭だらけのむさくろ敷男。彌次郎北八が向へ  
廻り立はだかる。二人ハ。彌次。コリヤ晝日中は何の用だ。山男。イヤ酒手を晝文下さい  
つくりしこ。かから。ませハ、くく。北八。何のとだ夫で落つたソレ晝文。彌次。あつたら肝をつぶさ  
まやアがつて。いまくしい乞食めだ。トつぶやきながら原川と打過き早くも名栗  
道細よ開く櫻の枝あらで。皆めい。にかれる花とぞ。  
程さく袋井の宿に入るに。兩側の茶屋賑わしく往來の旅人各。酒飲食事あとして居



たりけるを彌次郎兵衛見て

爰よ来て行きの腹やふくれけん。されば布袋の袋井の茶屋

此宿はづれより。上方者と見へて綾留の布子銀拵への脇差を差。花色羅紗の装束

掛し合羽を着る。男供一人連れて跡みなり先より。上方者モシお前方の江戶じやな

彌衣左様さ。上方もの。としも毎年下る者じやが江戶の。氣味とい繁昌な所じやワイ

の。アノ吉原へも。ちよこく。さとはれて晝三とやらいふ娼婦を買たが。いつも人に

振れ廻れて行さかる。何程か、つたやら。こちやしらんが。お前方も定めて買なさる

じやあろふか。アリヤ何は程掛るぞいさ。彌次 わつちも女郎買でい。地面の五ヶ所と十

ヶ所のあくした者だが。ナニ晝三位では。わざかな事さ。マア平の晝三なら片まゐ

で。壹分貳朱。茶屋が壹分か。藝者が一組で又壹分。そして一斤くでもとれば。其代

が貳百づ、掛る分の事さ。上方もの。ハチノわしも大見せを所々へいたが。其二斤く

と云い何のこつちやいな。彌次ソリヤア酒一斤肴一斤など。内の酒が飲ぬから別よ

外から取寄る事さ。上方者ハアわしが行た内でい。其様ふことはあつたワイあ。そし

て何も呑ぬ酒の出いませんワイの。あろふよい酒で有たワイあ。彌次ナニそりやア飲

る酒でも飲ぬねへと云て別に取が江戶ツ子の氣性さ。上方者として上方では皆借ても

どるが。お江戸の女郎の現金拂じやそうな。彌次ナニサあそこでも附馬を連れて歸りさ

へそりやア。いくらでも貸てよこしやぞ。上方者ハ、くくくく。コリヤお前の大見

世のお客じやないワイの。その附馬とやら云事の。わしらが店の職人玄ゆの咄しで聞

て居升ダ。晝三買よ。そんなとありやせんワイあ。彌次なくつてさ。かんよわつちら

ア尻よ四ツ手駕の蛸の出来た程かよつた者だ。ナニねへ事を云やしやう。上方者ハア

そんならお前のおなじみの。何屋ぞやいさ。彌次アイ大木屋さ。上方者大木屋の誰じや

いさ。彌次留之介よ。上方者ハ、くくく。そりや松輪屋じやワイな。大木屋にそんなお

やまの。さいもせぬもの。ユリアお前どんとやくたいじや。彌次ハテあそこよも有

やぞナア北八。北八エ、さつきからだまつて聞て居りやア。彌次さんね目へさひた。ふ

○馬々々

暴赤聰

彌次尙

然然





ハイ當所の名物葛漬でも上ケませう 北八 夫が平か。夫斗りじや有めへ 宿引 ハイ夫  
よ椎茸くわいの様を物をあしらひまして 北八 汁が豆腐にまんよやくの白あるか 彌次  
マアかるくして置かい。其代り百ヶ日よのちと張込つせへ 宿引 コレハ異あことをお  
つしやるか、く、く、く、時よもう参りました 彌次 イヤもう濱松か思ひの外早くきたの  
へ

さつ、く、どあゆむよ連て旅衣吹つけられし濱松の風

〔宿引先へ〕サア、く、お着だアよ 宿亭主 ね早くお座いました。ソレおさんお茶とお湯  
かけ扱て 彌次 イヤそんなよ足りよこれせぬ 亭主 そんなら直よお風呂よめめしなさい  
だアよ 彌次 北八 湯灌場の何所だ 彌次さんマア先へやらがまねへ 彌次 ぬま、く、しひことをい  
まし 北八 湯灌場の何所だ 彌次さんマア先へやらがまねへ 彌次 ぬま、く、しひことをい  
ふ男だ手めへ先へ這入 宿女 こつちイ。お出なさりました。ト直よ湯殿へ案内する此内荷  
衛奥へ 錢屋 ハイ兩替のようお座り升か あん摩 お療治をささいませぬの 彌次 ヲット  
通るもん で下さいイヤ貴様眼が有の あん摩 ハイ仕合と片つぼの能見へ升。十年むかしも

○按摩  
雖二片目  
心三有目  
兩個雖  
目明一見  
女亡目

跡よ風眼とやらを煩らひおりました。雨眼共に。かいてもくかつ、ぶして仕まひ居まし  
たが。夫からこつちイ。色々と療治をして。やらやつとこの間。左りの方が能成ました  
彌次 久し振で眼が明ひたら皆んあ。まらぬ 人斗りたるふ あんま マさやうでお座り升  
彌次 見へあ一方も随分療治をささい。あをりさへとりやア見へるもんだ。時に北八  
湯いどうだ 北八風呂 ア、い、湯だわんまりあつくて體が半分水引の様よなつた 宿  
女 ハイ御膳を上げませう トこ、にて膳も出。色々あれ共畧す 彌次 サアあんまさん。や  
らかしてくんあ。イヤ時よ今湯殿から見れば。この内のかみ様かまらぬが病人と見  
へて取亂して居が中、く、うつくしひざる物だ あんま ソリヤア氣違ひでござるのぞ  
北八 氣違ひでも。大事ねへの あんま イヤ聞なさい今よ念佛がはじまり升の 方よてナ  
ヤン、くと鉦の音、あんま ソレお見さん。あの氣違殿のこ、の下女でお座つたが。御  
亭主がふつと。手を附られ、を女房様がひどい焼餅焼で。あの女をぶつたり。はたい  
たりして。とら、く、さらけ出し居ましたが。兎角御亭主の不便がつて。夫から脇よ。か

○盲人  
遭幽霊  
不レ得見  
兩個應  
羨之ヲ

こつて置かりましたを。猶せかし。女房様が。やか間敷云てとうく。氣が違ひ。首をく  
つて死しやりました。そうすると御亭主ごていしゆの又またい、こどもしてあの女を内へ入ると。  
其晩そのばんから女房様のもう靈れいが。どつ、ふて。あの女が又女房様のよう又氣違きちがひな成なりたもん  
だ。夫それでわんちに每晚百萬遍まいばんひやくまんべんをくりかり升しやうトひそく。咄はなすに。彌次郎北八やじらうきたはちも口くちの北  
八きたはち何なんた幽霊ゆうれいが。どつ、いたと。この内へ其幽霊そのゆうれいが出るの。わんま。出るぐんか。彌次  
うそをつくせ。わんま。ナユうそじやアおざらぬ。每晚此屋根の上へよ白しろい者が立たて居  
るのを見みる者がお座り舛むち北八きたはちヤアコリヤ。とんだ所ところ泊とまりり合せた。わんま。夫それにその女  
房様みさまが首くびをく、つた時の顔色かんとくと云物いふものの目眼めくまをくるりと明あて青鼻涕あおばなをたらし齒はを喰くま  
ばつて夫それのく、生いて居ゐるような顔かほでわつ。北八きたはちソリヤアどこで。わんま。まかもソレお  
前まへへの後うしろの椽えん先さきで。北八きたはちヤアコリヤアたまらぬ。どうか。首筋くびすぢがぞくくするようた  
彌次やじわいよくしよばく。雨あめが降ふ出したり。なさけあ。あんま。今夜こんやどりのきつと出でそ  
ふなこんだ。北八きたはちイヤコレわんま腹はらもう歸かへつて下ください。彌次やじアノ又また、さ鉦かねの音ねで一ひとぱ

い氣きが引ひ入いるようだ。北八きたはち何なんにしてもいまくしい宿やどを取とつた。わんま。エ、臆病おくびやうなお衆しゆだ  
ハ、くく。彌次やじもう仕しめへか。北八きたはちのどうだ。北八きたはちおらアもう寐ねよふ。わんま。左様さやうな  
ら御機嫌能ごきげんよくトあんたはいとまごひして立たて行い。此内こゝ女夜具にょやぐを持もつて床とこを取とつて行い二人  
ら共ともいづよあひ。しやれもむだもいではこそ。たゞまじくと寐ね入いもや  
ら。彌次やじエ、いつそのと北八きたはち今いまから立たうじやアねへか。北八きたはちナニとんだ事をことを云いふ。今の  
咄はなでどう夜道よみちがあるか。彌次やじ夫それよこ、の内うち何なんだか。だ、ッびろいはかり  
で人が少すくぬら。うす氣きみの悪い内うちだ。ト目斗めとりばちくとして居ゐと鼠ねずみが。チウク  
くく。北八きたはちエ、鼠ねずみまでが馬鹿ばかしやアがつて。小便せうべんをしかけた。彌次やじ其鼠そのねずみがう  
ら山やましい。おらア先刻さつこから小便せうべんを仕度したくでもこらへて居ゐるに。ヤア何なんだかやわらのな物もの  
が足あしよさつた。北八きたはち何なんだ。猫ねこコヤア。彌次やじコノちく生なめシツ。鉦かねの音ね。チヤ  
アン。軒のき又また落おる。ぼたり。折をり。とまよひ。まよひ子の長太ちやうたやア。チヤン。く  
二人共ふたりとも夜着よぢの内うちへもぐり込こみ。どうだ。彌次やじさんまだ生いてゐるか。彌次やじ南なんまい。く。ア  
北八きたはち夜着よぢの袖そでから差さのそき。どうだ。彌次やじさんまだ生いてゐるか。彌次やじ南なんまい。く。ア  
、時ときにこまつたことがあるも。小便せうべんかもるようだ。北八きたはちかたがひよ。あんな目めよ合あた

彌次 何と思ひ切て一所へ行ふか 北八 雨戸を明てやらかそへい  
と二人いづ所よ。まは  
と障子 北八 サア彌次さん 彌次 イヤ手めへ先へ 北八 向が出るもんだ  
と明けた所が何  
をわけ 北八 さやつと云てたをさる  
か庭の隅よ。白ひ物がちうとにふい彌  
次 ヤアどうまたく 北八 どうした所か  
われを見ねへ 彌次 あれとい 北八 白ひ物  
が立てゐらア。そして腰から下が見へ  
ぬ 彌次 ドレレレ  
戸の外をそつとのぞき。是もさや 北八  
つと云つて。座敷へ這込たをれる  
コリヤ彌次さんどうしたマ、イ彌次さ  
んヤイ  
漸々彌次郎正 亭主 ヤレどうなさいま  
氣づぎければ



した 北八 イヤ小便へ行た處か。あそこふ何か 白い物が居と夫で。此通おくびやうな人

○本草

盲目曰ク

臆病虫

此曰フ弱

虫

さ 亭主様先へ イヤゆれば彌伴でお座り升コリヤ〜おさんやい〜日が暮たに矢  
張干物をなせ取込ぬ。そして先刻から雨がぼろついて来たに。らつちもないおんな  
共だまかしコリヤアお氣の毒様でお座り升 彌次 ナニサ。わつちらアこいんど云こた  
アまらねへもんだがなせか今夜の虫の居所がわるかつたそふな 亭主 ハイお休みささ  
いまし 彌次 エ、いま〜しひ大きよ肝を冷した 椽先へ出て見れば。成程女  
が彌伴を取込で居る二人共小用を  
たして坐敷へ歸り夜着引かぶりて

ゆる靈とれもひの外に洗濁の。彌伴の海苔がこわく覺えて

初めて笑ひを催ふし。心おちつきて色々ど一睡の夢を結ぶに程なく八聲の鶴の聲家

毎よ唄ひつる。早出の馬の鈴の音ニヤン〜 馬士うたばん 晩は御座らりナ

ア。裏から御座れよア。表くろ、戸で音がするよヲエ引馬ヒイン〜 鳥が板家根コ

ト〜 彌次 もう夜が明けたそうを 膳もいで急ぎ支度して立出。此宿場に在

る諏訪明神の  
社をおかみて



○ 蛇在  
舟中ニ不  
足ヲ怖彌  
次等ハ此  
大蛇

を云人だ蛇だア。何の蛇だ親父なん 何だべいとつて生た蛇で御坐るハ 乗合 ヤアくくく 彌次 イヤ貴様も。どんぶ物を持って来た蛇をマア何よまようと思て 北八 こいつハ氣みのわるい。こ、らよハいぬか ト立さばば舟中皆々 ヤア此板子の下よ。とぐるど 卷て居るハ。ソリヤそつちの方へ行ハ。エ、コリヤアさみのわるい。ソレく明荷の下へ這込んだハ。コリヤマア。とんだ人と乗合えた ト舟中上と下へひつくり替し立 け蛇を何のくもなくなつ 北八 コレくハ目へとんだとをさる。夫をふところへ入てお かと又懐中へ入れる 又這出升ハ。海へうつちやつて仕舞あせへ 親父 インニヤ儲そつち成すさぬ。わし ハア。讃岐の金比羅様へ行者だが。道中路銭につきて。そべいようが御坐らさいか 道で此蛇を取たを。さなを蛇遣ひよ成て壹文宛貰らつて行者だのら。コリヤわ 玄が商賣の種で御坐るハ 彌次 イヤなんば貴様か商賣の種だつて。蛇を持って居らる と。どうぞて一所又居られる者だコレ船頭殿なせこんな者を舟よれさせた 船頭 わしら だつて。よもやめの人ハ蛇を持って居ようといしりませぬ 乗合 コレ親父どん何のか

○ 股間  
飛龍潜  
居ス如キ持  
蛇此レ瑣  
事

○ 親爺  
蓋知ニ地  
面屋敷  
被流カ

のと云つ共。多勢にぶ勢ハ。早くうつちやつて仕舞なせへ 親父 インニヤ。やアだ成 中さぬ 北八 ならざア貴様ぐるめよ海へぶち込でしまうがどうだ 親父 ナ、サ。はめる ならはめて見さつしやい。エ、まよも手ぶしが御座るハ 北八 エ、此親父めは。ふてへや つだ ト北八立か、つてかの親父のひなぐらを取と。ふどころから蛇の頭がによつて 出る北八さやつと云てとひのく。彌次郎つ、ハて立上りさせるよて親父を一 ツくらわせる。親父腹を立てかみ附と舟中皆く取 皆人 ソリヤ又出おつた。ぶちこ さる内。又彼蛇が親父の袂から落てのたくり廻と 北八 自分ハ腕差の小ヒリでやつと蛇の頭をおさへる。蛇其ま、鞘も卷附だ ろせく 北八 自分を腕差の小ヒリでやつと蛇の頭をおさへる。蛇其ま、鞘も卷附だ へ打込けるハ蛇は浪に巻かれて見るを脇差ハ竹光ゆゑ浮て流 乗合皆く ア、是で。 る。北八 面目なくまよけて居るゆる親父是れよて腹をいへる ねちついた。玄のしお氣の毒さといあきたのハ腰の物だ 親父 といハ此年又成か脇差 の流れるのを初て見すた 北八 エ、尻の穴のせめるとをいふ親父めだ奥州の衣川で。 辨慶がたちからうじやうました時ア太刀も鎧も流たど云とだ 親父 ハ、くくこりやア ハア横つ腹がいさく成すハ柳樽と云本よ衣川財槌はがり流れけりど云ふ句がわりや。 辨慶の差てお出やつた腰の物ハ金で拵へたもんだら流べいこたア。御座んないハ



北八 エ、云をせてねきやア能しやべる。死にぞこないめだ張とばしてやるふ。ト又立  
かま掛るを彌 次郎おし留め。もう北八ハ、よきや乗合の衆の手前も有静まれ。ト是をなだめる  
くな一船頭 サア、お關所前で御座る。笠を取て膝を直さつしやりませ。ソレ、船  
が當り升るぞ 乗合 ヤレ、と、こほりあく着て目出たい。程なく舟は荒井の濱  
を上りお關所を打ち過ぎ。彌次郎北八も舟を上り。

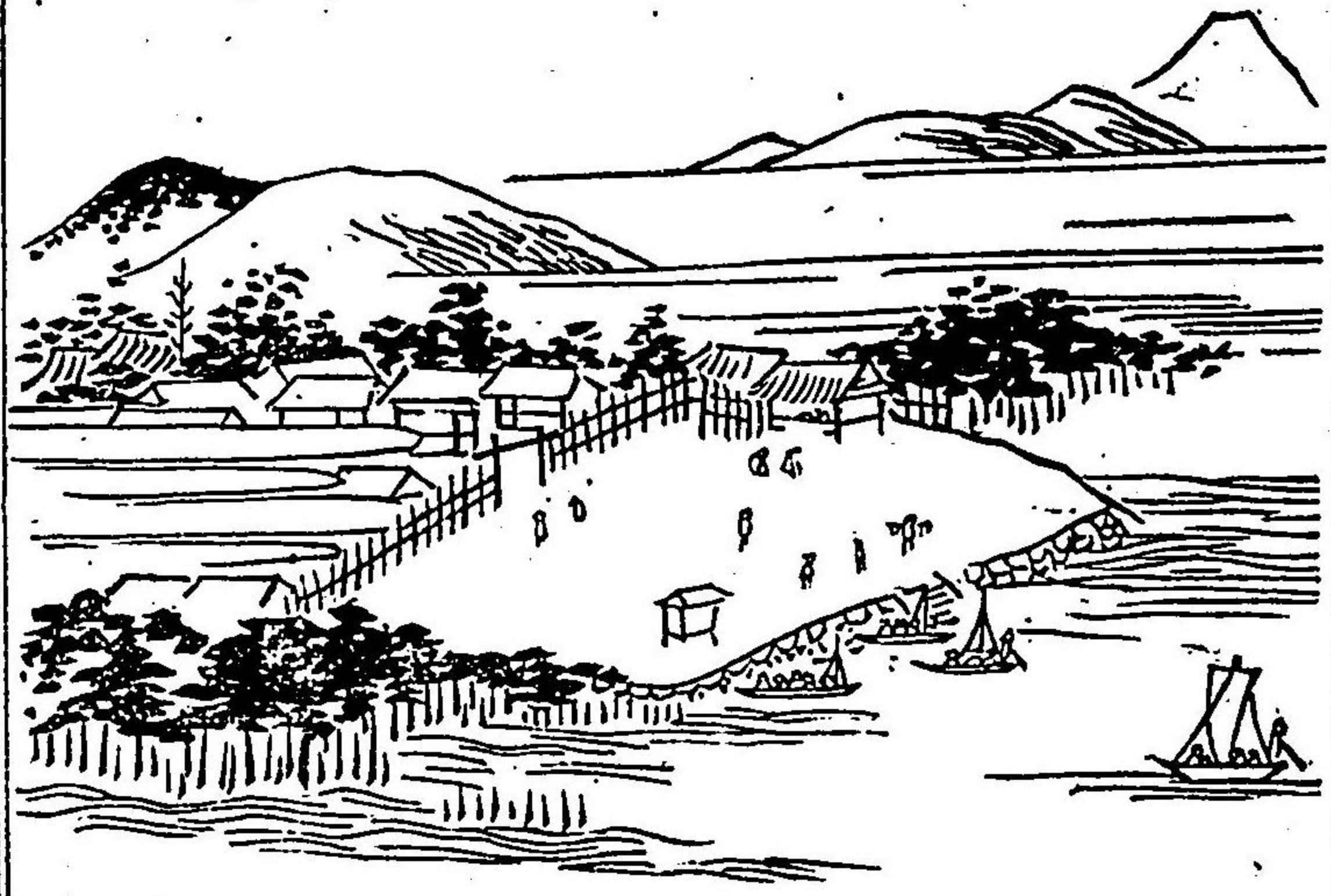
舞坂を乗出したるは今切と。また、くひまも荒井よつづく。さるよても腰の物の流たるは前代未聞の咄しの種とみづから打笑ひつ、北八  
竹籠を捨て仕舞し男ぶり。おくつふしとは、もういれまひ  
夫より二人は此荒井の宿酒汲かはえて足を休めぬ

○四編

由縁齋貞柳の狂歌よ。螺貝の出し昔のきらね共今吹の能き追風なりけりと讀し、東  
海道よ名だたる今切の渡まよあん。其のみ明應の頃山の奥より螺貝あまたぬけ出。夫

○聯句  
奇妙々々

より海上あしく成たりしを。元祿年中公  
の命よよりて海上は數萬の杭を打。蛇籠を  
ふせ。往來渡船の難澁をそくひ給はりし。御  
惠の有難さに。風和らぎ。浪底く成て。渡る  
は難あく。かの彌次郎兵衛北八。爰を打渡り  
て。荒井の驛よ支度と、のへ。名物の蒲焼よ  
腹をふくらし。休み居たるに。げにも來往の  
貴賤絶間なく。舟場へ急ぐ旅人の足も空よ。  
出舟を呼ぶ聲に連て走り。問屋へ掛る宰領  
の口やかましく。課役も觸る馬差もついで  
罵る。旅籠屋の袴腰横ちよに曲りて走り  
茶屋女の前垂筋違ひよ引ぞつて飛ぶ。長持



人足。横よ立てうたひ。馬士後を向て。ひよぐりながら行道すから唄うらが生根の濱  
 名の橋よエ。今いとたへてエ。音もせぬヨエ。ドウ。茶や女。お休さりませアし。く  
 コレ馬士どんお下申さつせへよ馬士ヲット旦那様ソリヤあつひりが浮雲。ト茶屋の  
 を引入る。此の輕尻よ乗たるい。木綿の鼠小紋よ。ひうちちの所。黒編子を當たる。ふつ  
 さき羽織を着たるお侍。馬よりありて。北八と彌次郎が休で居る向のしやうぎよ腰を  
 かけ茶や女。お茶あかりませ。ト茶を吸て来る。お侍女の顔を侍。モウ何時じやろふ  
 茶や女。九ツ半でもお座りませよ馬士。きんよようの今時分じやろかい侍。支度いたそう  
 何ぞ有か茶女。おるぎの蒲焼かお坐り升侍。何じやお内儀の蒲焼か馬士。御亭主の泥龜煮  
 のあぬかな。ハ、ハ、ハ、ハ。時よ旦那様お荷物のは置升。お小づけが丁度五ツ侍其  
 貫差のこれへたもれ馬士。ハイ。モシ旦那様ちとお願かね坐り升へ、くどうぞ御  
 酒を一盃たべとうお坐り升侍。ホウ御身酒がそさか馬士。ハイ飯よりのそさでね坐り升  
 侍。遠慮のちるとじや勝手よ吞やれ。身共たべうづあらば。ふれまをふものよ。のいも  
 く下戸じやから。せひがある馬士。ハア旦那のあがらせとも。ハイどうぞ。頂戴たふ

○空尻  
 曳ニテ空ツ尻  
 而生活  
 遅名儀  
 自稱

お座り升侍。ハア解せた。お身手酒をくせと云のじやな。イヤ罷ならんぞ。道中御定法  
 の賃銭共。相拂つて罷通る。別よ酒手あつと云とは。決してならんじや馬士。左様でい  
 お座り升が。どうぞ底を侍。イヤたつてといは。遺はそふが。請取書をしやれ。身共歸  
 國の節。問屋共へ相届る馬士。いつたい輕尻のお荷物よは。重過てあるから。どうぞ御  
 量簡あされまして。侍。然むツレ八錢も遣いそふ。トくわんざしより馬士。ハイせめて十  
 六文下さりませ。侍。然ば身共了簡の以て今四文遣はそふ。ト錢四文はふり出せてやる。  
 引侍。コリヤ侍て。南無三寶あやつ最ふ何所へか行あつたそうある。身共大切の草鞋  
 を。馬よ附て置たが。以て行あつたそうある。残念ある。江戸迄はかれる草鞋じやものを  
 トぶつ。く小ごとを。北八。モシあなたは江戸へた下りで御座り升か。侍。左様。く。北八  
 云と北八おかえく。今承り升れば。草鞋一足を江戸迄おはささるると見へましたか。けしから道がお上  
 手で御座り升の侍。イヤ身共手作よ致した。草鞋しや程よ。一足有といつても。江戸迄行  
 戻りはさをり升。彌次。やんに草鞋の切るは。あるさ下手で御座り升が。あなたは道が

○ 泰固  
謂五百  
文

あ功者あとだ。然そ私も此鞋草は一昨年松前へはるて参つたが。歸る迄何共御座りませなんだから。ままつてゐるて。去年長崎へもはるて参るぞ。そして又今度はるて出ました。が。御ろうじませ。まだ何とモ御座りませぬ侍。はて儲け手前は身共より道が功者じや。んが、致せば其よう久そく草鞋かはかれ升な。彌次ナニサ草鞋のそ結よしても切れませぬ。其代り。私はどうも脚半が切て成ませぬ侍。夫はどうして。彌次。私は旅へ出まると馬に乗づめに致まそから。北八。れきやアがれハ、くく。彌次。サア行ふあなた御ゆるりとアイお世話。二人共二川迄の駕を取て打乗り。行程はハヤ高師山。橋本の北に見ゆれ。彌次郎兵衛れの狂哥を口づさむ。驚がらむ高師の山の冬はさう。雪に真白く見違やせん。此あたり。向より来る二川の駕。行合。二川の駕かき。どうじや親方。かへていかせよ。こちらの駕かき。なんぼおこと。二川の駕。げんこやらせよ。夫でいじや御座り。こちらの駕や。ま、よ棒組まけてやらアせ。ト駕の相だんでき。旦那様方駕を替へ升から乗替

○ 遇不  
風流漢  
鹿無鹿

て下さりませ。北八。二川迄打越だがい、か。ト此内二川の駕も乗来る男。こちらの駕も。北八をのせ。旦那の仕合じや。コリヤア宿屋駕でお座り升から。蒲團がしるて有丈。お前方の替さしやつたが。お徳といふ物じや。北八。ほんよそふだ。トいひつ、駕も。した居たるに心づき。何心無く蒲團のわひだを探り見れば。四文錢一本有。儲け今迄乗て来た男が。爰に置いて忘れたと見へた。何でもこいつせしめうるへしと北八。そつとかの一本をおのがふところへちやくばくえて。そしらの顔をして居る。此内早くも白須賀の驛に至る。遣入口の茶屋女。表よ出呼たつるをみて彌次郎兵衛。出女の顔の黒さも名よめて、七なんのくそ。白須賀の宿。此宿と打過。程あく沙見坂よ。ま。掛るよ。是ぢん北の山つ、まよえて。南よ蒼海漫々と見へ絶景まことに云斗りまし。風景よ愛敬あつてまをらしや。女が目元の沙見坂より。北八が口つさみたるを。ハア旦那のゑらい哥人老やな。アレ向ふの山を見さしやりませ。駕の先棒さ、つけて。ハア旦那のゑらい哥人老やな。アレ向ふの山を見さしやりませ。鹿が居かり升。北八。ドレ。是を面白。先棒。めいよふお江戸の旦那方のあんな面白ふもあ。ちくせうめを。珍らしがらしやつて。さんよようも發句とやらを言つ

しやれたお人が有た 北八 おれも今の鹿で一首よんだ。貴様たちよ云て聞せたどつて。馬の耳は風だろらが。こういふ歌だ。奥山に紅葉踏わけ啼鹿の。聲聞時不秋のあし



レ女中そこへ酒を壹升でも二升出も味へ肴を附て出してやつてくんぞ 彌次郎駕 乃内よて  
ヤ北八とうした大分おらうふうあを云る 北八 ナニサ鳥渡香せるが何所でも此位を物

き。何と奇妙か。後棒 旦那のゑらい者じや。わし共のいもくまらぬが。何にしされ。歌が直よひゆつと出るといふ者じやのらる

らい。北八 鳥渡た所が此位な者よ。イヤ貴様たち。わんまり讀てくれたから酒が

呑し度成た。爰の建場か。先棒 猿が番場でお座り升。サア棒組一ふく吸ていかアぞ 屋の

門口は駕を 北八 皆な一盃つ、呑つし。コ

あるまて休

座り升。サア棒組一ふく吸ていかアぞ 屋の

門口は駕を 北八 皆な一盃つ、呑つし。コ

あるまて休

座り升。サア棒組一ふく吸ていかアぞ 屋の

だ ト先刻ひろいし四文銭 彌次郎 手めへ夫と皆あがなるか 北八 したたことよ 彌次郎 面

白へはいらも御馳走よあるふ ト彌次郎駕を出て見せ先よとはると頓て 是ハ有難お

座り升。旦那いたたき升。コリヤ 棒組何所へ行さヤ。皆来されの。先刻の猿丸

太夫様が御酒を下されるハ ト駕かき四人寄りて香掛る。彌次郎もおかしく。彌

次サア 御亭主いくらだの。御酒代ハ駕の旦那がお拂ひだ 亭主 ハイ 酒と肴で

三百八十文でお座り升 北八 コリヤどうてきよ食やアかつた トふせうくよかの銭

付 ヤほんは棒組先刻の一本の銭はどうした 棒組 ナ、夫 旦那あなたに乗て御

座らしやる。布團の間は四文銭壹本入て置ましたが有か見てくだされませ 北八は

つくと ナニ爰よか。イヤ見へ無へ 駕か 旦那無とはあらまい。儘よ入て置ました 彌

次 先刻見りやア北八手目へが蒲團の下うら出してひねくり廻て居た銭ぞやアねへか

駕かき 夫でお座り升 ト北八心の内ふいまくひとを云と彌次郎をにらむ。彌次郎

ころから一本だして布 北八 ナ、 爰よあつた 駕かき サア棒組此元氣でやり

○猿松  
天夫仰  
天之聲  
亦悲